

目 次

2007年度総会講演録

文禄の役と二神氏	愛媛大学教授 内田九州男	1
シリーズ		
二神氏ゆかりの地を訪ねて(第10回)船ヶ谷二神氏	編 集 部	21
系譜・家紋紹介 船ヶ谷二神氏(第10回)	二神 英臣	30
特別寄稿		
① 余戸二神と医学	齋藤 文嗣	43
② 双水執流の成立と二神半之助	白木 良彦	66
役員をつぶやき		
傘寿を迎えて	二神 浩三	70
感動のトライアスロン中島大会	二神 俊一	74
船旅断章	二神 重成	77
父と防予の島々の思い出	二神 重則	79
雑感(二神さがし)	二神 宏介	81
港山二神氏の系図	二神 康郎	85
余戸二神氏について	二神 信助	88
不可想像男	二神 久蔵	92
卑弥呼の墓	二神興三郎	94
二神小学校の行く末に見る今後のこと	豊田 渉	96
「ふたがみ」にまつわる話		
(1) 二神島の近況 たった一日の絵画展 ～島に残る二神司朗作品展示～	豊田 渉	99
(2) 1995年、二神島シンポジウムから 「二神島の調査から見てきたもの」	網野 善彦	101
書籍紹介	編 集 部	110
「二神会」関西支部集いの会報告	関 西 支 部	111
会 則		118
役員名簿		120
入会申込書		121
編集後記		123

文禄の役と二神氏

愛媛大学教授 内田九州男

おはようございます。ご紹介いただきました内田でございます。まず最初に、訂正をしておきますが、私は近世が専門でございますが、中世ではございません。信長から明治維新までが専門領域でございます。二神氏については、会報に庄屋さんが多く紹介されていますが、私はあれが見たくてしょうがないということでして、専門分野はそっちのほうです。時間が50分ということですので、かなりレジユメをはしりながらになると思いますが、話をさせていただきます。



史料①-1とか史料①-2とか史料②とありますが、頭が痛くなるような感じがするでしょうから読む必要はございません。私が読み上げますから耳で聞いておいてください。漢文がおかしくて、私も読めないところがあります。読めないところははっきり申し上げますから、耳で聞いておいてください。もともと漢文として書かれていますから、読み下しをしなければいけません。それで今回のお話をと言われたときに、どさっと二神氏の関係の史料をいただいて確認したんですが、大半が中世なんですね。

史料①-1とか史料①-2とか史料②とありますが、頭が痛くなるような感じがするでしょうから読む必要はございません。私が読み上げますから耳で聞いておいてください。漢文がおかしくて、私も読めないところがあります。読めないところははっきり申し上げますから、耳で聞いておいてください。もともと漢文として書かれていますから、読み下しをしなければいけません。それで今回のお話をと言われたときに、どさっと二神氏の関係の史料をいただいて確認したんですが、大半が中世なんですね。

その中でいろいろお話しをしていたら、「こまばあさん」という話しが飛び出してまいりました。「高麗ばあさん」ということで、後の史料で出てまいります。たぶん当時は、高麗のことを「こま」というはずですから、それに私が興味があるからということで、今日は、「文

禄の役と二神氏」というテーマに絞ってお話をさせていただきます。それから一番最後に、「原史料を読み、そこからの検討」とありますが、若手を増やす秘訣はここにあるんです。

まず最初に、「二神氏というのは文禄の役に出る前後は浪人をしてたのではないか」ということですね。そこをまず最初にお話しをいたします。山内譲さんといって今は西条高校の校長先生におなりになっていますが、愛媛の、特に瀬戸内の関係の中世史の専門家でございます。村上水軍を中心に研究されていますが、その先生が「海賊衆村上氏と海城伊予の国鹿島城の場合」という論文を書いています。これを読ませてもらいました。そうするとですね、江戸時代にできた地理を中心にした「伊予古蹟志」という本の中に、鹿島城（加島城）ですが、「城主は来島通康でその城代を二神豊前守がやっていたんだ」という趣旨の記事が出てくるんだそうです。どうもこれが近世の認識ではなかったかと山内さんはおっしゃってます。山内先生も中世と天正期の史料を追っかけていくとですね、これ多分にあたっているんじゃないかというニュアンスでお書きになっています。すなわち、この時期「二神氏は、来島氏と一緒に動いて、家臣の立場で動いていたのでは」ということが考えられるということです。

ところが、皆様からいただきました、片山二神氏の史料に入っている「二神氏系図伝書略記」というのがございまして、これを読ませていただくと、どうもそうじゃないということになるんですね。そこに引用していますが、「通範同藩河野一族の来島が本家に異心を生じ云々」と書いてあり、そのあと「本家の有力家臣を討つ」とあり、そして、ここでは「二神氏は本家の河野の立場に立って来島とは敵対をするんだ」という記述になっています。それから通種のほうには「稲葉右京之助殿に属す」という一行だけ小さく書いてあります。そのあと、5ページの史料①-2の記述が入ってくるんですね。ですから「どこに所属してどんな所領を持っているとかが一切書かれていない」ということになりまして、所属不明ということになります。同じ

く片山二神文書の中にある由緒と書かれた短い文書の冒頭に「先祖二神隼人介同彦左衛門の儀天正十五年河野家断絶仕り候より浪人仕り候」となっています。ですから、来島と一緒にいたのではなくて来島とは離れていて、河野家が安芸の国で無くなった時に「もうお前は無職になった」と由緒には書いてあります。そのところは、今後追求する必要があると思っています。

さあ、それで文禄の役の史料を読むわけですが、当然、片山二神文書の中に入っている史料でございますので、浪人という立場で考えてみます。

勝軍貝之記

右側の史料①-1ですが、何て読むんだろうと思案しています。「勝軍貝の記」ととりあえず読みます。戦に勝ったときの貝の記録である。意味としてはどうも、戦に勝ったときの記念の貝ですね。これは、先ほども言いましたが、どうも漢文としてはおかしいところがございます。そこは飛ばしますからね。

「その来由を尋ぬるに、わが家祖二神孫太夫道種・彦左衛門種秀兄弟、天正二十年壬辰三月、さきの將軍豊臣吉卿朝鮮国征伐のとき、道種兄弟」、そして、その次の読み方が今までの読み方と少し変えたんでありまして、「武勇の聞こえあるによって」、つま

史料①-1

勝軍貝之記

(略)

其来由尋、我家祖二神孫太夫道種、彦左衛門種秀兄弟、天正二十年壬辰三月、前將軍豊臣吉卿朝鮮国征伐之時、道種兄弟依有武勇聞、前豊後州森領主久留嶋信州、家臣二神監物為一族、命之、頻令招、因属彼公、至于異域、顯數度戰功、終中華萬曆二十年五月廿八日、朝鮮國王李昭之平城陷時、兄弟一番魁入昭王、玉帷金案上在薰醇一陶貝也、則藏杭陶子猷先鋒福島正則、貝器自ら金甲之内之、携来而永為家宝也。嗚呼唐帝之佳也。来速于日域、是全因先祖武功者也、寔家門之美名宜哉、号勝軍貝焉、(略)

二神彦左衛門種美延享二年五月

り非常にこの兄弟は、武勇の士であるということが広まっていたということなんですね。「前（さき）の豊後の州」、豊後の国ですね、「森領主、久留嶋信州、家臣二神監物一族なり」、即ち久留嶋信州の家臣に二神監物という人物がおって、この二神氏と兄弟が一族であるということによって、これに命じて即ち、豊後の久留嶋が自分の家臣である二神監物に命じて「頻りに招を令しむ」、要するに「頻繁に来てくれ、来てくれと監物を通して言ってきた」というんですね。□の字が読めませんでした、おそらく、これによって彼の公に属す。すなわち久留嶋に属して朝鮮に行くことになるわけです。「異域に至り数度の戦功を顕す。終（つい）に中華万歴二十年五月二十八日朝鮮国王李昭の」、これは平壤城だと思んですが、「壤」という字がここは抜けているんです。ほんとは「韓城」と当時は呼んでいますから、名前を間違えたんだろうと思います。「陥るとき（陥落するとき）に兄弟一番」、次がですね、これが「魁」という言葉になっていて、ちょっと意味としてはおかしいんですが、一番槍とか一番に駆け入ったという意味に使っていると思います。先駆け入り、昭王のところへ一番に駆け込んだということでございましょう。あるいは王様の居室に一番に駆け込んで、その次が実は意味がとれません。残念ですが。たぶん殿様のベットか座っている椅子か、そういうものだと思います。その上に薫醇一陶貝があつて、薫醇だろうと思んですが、普通だったら芳しい匂いがするとかいうことになるんですけども、それでは意味がとれなくなります。陶器の陶と貝ですから、素晴らしい色を持ったというな意味であろうと思いますが。一個の陶器と貝があつた。即ち、蔵杭（ぞうこう）と読んだんですが、実はこれも意味が通りません。「陶子をひそかに抱え込み、先鋒の福島正則に献す（差し上げた）。貝器自ら金冑のうちに之を隠す」。自分の冑のなかに貝だけをを隠した。そして、焼き物のほうは福島正則に差し上げた。携え来たりて持って帰って家の宝にした。嗚呼唐帝の佳□か来遠か、日城、日本に遠くやってきたということですね。唐帝ということですから中国の品物

と考えていいでしょう。それが、すごい作品が非常に離れた日本までやってきたんだということです。「これ全く先祖の武功によるものなり。寔（まっこ）と家門の美名むべなるかな。勝軍貝と号す（名づける）」。

こういうふうに読んだらどうかということでございます。で、勝軍貝の記ということですが、最初の一部を省略しています。品物の形態とかを詳しく書いてくれています。わからないんです、意味が。続かないんですよ、文章が。来歴がそこに書いてある通りでございます。延享二年、江戸時代の間ぐらいですが、二神彦左衛門種美という人が、こういう貝の来歴を認（したた）めていてくれたわけでございます。

次は、史料の①-2を読みます。少し意味がちがってきている部分もございますが、全体としては同じです。これは系図のなかに、さきほど申し上げました通種という方のところに書かれているものです。その後ろにカギカッコを入れて、付箋をつけておきましたが、この文書のうえに紙がひっつけてあるんです。その紙に古文書のあな文字でこういうことが書いてあります。レジユメつくるときにちゃんと入れようと思っていたんですが忘れてまして失礼しました。

「二神氏系図伝書略記」

史料①-2

羽柴太閤秀吉公朝鮮御征伐之時、属福嶋正則来島越後守通総手則朝鮮於潤山国王李昭「一壤城陷時、兄弟一番魁入昭王帷金案上在黒醇一陶貝□也、則ち蔵□而陶子献先鋒正則、貝器者自金甲之内□之携来為家宝、其刻官人ト覚エテ稚女ヲ抱キ逃走スルヲ追掛奪取、彼ヲ打来島手ニオクリ感賞ニ預リケル、其後稚女ハ兄弟ニ給リ召連レ帰朝之後種範家ニ在テ慶安三年六月相果 諸家ニハ不知於当家珍事トシテ記之者也

（附箋）

「文禄年中太閤秀吉公朝鮮御征伐之刻、兄弟属福嶋正則来島越州之手、向朝鮮二時、明朝之万曆二十年五月廿八日功国王李昭之平壤城、兄弟先登乱入城中、玉帷金案上得陶器貝陶器者与先鋒福嶋氏、兵器者携来テ為珍器、又昭王城中官人携一幼女子走、種範頻進奪之殺官人、則女子貝還家称高麓婆者慶安三年六月死ト云」

それで、また読んでいきますが、「羽柴太閤秀吉公朝鮮征伐の時、福島正則、来島越後守通総の手に属し、則ち朝鮮」、さあここはですね、なんかまずかったんでしょうね、地名が入ってしまいました。「潤山」（じゅんさん）、「うるさん」だろうと思いますが、これは逆にいうと間違ってしまうわけです。「国王に昭□とか、壤城陥る」、ほんとは「韓城」でないといけないんですが、壤の上の字がございません。「兄弟一番に魁入る昭王の部屋に」と、先ほど説明したのと同じように書いてあります。それ以降も全く同じです。「貝器者」、者は「は」と読みます。自ら金の甲（かぶと）、あるいは鎧、どちらの意味でも使います。「之内□携え来たり家宝と為す。その刻み」、ここからが女性の話になります。「官人と覚えて稚女を抱き逃走するを追っかけ奪い取る。彼を打ち来島手におくり感賞に預かりける」。彼をと言っていますが、この場合は官人をどうもやっつけてしまっているようですから、女の子を来島の手におくったんだということですね。ひょっとしたら、その官人の首も一緒におくったかもしれない。その後、「侍女は兄弟に賜り召し連れ帰朝ののち種範家にありて慶安三年六月相い果てる」。となっています。「諸家には知らず、当家珍事としてこれを記すものなり」。と書いてあります。

付箋のほうはもう止めますが、後ろから二行目の「又昭王城中官人一幼女子を携えて走る、種範頻りに進みこれを奪い官人を殺す、即ち女子、貝」、次がですね、還るという意味なんです、家に還りてということになるんですが、家に持って帰ったということの意味しているのかもしれませんが。「高麗婆、こま婆と称し」、文章が抜けてますが、「この者は慶安三年六月死すという」。こうなるんですね。実は史料①-1も①-2の文章も、残念ながら当時の文章ではございません。大分、後のことです。史料①-1は延享と入ってますからこの前後だと思うんですが、①-2はかなり後のようだと考えられます。大体この系図自体が明治まで入っておりますので、ずっと書き継いで明治に至ったのか、明治の時にかあっと整理して出来上がったのかわかりま

せん。そのあと士族になる話が出てまいります、そのときに申請するために系図を整えた可能性がございます。ですからこの系図はかなり批判的に読んでおかないと、そのまま受け取るとかなり矛盾した問題が出てきます。そういうことですね。付箋のほうの字は、大変良い字でございます。貝がこういう由来で片山二神家に伝わっていると同時に「こま婆さん」という女性がですね、朝鮮から連れてこられたというわけでございます。

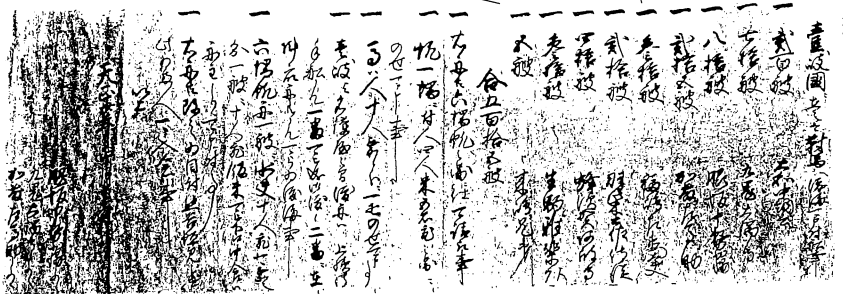
豊臣秀吉朱印状

さあ、これからは、1つには三番目の問題ですが、矛盾点、この系図なり貝の謂れが持っている矛盾点を申し上げます。そして四番目は、ここに象徴的に出てくる女性を連れてきた問題ですね、

まず、三番目なんです、福島正則と来島兄弟は文禄の役でどういう役割を果たしたかというのを少し見ていこうと思います。下に「豊臣秀吉朱印状」を入れています。これは和歌山の九鬼宗隆さん、那智大社の宮司さんなんですけど、そこに残っている朱印状でございます。原文書の雰囲気をつかんでいただくために写真版をコピーしておきました。

一 五艘 来嶋兄弟

一 参拾艘 福島左衛門大夫



豊臣秀吉朱印状（加藤嘉明・九鬼嘉隆・脇坂安治宛、天正20年4月26日付）和歌山 九鬼宗隆氏蔵

資料② 豊臣秀吉朱印状

「壹岐国にこれ在りて対馬へ渡海申しつくべき付船事」というタイトルがついています。従ってここに挙がっている武将たちは、船を持っている人たちで、天正二十年四月二十六日の段階では壹岐に結集していたわけです。それから対馬に渡って朝鮮に上がるという段取りになるわけでございます。その中に、大和中納言から始まって九鬼義隆、加藤嘉明、福島正則の三十艘、それから二十艘 羽柴土佐侍従これは長宗我部です、四十艘蜂須賀阿波守、三十艘生駒雅楽、五艘来嶋兄弟というのが出てまいりまして、伊予の国に関係するのが福島と来嶋が出てきています。このとき、加藤はまだ伊予には入ってきていません。こういう形ですね、系図に出てきた福島、来嶋というのは船を操る水軍として位置づけられていたということになります。史料の一番最後3枚目になりますが、右上のほうに「豊臣水軍と四国の大名」がありますが、これは私が書いたものです。「愛媛県の歴史」という本の中にコラム欄を設けまして、四国の大名たちが豊臣政権で水軍としていつ位置づけられるかということを書いてございます。ちょっと読み上げます。

豊臣水軍と四国の大名

豊臣政権のもと、四国の大名たちの特異な役割（船手衆、水軍）が明瞭になるのは小田原攻めからである。天正十五年（1587）の九州攻めの段階では、四国の領主は、伊予が小早川隆景・来島通総・得居（徳井）通之・安国寺恵瓊、阿波が蜂須賀家政、淡路が脇坂安治・加藤嘉明・菅達長、讃岐が仙石秀久・尾藤知宣、土佐が長宗我部元親の各氏であった。このうち船手衆に指定されたのは、脇坂・加藤・菅・来島・得居の諸氏と能島氏であった。能島氏は能島村上氏をさすと考えられている。この段階では、阿波・讃岐・伊予の軍勢は水軍としては位置づけられていなかったようである。もともとが水軍としての性格を持っているのは菅・来島・得居ですね。脇坂・加藤は淡路にいますから船を自由に動かすことができるということで、最初の水軍は

このように作られていました。

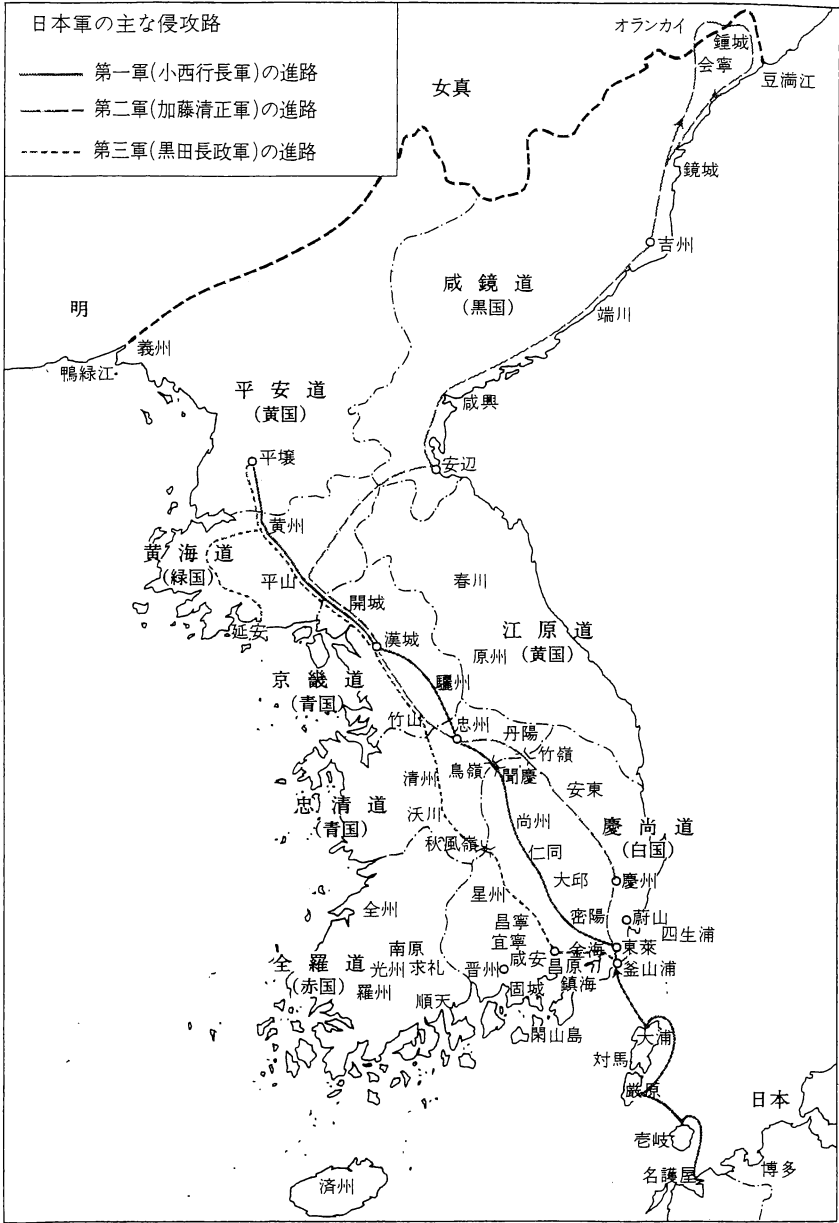
しかし、次の小田原攻めでは、淡路の脇坂・加藤・菅に加えて、四国では長宗我部（土佐）、蜂須賀（阿波）、生駒親政（讃岐）、福島正則・戸田勝隆（伊予）、来島兄弟（来島・得居）と、安国寺を除くすべての領主が船手に指定された。本人たちが船をよう動かすかどうかでなく、水夫の確保が一番だと私は思います。それで四国の大名たちが多く指定されたのだらうと考えています。このとき船手の動員数は全体で20630人。そのうち伊勢の九鬼嘉隆が1500人、紀伊を抑える豊臣秀長が1500人、備前の宇喜多秀家が1000人、安芸の毛利輝元が5000人で、これらの合計が9000人、残りが四国勢で11630人、全体の56%を占めていた。

文禄・慶長の朝鮮出兵では、まず天正20年4月に壱岐にあって対馬に軍勢を渡すための船の動員を命じられた大名は、豊臣秀保・九鬼のほか、脇坂・加藤・福島・長宗我部・蜂須賀・生駒・来島兄弟であった。慶長2年（1597）の再出兵では、船手の指揮者に藤堂高虎（伊予）・加藤（伊予）・脇坂（淡路）が命じられ、「四国衆・菅平右衛門并諸手警固船」が働くよう定められた。四国の大名たちは小田原攻めから豊臣水軍の重要な位置づけをされていたということになります。

日本軍の主な侵略路

それで次なんですけど、また元に戻ります。文禄の役の最初の状態、4月12日に第一軍の小西軍らが釜山港へ侵入、第二軍加藤・鍋島軍が17日に釜山港へ上陸。28日に忠州で第一軍と第二軍が合流し、先を争って都へ行くわけです。そして、5月3日小西軍が漢城に入っていきます。王様は平壤に逃げてそこで立て直しを図るわけです。そのあと日本軍は朝鮮八道を分担区域とします。

次のページを見てください。小西行長の軍勢は実線で書いてます。釜山から東萊・忠州・漢城に行って平壤まで行ってます。少し長い点線で書いてあるのが加藤清正の動きでありまして、釜山から慶州に上



図① 壬申倭乱期の朝鮮

がり忠州に出て漢城から平山の途中ぐらいから右に行ってます。そして、安辺から海岸沿いにずっと上がって豆満江まで行き戻ってくるという動きをしています。第三軍の黒田長政軍は小西軍よりは西寄りを行ってます。釜山から金海に出ずっと上がって竹山あたりから（小西軍と）同じルートで平壤に行って戻ってくるルートと途中、平壤の手前の黄州から延安までというルートで行ってます。清正の動きが朝鮮全土を震えあがらすわけですね。破竹の勢いで走っていきますから。で、この朝鮮八道を分担するんですが、福島軍は忠清道（青国）を担当するんです。もともと水軍ですからあまり内陸部は入らないはずなんです。従って、矛盾点としては先ほどの史料①-1とか、①-2とか付箋に書かれたものを読みますと、都に突入して行って王様の部屋に侵入したとなってるんですけども、本当にそうなんだろうかという感じがします。違う話が引っ付いてしまったんじゃないかなと思ってます。ただ、女の子を連れ帰るという話は別のことですから、都に突入しなくてもできるわけです。ということで、こここのところの記述は再検討する必要があるなあと考えています。ですけども、貝をとってきた話やはかなり有力なもので、王様の場所ではなく別のところでもかもしれません。

日本軍による略奪「乱妨」

今年の大河ドラマ「風林火山」の冒頭に出てきたんですが、「乱妨」をやるというのがありました。記憶にございませんか。戦争に行くときに武士だけが戦いをするわけじゃないんですね、雑兵として一番下で働くものとして農民を連れて行くんです。あるいは農村では日常的に食えない人たちを連れて行くんです。このとき一番下層で連れて行かれた人たちが、許された行為が1つだけあります。これが「乱妨」です。上層の侍はやらないですよ。だまって横向いてんですよ。日常なかなか生活できない人たちは、敵地に入り込んで略奪をやるんです。物と同時に人を搔っ攫うんです。これは戦争のときだけ許される

んです。普段やりますと暴動ですから。これが今回の大河ドラマの冒頭に出てきました。「えっ」と思いました。こんな話しは今までドラマで取りあげられたことはなかったですよ。だから、シナリオ書いた人は、よほど勉強したのかなと思いました。「乱取り」とか「乱妨取り」とかいう言葉を入れておきました。

数年前にこの話しが本になって、この乱妨とか乱妨取りの一番最後のスタイルは、「大坂夏の陣」で展開いたします。大坂という大都市で戦争が行われました。豊臣も10万人前後、住民も入れると、最終的には5万5千人が相手だったんですが、人がものすごく大坂にいたんです。特にご婦人を中心に大坂にいた人間は徳川兵に搔っ攫われました。阿波の国には大坂で捕まえた人のリストがありました。町の中で捕まえたとかいろんなことが書いてあります。大坂という敵地の中にいた人間は攻め込んできた兵隊たちを捕まえてよかったんです。大坂夏の陣では徳川の旗を指した兵隊が女性を引っぱってきたんです。これは今まで戦争の中では語られなかった場面です。実は、日本国内でそういう戦場が中世から繰り返されてきたわけです。豊臣がやる時も、そういうことが起こってたわけですが、だんだん戦争が少なくなってきました。

なんで秀吉が朝鮮へ出て行ったかという話しになったときに、通常は秀吉の名誉欲だとか息子が死んで、ちょっとカッときて行ったとか、そういう話が出てくるんですが、今の歴史学の中心的な先生方の考え方はそういう圧力です。1つは、大名同士が戦争をやって勝って新しい領地を取ってそれを分けてもらう。清正などは典型なんです。戦争をやって勝っていくことによって自分が大きくなったわけですから。大名たちの中にもそういう圧力をかけていたんです。戦争に出かける兵隊たちの一番は、末端の人々が次の稼ぎ場所が欲しいという無言の圧力がはたらいていたと考えられます。秀吉としてはどこかで戦争をやらないと、自分が抱えている大部隊を安全に抱えていることができない。つまり、ガス抜きをしないといけない。で、朝鮮に出て行った

というふうに言われます。もちろん、名誉欲もあったでしょう、領土をとりたいたいということもあったでしょう。和睦の時に朝鮮半分よこせと交渉をやりますからね秀吉は。ですから明らかに領土欲もあったわけですが、一番深いところで働いていたのはそういう問題じゃなかったかといわれています。

大急ぎで調べたんですが、下の表1をみてください。日本の武将で朝鮮に渡ってたんですが降伏して、向こうに居ついて高官になった一族がいるんです。そのことを書いた本の中に、日本で拘留生活をしてた人たちが挙げられてます。姜沆（かんはん）は有名な人物です。もともと朝鮮の官吏をやってから田舎に帰り、塾を開いて子ども達を教えたという学者です。一族とともに捕らえられて日本に連れてこられます。ですが、凄い儒学者でございましたので、伊予に来るまでに京都あたりで学問好きな大名と交流が始まります。伊予に来てもう1回都のほうに連れて行かれるんですが、彼を支援する大名たちがいまして、交渉してくれて一族を連れて韓国へ帰っていきます。これは非常に珍しいと思います。

表1 人の略奪

人名	大名	生活・幽閉地	職	備考
姜沆	藤堂高虎	伊予大津城	官吏・学者	帰国
女子	松浦鎮信の妻	平戸か		
女子	岡田将監（善同）の妻	大垣か		
おたあジュリアン	小西行長のち徳川家康		孤児・5歳位	キリシタン・最後伊豆大島へ流罪
女子	三浦玄中の妻			三浦玄中－臼杵藩太田－吉家臣・妻は尾張鳴海宿に絞技術（鳴海絞）を伝える
李參平	鍋島直茂	有田	陶工	
沈当吉	島津義弘	薩摩苗代川	陶工	
李勺光兄弟	毛利輝元	萩	陶工	
八山	黒田長政？	高取焼	陶工	
鄭希得	蜂須賀家政	徳島	文人か	帰国

（出典）貫井正之『秀吉と戦った朝鮮武将』

それから、平戸の松浦鎮信の妻。本妻なのか側室なのかはわかりませんが、女子を連れ帰っています。それから、大垣の武将岡田将監も連れ帰って自分の妻にしています。それから、おたあジュリアン。小西行長が5歳くらいの孤児だったといわれていますけども、連れて帰っています。小西行長の妻がキリシタンでしたからこの子を成長させて尚且つキリシタンにしています。そして、徳川家康のところに送られまして生活をしています。そして家康がキリシタン禁止令に踏み切ったときに、伊豆の大島に流されます。ものすごく聡明な女性だと言われています。それから三浦玄中の妻。臼杵藩の大田一吉の家臣です。移動している最中なんだろうが、尾張の鳴海宿で病気になって残されます。その時に、絞りの技術を地元へ伝えたとされています。

次の4例は大変有名な話ですが、李三平は有田焼の始まりを担った人物。沈当吉は島津で薩摩焼。それから、李勺光兄弟、これは毛利輝元で萩焼の元になります。八山、これは黒田長政の高取焼きです。この4名は、日本における磁器生産の元となりました。砥部焼きがありますが、あれは、日本では作れなかった。大名たちは争って陶工を連れてきて、自分の領地の中で焼き物をさせたんです。

最後の鄭希得は蜂須賀家政のところですが、かなりの文人だったようで、地元の人たちとの交流もありましたが、斡旋する人がいて帰国したようです。まだまだ、こういう例はあると思います。

次は、北島万次の「豊臣秀吉の朝鮮侵略」という本の中に出てきます。右側に「奴隷買い」、左側に「農民の連行」と書いてます。ポルトガル商人の奴隷買い、先に蔚山の籠城の様子を述べたところで、明日をも知れぬ命というのに、買い取った朝鮮人の首に縄をかけ、杖で追い立てる人買い商人のあるのを見た。これら買われた朝鮮人、さらに捕虜となった朝鮮人は日本へ強制連行された。その連行の様子について捕虜となった朱子学者姜沆はその体験を次のように記している。

そこ（全羅南道務安郡）には賊船6～700艘が数里にわたってあふれており、それらの船にはわが国の男女が倭兵とほぼ半々になるほど

いた。船ごとに突き叫ぶ虜えられたものの声は海や山を震わすほどであった（姜沆「看羊録」）。これら日本へ連行された朝鮮人捕虜の数はいかほどか、それは計り知れるものではない。かくして連行された捕虜は日本に居ついた者もあれば、奴隷としてポルトガル商人によってヨーロッパへ転売された者もいた。

1696年12月3日（慶長元年10月14日）ルイス・フロイスが長崎からイエズス会総長クラウディオ・アクアヴィヴァに宛てた報告によれば、フロイスは長崎で朝鮮人の老若男女1300人の洗礼を行ったが、彼らはすべて捕虜であったという。また、1598年9月4日（慶長3年8月4日）司教ルイス・セルケイラが長崎から日本及びマカオのキリスト教徒である住民と来訪者に宛てた書翰には、①朝鮮侵略が始まってから、日本人が多く朝鮮人を捕虜にして日本へ連行し、それをポルトガル商人が安い値段で買いあさり、マカオへ運んだこと、②ポルトガル船が寄港する長崎周辺の日本人はポルトガル商人が奴隷を捜し求めるのを見て、日本の各地から朝鮮人を購入してポルトガル商人に転売したこと、③それだけでなく、人さらいのために朝鮮に渡って、すでに日本側に服従している地域でも朝鮮人を捕らえたこと、などが記されている。（ルイズデメディナ、ファン・ガルシア『遙かなる高麗』180～189頁）

ヨーロッパへ転売された例として、アントニア・コレアの場合がある。当時、世界一周していたイタリア商人フランシスコ・カルレッティは日本に立ち寄って10ヶ月ほど滞在し、日本の奴隷市場で若い朝鮮人捕虜5人を買って取って日本を離れた。途中、カルレッティはインドのゴアで4人を自由の身とし、1人だけを母国イタリアへ連れて行った。イタリアへ連れられたこの若い朝鮮人は、その後、アント



ニオ・コレアと名乗り、イタリアでその生涯を過ごすこととなったのである。(アビラ・ヒロン『日本国王記』<『大航海時代叢書X I』>219頁。榎一雄『商人カルレッティ』82頁。李元淳『韓国から見た日本の歴史教育』213頁。これもあんまり私たち歴史学が取り上げてこなかったこと。ですけどもこれは忘れてはならない問題だと思えますし、これから多くの人がやらなければならないと思えますね。

次に、農民の連行でございますが、「らんむと申す所のもの、唐人夫婦生け捕り候、予州へ召し連れ帰陣仕り候由、夫婦共予州にて相果て申す候由伝わり候(『高山公実録』所収「大木長右衛門家記」)南原に戦いの際、藤堂高虎の家臣大木長右衛門に捕らえられた朝鮮の民の夫婦は伊予へ連行された。この夫婦も農耕を強制されたことであろう。ともに伊予の地で一生を終わったのである。」と書いてあります。こういう形できちっとやっておりますのはまだ少数であります。

次に、文化の略奪でございます。一番はっきりしているのは書籍です。朝鮮書籍。お経も含めてです。かなりとってきたようで、それは家康のもとへ集められます。駿府で家康は、自分のところに残すものと紀州、尾張、水戸に分けました。今、しっかり残っているのは尾張に残されたものです。

次に、印刷でございます。日本人が活字に触れるのはこの時なんです。宇喜多秀家が都漢城にあった鑄字所、銅で造った活字を使うんです。その銅の字を鑄るところ、文字製造所に押し入って印刷機と出来上がっていた文字をごっそりと持ってきたんです。この結果、韓国では70年ほど字が作れなかったというんです。ものすごい打撃を与えたんです。それを秀吉のところへ献上して、秀吉はそれを朝廷(後陽成天皇)に献上したんです。以後、この活字はどうなったかわかりません。このあと家康が隠居してから朝廷に頼んで、その活字をお手本にして日本で活字を作るんです。そのとき、朝鮮から連れてこられた鑄字工(活字を鑄る職人)がいて造るんです。それが駿府版といわれます。今その活字が、凸版印刷で重要文化財です。残念ながら朝鮮から

持ってきた活字はなくなっているみたいです。書籍を取り上げ、元になっている印刷技術をだめにしてしまうことをやっているんです。

さらに安国寺恵瓊は朝鮮のこどもたちに、いろはを教える、髪形を日本風に変えさせたんです。芦田長政は、捕虜の改姓をやるんです。日本名に変えさせたという話しも伝わっています。どこまでの規模かはわかりませんが。こんな話を聞きますと、戦前社会1945年以前のあのアジア太平洋戦争の中で、日本がアジア各地でやったことがどうも浮かび上がってきます。こういう感覚で見ると単に領地を取りに行っただけでなく、植民地にしてしまう、日本の完全な属国にしてしまう、文化も根こそぎかえてしまうという雰囲気を持っていた可能性があるんですね、この秀吉の朝鮮出兵は。まあ、大変な問題だというふうに考えてます。

やはり、朝鮮の女性が連れてこられたという問題が、そういうことを背景にしているということは、記憶においていただきたいと思えます。

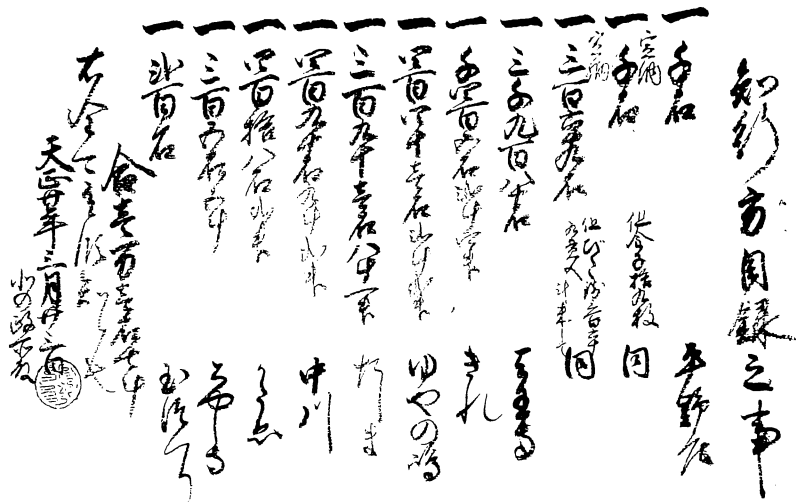
原史料を読み、そこからの検討

最後に、原史料を読み、そこからの検討ということですが、さきほど私は系図の文章をもととの文章を読んでこれを起こしたり、この文章が明治頃に普通の文字に起こされていたりしていくつか系図のほうを書き加えて書かれたのがあります。そういうものを読みながらやったんですが、やっぱり矛盾を感じます、文章の中に。ですから、原史料にあたるのが一番大事になります。特にみなさんの場合には、生の史料をお待ちなんですから、それをきちっとやらないといけません。生の史料がなくて追求している人たちが多いわけです。それから、ご一族の中には庄屋さんを勤められたお家もたくさんあってどんどん近世史料が出てくるということになりますと、それを通してみなさんのお家の歴史が豊かになっていきますね。これを読ませて頂くと色んなところのご子孫が現れて、そこには庄屋文書があったり

膨大なものです。やはりそれは、他の人に頼るんじゃなくて皆さんの中に読みこなす力を育てなきゃいけないと思います。これの（会報「海の民ふたがみ」）何号だったか忘れましたが柚山先生という私の親しい先生が、こちらの地元の史料を読んでくださってます。これはこれで、スタートとしてはいいんです。

豊臣秀吉が妻に与えた知行

古文書というのは難しいというイメージがあるかもしれませんが、そうじゃありません。最後の史料を見てください。これは、豊臣秀吉が奥さんに与えた「知行目録」です。奥さんに一万石の領地を与える。大名並の扱いをしたんです。これは私が学生に一番最初に使う教材です。「漢字は読めなくてよろしい。数字を読みなさい。」と。数字のところを読みますと、「知行方目録之事、一つ千石平野の庄」、これは大阪市内の平野というところ。「一つ定納千石」、次は漢字ですから読めなくてもよろしいんですが「但し金子拾九枚」。これは大判の金貨です。通常、流通には使いません。この場合拾九枚ですから、二十



資料A 豊臣秀吉朱印状

枚としても五十何石かに相当するんです。同じく「一つ定納三百六十石但しびた錢三百六十九貫文斗米して」、この「斗米して」というのがよくわかりませんが、おそらく計ってという意味だろうと思います。びた錢というのは、日本で造られた様々な錢でございます。特に欠けてたり文字さえ読めないような銅の塊、しかも粗悪品です。一番良いのは中国から渡って来た永樂（通宝）錢。それ以外のは、びた錢扱いです。でも、当時まだ日本は、中世以降銅錢を造ってませんので錢が要ったんです流通させるのに。それが、びた錢という扱いです。「一つ三千九百八十石天王寺」これは今、天王寺の駅の四天王寺のある辺りです。「一つ千四百五石二斗四升きれ」今の学生さんたちは、石斗升合が苦手なんです。ちんぷんかんぷんになるみたいですね。僕は逆にデシリットルやリットルと言われるとしんどいところがあるんですけどね。米をグラムで言われても分からないでしょ。「一つ四百四十壺石式斗式升ゆやの嶋、一つ三百九十壺石八斗一升たしま、一つ四百九十石九斗式升中川、一つ四百拾八石式升かたゑ、一つ三百五石五斗はやし寺、一つ式百石玉津くり、合せて壺万壺石七斗、右全く領地在るべき候也、天正廿年三月廿三日北の政所殿」と、自分の奥さんに一万石の領地を与えた、化粧品、お化粧品代です。これは後々秀吉が死んでからも生活していくためのものとして死ぬまで残っていきます。

この史料で学生たちに「数字を覚えなさい、数字はこんなに簡単ですよ」という話をします。壺という字がこの中でいえば難しいかなと思います。四というのもちょっと癖があります。壺式拾が漢字で使われたまに参が使われます。こういうルールを少し頭に入れば数字は物凄いスピードで慣れることができます。その次は変体仮名。ここにびた錢とよみました。3つめの「但し、びた錢三百六十九貫文」とあります。「び」は分かります。「た」が分からない。これは変体仮名で、特殊なくずし方をした仮名です。数字とひらがなを覚えてしまうと漢字は1つ1つ確かめていくしかありません。ですから、漢字がいっぱい並んでいる、しかも、かなり崩しがきついやつはダメです。最

初にそれをやりますと古文書、嫌になります。ぱっと見て数字がいっぱい出ている史料を見つけては読むんです。原稿用紙を使うと一番いいんですけど、マスに入れていって1字読めなきゃ空けるんです。それ自分でやっていくんです。だから、文書を見たときに数字がいっぱいあって読めそうだなというのを選ぶんです。チャレンジしようと難しいのをやったら挫折をしまして、二度とやらないということになるんですよ。是非、そこだけは心がけといてください。数字を何回も何回もやっていくうちに自信ができてきますから、これが1つ。もう1つは、自分がよく知っている土地の史料をやることです。そうすれば出てくる土地とか事件とかが頭に入っていますから、こうじゃないかなと推測がきくんです。そして自分が興味のありそうなところを探して欲しいんです。

以上で、今日の私のお話を終わらせていただきます。

(2007.4.29 北条ふるさと館にて)

註1 史料①-1で「二神孫太夫道種、彦左衛門種秀兄弟」とありますが、系図上では弟は「種範（法名：宗閑）」です。ここでは「勝軍貝之記」の原文どおり「種秀」としておきます。

註2 文中に表記上、「来島、久留嶋、来嶋」とありますが、これは古文書の原文表記に合わせています。

註3 編集のため、史料の大きさ、講演者が説明における言いまわしなどを変更している部分があります。

二神氏ゆかりの地を訪ねて (No.10)

編 集 部

愛媛県松山市船ヶ谷（ふながたに）町

1. 船ヶ谷の歴史

現在の松山市船ヶ谷町は、昭和17年9月1日に誕生した町名です。それまでは四国八十八カ所52番札所で知られる「太山寺」を中心にした門前町の一部でした。松山市太山寺町大字船ヶ谷（昭和15～17年）、温泉郡和気村大字太山寺村船ヶ谷（明治30～昭和15年）、和気郡和気村大字太山寺村船ヶ谷（明治22～明治29年）、和気郡太山寺村船ヶ谷（明治19～明治21年）、第13大区61小区（明治11～明治18年）、伊豫国松山藩太山寺村（天保郷帳・伊豫国村浦記）などと、呼ばれた時代を経てきました。



船ヶ谷町の町並みと県道

明治初年の「和気郡地理図誌」によれば太山寺村全体では戸数246、人口813人（男425人、女388人）牛18頭、馬60匹がいて、近隣の和気浜村（戸数183、人口925人〈男472人、女453人〉）馬木村（戸数91、人口381人〈男185人、女196人〉）と比べてみても太山寺村の村勢が大きいことが判ります。但し、当時の船ヶ谷の戸数は10戸前後ではなかったかと想像されます。因みに昭和45年時点では船ヶ谷町だけで見れば所帯53、人口236人となっています。

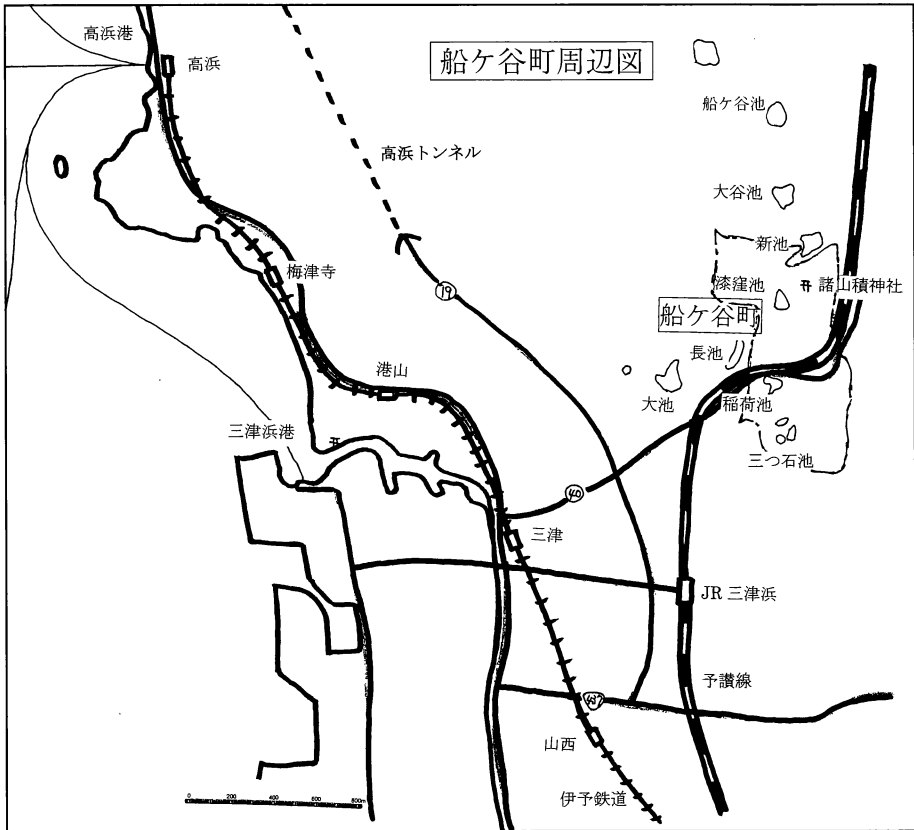
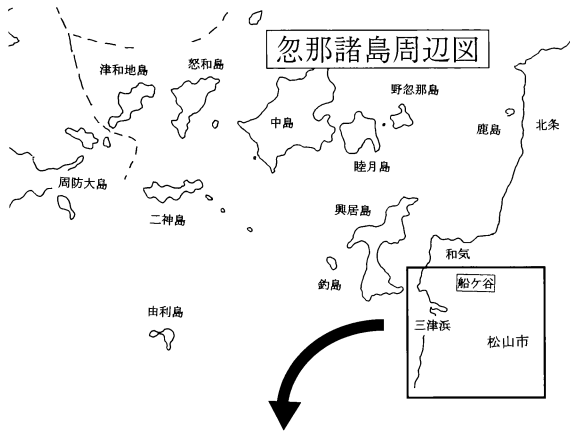
この船ヶ谷にいつ頃から人が住み着いたのかについては定かではありませんが、昭和50年に発見され、その後発掘調査された「船ヶ谷遺跡」は縄文時代の後期（地表下2m）と晩期（地表下1.5m）の遺跡であることが判明しており、報告書によれば現在の船ヶ谷町が標高4mにあることから当時の生活面が海面上2～2.5mのレベルにあったことを証明しています。この事実は、この地に船ヶ谷の名が付けられた時代は海辺部であったことを表し、今なお論争が続けられている「熟田津（にぎたづ）」の箇所を特定することへの傍証にもつながるもので、現在では海岸より4kmも奥地になっているこの町が海辺を連想させる「船ヶ谷」の町名で今日まで残されてきたことを考えるとき近辺に残る「浦戸」「舟木」「潮見」などの地名と共にもう少し掘り下げた検討を加えることが求められると考えます。

なお、額田王によって詠われ、万葉集に収録されている「にぎたづ」について触れた幸田志万氏による「熟田津」論考が『伊豫史談』256号（昭和60年1月）に掲載されているので是非一読をお勧めします。

2. 船ヶ谷の町に行く

「船ヶ谷遺跡」などに見られるような縄文時代の後期、晩期から人々が住み着いた歴史を持つ船ヶ谷に、どの系譜の二神氏がどのような動機で住み着いたのかが「二神系譜研究会」が進めている調査研究の中心的課題です。それらの詳しい内容と調査結果、今後の課題については、別項「系譜・家紋紹介」で報告をしていますのでそちらを参照して頂きたいと思います。

これまでの松山市船ヶ谷町は、松山市の北西部に位置し、一昨年の平成の大合併で旧北条市、中島町と合併してからは位置的には松山市の中心部になってきた感があります。「船ヶ谷の歴史」の項で述べたように、昭和17年までは四国八十八カ所の門前町 太山寺町の小字として行政に組み込まれていました。その理由は定かではありませんが



この地域が地名が示すとおりかつては海辺部であったことと無縁ではないのではないかと考えます。船ヶ谷町の背後に迫る裏山は、山寺の札所、太山寺に繋がり、さらに山伝いを行けば河野氏の遠祖で越智氏祖、小千命を祀る勝岡八幡神社へと辿り着きます。こうした背景があって、和銅5年（712）大三島神社から勧請を受け船ヶ谷の浦戸の地に創営したのが諸山積神社でないかと考えられます。

その後、船ヶ谷の村周辺が、河川による海辺部への土砂堆積、地震などによる海底の隆起によって海辺部でなくなり、海岸から1里も離れた時代に入ってくると、この地でも水稻栽培が行われるようになり集落の生産関係が密接になってくると、本来太山寺村に所属していたものの、それより寧ろ水利を始め農業生産労働力確保の近隣の村との関係の方が重要になってきていました。そうしたことが背景になり遅駆けながら昭和17年9月1日をもって松山市船ヶ谷町として独立。校区もそれまでの和気校区から近隣の久枝校区に変更となりました。

船ヶ谷二神氏出自で二神系譜研究会会員の二神明郎さん（昭和11年生・71歳）は「私は家の近くの久枝小学校ではなく遠い和気小学校に通学しました……」と話しておられます。

町の西方には山が迫り、北方はかつて行政区として所属していた太山寺町が、東方には安城寺町と西長戸町が、南方には東山町が隣接する南北に長い町ですが、船ヶ谷町は他の近隣地区のように住宅化が激しくなく、比較的昔の町の景観を伝えています。

町は大きく分けて南から「三ツ石地区」「船ヶ谷地区」「浦戸地区」に分かれています。船ヶ谷池のある地区は船ヶ谷町ではなく太山寺町に所属しており、藩政時代からの池の名称と現在の行政地区町名との違いがここに現れています。

三ツ石地区

船ヶ谷二神氏初代源右衛門が江戸中期に住み始めたのが船ヶ谷の南端になる三ツ石地区で、付近は緩やかな丘陵地帯となっています。集落下の入り口から緩やかな坂道となり道路右側に門構えの二神氏各系譜の立派なお家が軒を連ねるように建っています。家の並びが終わったところの左側に小さな溜め池が二カ所あります。下池と臯池（ふくろういけ）でその周囲にはみかん山が広がります。下池は藩政時代には三ツ石南池と呼ばれていました。その右手丘陵を登るともう一つの池がありますが、これが三ツ石池で、集落の小字の名称を取って付けられました。

縄文時代の後期、晩期から人々が住み着いた跡が残る船ヶ谷遺跡はこの三ツ石地区にあります。

この三ツ石地区には7軒の二神氏が住まわれています。



船ヶ谷二神氏の屋敷が並ぶ三ツ石地区



三ツ石池

船ヶ谷本村地区

船ヶ谷町本村地区は町を南北に分断するように中心部を県道湯山三津浜港線とJR予讃線が走っています。道路の方は藩政時代

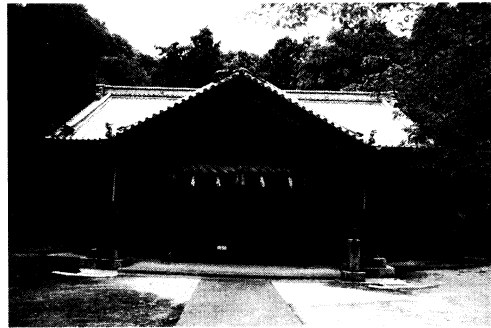
から安城寺村と古三津村を結ぶ重要な道として通っていて、海産物の仕入れや、海上交通の拠点であった三津浜港や高浜港へは現在でもこの道を通らなければならない重要な道路です。また、予讃線高松～松山間の延伸工事が大正末期からが始まり、伊予和氣駅を通過して三津浜駅まで線路を迂回させる工事により船ヶ谷の町を分断するように線路が付けられ、昭和2年4月に開通しました。この船ヶ谷町本村地区には4軒の二神氏が住まわれています。

浦戸地区

諸山積神社

諸山積神社は船ヶ谷二神氏が氏神様として代々崇め奉ってきた神社。同神社略縁起には次のように書かれています。

「昔伊予皇子勅命により西南の凶徒を退治の為当国へ下降浦戸の丘に神



船ヶ谷二神氏の氏神様諸山積神社

離を建て国家鎮護のため大山積神を始め諸神を齋き祀り諸山積宮一名浦戸明神と号し奉りしか当社の創祀と伝えらる。後和銅五年大三島より高竈神、雷神を勧請して諸山積宮へ合わせ祀りて浦戸新宮と号し越智玉澄神殿を造営し郷内一宮と崇めらる。光孝天皇仁和三年神供料を奉納あり。文治年中河野通信社殿を修治して以来或いは水田を献し或いは神領を奉り、社殿を修築せし等河野氏厚く崇敬せり。」

『伊豫温故録』（明治27年・宮脇通赫著）には次のように述べられています。

諸山積神社

太山寺村字船か谷に在り当社は昔河野家より建立ありといふ古跡集に云ふ社地に一つの異石あり往昔明神此石の山上に影向し玉ひしによって神幸石と号す。又岩神ともいふ今に在り河野家信仰あり寄附の品々延焼して今は亡しといふ（原文のまま）

諸山積神社は東の方角を向いて建立されており、予讃線の線路を渡ると直ぐに鳥居が迎えてくれます。鳥居には「寛政元己酉年十一月吉辰郡中安泰惣産子繁栄」「産下・東長戸村、安城治村、太山治村、西長戸村」等と刻まれ218年前に建立されたものであることが判ります。安城寺と太山寺の「寺」の文字が「治」と入れ替わっている理由については不詳。

また、神社の入り口には両端に阿吽の唐獅子が高い台座石に乗っています。台座には奉獻年が刻まれています。それには「慶応三丁卯年四月」と記録され、多くの世話人と寄進者名が銘記されています。その中に「源右衛門」の名前が刻まれ、船ヶ谷二神氏源右衛門系譜の人物が確認されます。慶応三年の年号から見て同系譜三代目の二神源右衛門であることが判ります。

ゆるやかな石段を少し登り詰めると正面に諸山積神社本殿が、右手には青麻三光神社の本殿がそれぞれ見えてきます。境内を取り囲むように、本殿修復時の寄進者の氏名を刻んだ碑が並び、それらの中に船ヶ谷二神氏や他系譜の方々の名前も見えます。



二神氏の名前が刻まれた本殿修復時の寄進者氏名

青麻三光神社

青麻三光神社は、古くから中風除けの神様として近隣の人々に知られていました。諸山積神社と同じ境内にあり、毎月一日の月並み祭と年に一度の大祭が五月一日に開催されます。

「青麻三光神社縁起」には次のように書かれています。

「当社は天御中主大神、天照皇大神、月夜見大神の大神の御神徳を日月星の三光になぞらえて御社号を青麻三光神社と申し上げます。当社は昔から脳の守護神として一般の信仰が厚く殊に中風除けの神として遠近に多数の崇敬者を持っております。当社は古くは此処から南約一キロの船ヶ谷茶臼山の麓に鎮座されておりましたが安政の頃此社地へお遷し申し上げ明治の中頃になりまして今の社殿を新築して今日に及んでおります。」

浦戸地区には昔から宮司が住んでいる屋敷以外には人家が無く、諸山積神社と青麻三光神社の境内と宮司の居住区一帯を浦戸地区と呼んでいました。

船ヶ谷池地区

現在、船ヶ谷池のある地区は太山寺町となっています。しかしこの池は、藩政時代太山寺村に所属していた時代から船ヶ谷池と呼ばれ船ヶ谷領内であったことを示しています。それがどうして太山寺領となったのでしょうか。考えるに、昭和17年9月船ヶ谷町が太山寺町から独立をする際に、それまで船ヶ谷の領内だった船ヶ谷池と周辺が、それまでの経緯から太山寺領であることの方が正当であるとの結論によって、池の名称はそのままで太山寺領に組み込まれていったのではないかと思われます。

船ヶ谷村の溜め池はすべて昔から西側の土手は山の斜面を利用する形で造成しており、平山池、大谷池をはじめ船ヶ谷池も例外ではありません。近年では池の真下に松山市立北中学校が設置され、現在、池の北斜面には大規模な霊園も建設中で、少し南には松山市営三光団地もあり船ヶ谷池のある地区は次第に開発されてきました。また、船ヶ谷池では近隣の団地住民などによって鴨の餌付けが行われるなど池の周辺は賑わいをみせています。



今では賑わいを見せる船ヶ谷池とその周辺

系譜・家紋紹介 (No.10)

事務局長・二神 英臣

船ヶ谷（ふながたに）二神氏

1. はじめに

現在の松山市船ヶ谷町は昭和17年9月1日に誕生した町名で、それまでは松山市太山寺町船ヶ谷（昭和15年～17年）温泉郡太山寺村大字船ヶ谷（明治22年～昭和15年）和気郡太山寺村船ヶ谷（藩政時代～明治22年）と云う変遷をたどってきました。



町の中心を東西に県道が走る

それまでの船ヶ谷の歴史について述べた文献は極めて少なく、「郷土史家の方々や古老の口実によった村の歴史を辿ったものがこれまでのところ確認されていません」（諸山積神社 武智宮司）「船ヶ谷地区には、森田氏と二神氏が昔から住んでいてこの両家からの発見される文書などに、かつての船ヶ谷の記録が残されているのではないのでしょうか」（同宮司）とのことで今後の調査に期待が寄せられます。

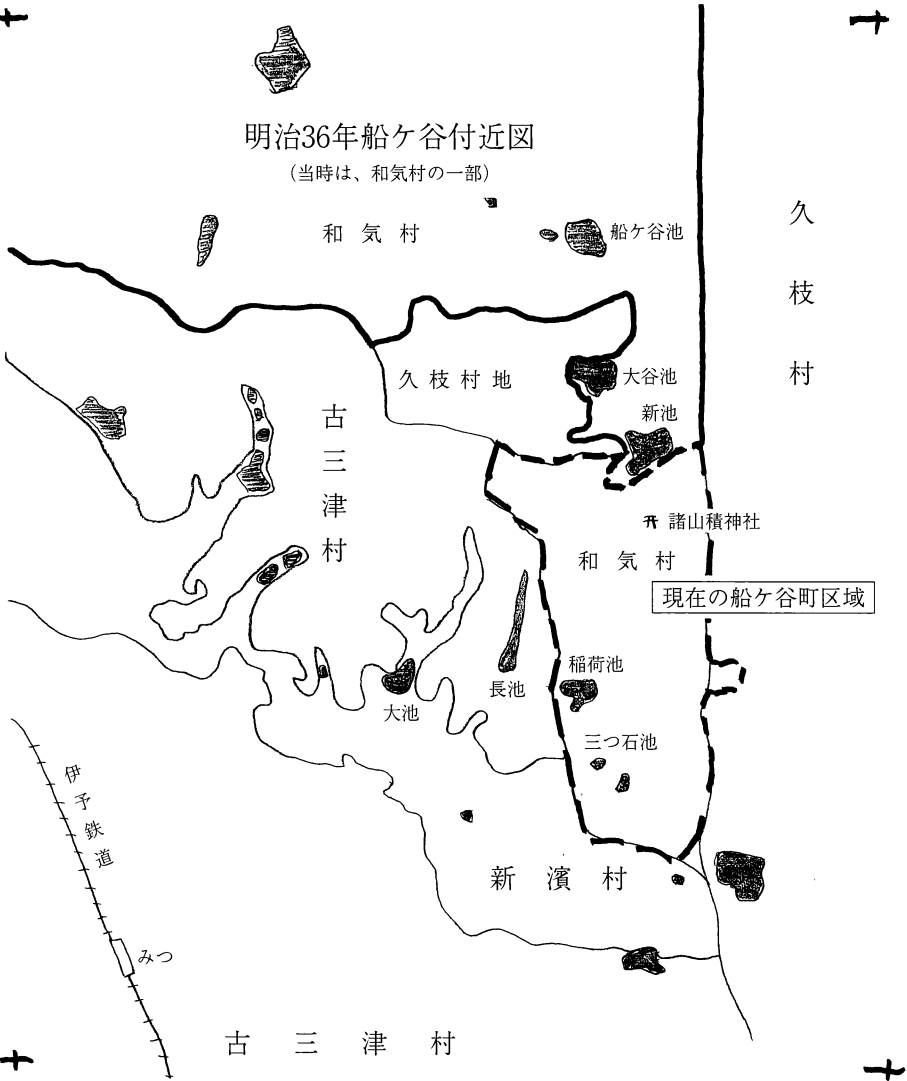
船ヶ谷二神氏がこの地区にやってきたのは墓地や位牌など周囲の状況から見て、江戸中期頃でなかったかと考えられます。

そのとき住み着いたところが、ゆるやかな坂がつづく「三ツ石」と呼ばれる地域で、船ヶ谷村の中では最も南端に位置し地理的条件が良い場所と見られ、集落付近には三ツ石池、三ツ石南池、梟池の溜め池を持ち稲作が盛んに行われていたことを示しています。また縄文後期の遺跡などもこの近くから発見されています。

藩政時代から船ヶ谷と呼ばれたのは三ツ石の背後にある丘を北方に

明治36年船ヶ谷付近図

(当時は、和気村の一部)



一つ越えた地域のこと、昭和2年から村の真ん中を予讃線が走り始め部落を東西に二分しています。さらにここから北方へ1 km程歩くと諸山積神社や青麻三光神社のある浦戸地域に出ます。さらに北方へ3 kmで船ヶ谷部落の北端である船ヶ谷池に着きます。このように船ヶ谷町は南北に長い地域で、地名の由来は「熟田津論争」にも見られるように、かつてこの地域が東方に位置する潮見村と東西を結ぶ海浜部であり、その後の地震などによる土地の隆起で現在の地形となり、船ヶ谷、浦戸などの地名だけが当時のまま残ったのではないかとの説もあります。

2. 船ヶ谷二神氏の歴史

これまで船ヶ谷二神氏の歴史については、二神系譜研究会が発足するまでに、研究もしくは考察された足跡が確認されませんでした。

船ヶ谷二神氏の繰り出し位牌の中で最古の年代として残されているのは天明元年（1781）8月22日に没した人物で、裏書きには「与八の父」と記されています。この人物が船ヶ谷の三ツ石に居を構えた最初の人物で、初代源右衛門と見られます。この源右衛門の名は三代目まで襲名されていますが、この時代は他にいくつかの名前を持っていましたから、二代目が与八であることが判ります。この人物も後に源右衛門を襲名しています。それでは初代源右衛門はいったい何処から船ヶ谷へやってきたのでしょうか。これが船ヶ谷二神氏の系譜を語る上での最も肝要な事柄です。それを解くキーワードは船ヶ谷二神氏の菩提寺にあるのではないかと思います。同系譜の菩提寺は松山市本谷（旧北条市）にある黄檗宗雲門寺です。

雲門寺は中世時代に建立された寺で、旧記によれば河野通清が建立したと伝えられています。建立当時は天台宗に属していましたが延文年間（1356～1361）に火災に遭い寺宝が灰燼となりました。河野通武（南氏）の時に七堂伽藍を創営し釈海が開基して臨済宗建長寺の末寺

となりました。南氏5代の間、菩提寺として栄えましたが、天正13年（1585）7月、小早川隆景に攻められ背後の横山城落城とともに衰微しました。天和3年（1683）に古鏡がこれを中興し、宇治の黄檗宗萬福寺の末寺となり現在にいたっています。なお、小早川隆景に攻められた際、横山城に立てこもった南通具は一族郎党二百余騎で応戦しましたが及ばず大敗。この地を去ることになった時、通具が南氏の菩提と興隆を祈念して植えたと伝えられる「南柿」（県天然記念物）が420年を経た今日なお雲門寺境内で実を付けています。

雲門寺が建っている松山市本谷は旧北条市に属し、藩政時代は風早郡粟井郷本谷村字寺の内の地名で呼ばれていました。粟井郷の二神氏で雲門寺を菩提寺としている系譜は現在までのところ確認されておりませんが、近辺の客二神氏（真言宗蓮福寺）、常竹二神氏（日蓮宗積善寺）、小川



菩提寺黄檗宗雲門寺

二神氏（真言宗蓮福寺）、を見て黄檗宗雲門寺を菩提寺とする系譜は見あたりません。これを中世の風早郡まで広げ雲門寺と関係深い臨濟宗や寺の創建時の天台宗まで遡ってみると二神氏との関係が見えてきます。しかし、船ヶ谷二神氏初代源右衛門が仮に70歳で没したと仮定して天明元年（1781）から70年遡って考えてみますと正徳元年（1711）頃に源右衛門が生まれたこととなります。源右衛門が何歳で風早郡粟井郷から和気郡太山寺村船ヶ谷までやってきたのかも系譜に伝わる伝承などが未発見なので不明のままですが、この時代、何のために（動機・目的）どのような経緯で（経過）どんな気構え（決意）を持って来たかが問題となります。ただ、これを遡る20年前の元禄年

間には、余戸二神氏（臨濟宗善応寺）や上ノ谷二神氏（臨濟宗善応寺）が風早郡から現地へ移転していることを考え併せるとき、二神源右衛門の太山寺村船ヶ谷地区移転の背景が見えてくるのではないかと考えます。また同時に、今日まで未調査のままとなっている太山寺二神氏についても系譜解明が船ヶ谷二神氏の系譜解明のため必要であると思われる。

3. 現在の船ヶ谷二神氏の系譜

船ヶ谷二神氏の系譜の方々は今でも船ヶ谷三ツ石地区と船ヶ谷地区とに住んでいますが、古文書や系図などの史料が残されていません。しかし、源右衛門宗家二神氏墓地に見られる墓石や船ヶ谷二神氏が代々所有してきた土地や山林などは、村の中心部周辺にあってその時代における同村でのいわゆる一等地にあります。

また、諸山積神社改修時の寄進碑や慶応3年銘の刻まれた神社入り口の唐獅子台座に残る二神氏各系譜の名前、明治10年作成の畝順帳に残る船ヶ谷二神氏の所有地の状況から判断して、今日的には3系譜あることが明らかになりました。

そして、それらの経過から今日の船ヶ谷二神氏の系譜について宗家につながる株家について考えてみますと、現在、船ヶ谷地区で二神氏を名乗る家が11軒あります。そのうち先に述べた株家と見られるお家が3系譜あるのではないかと見られます。そしてどの系譜も菩提寺は黄檗宗雲門寺であることも判明しました。

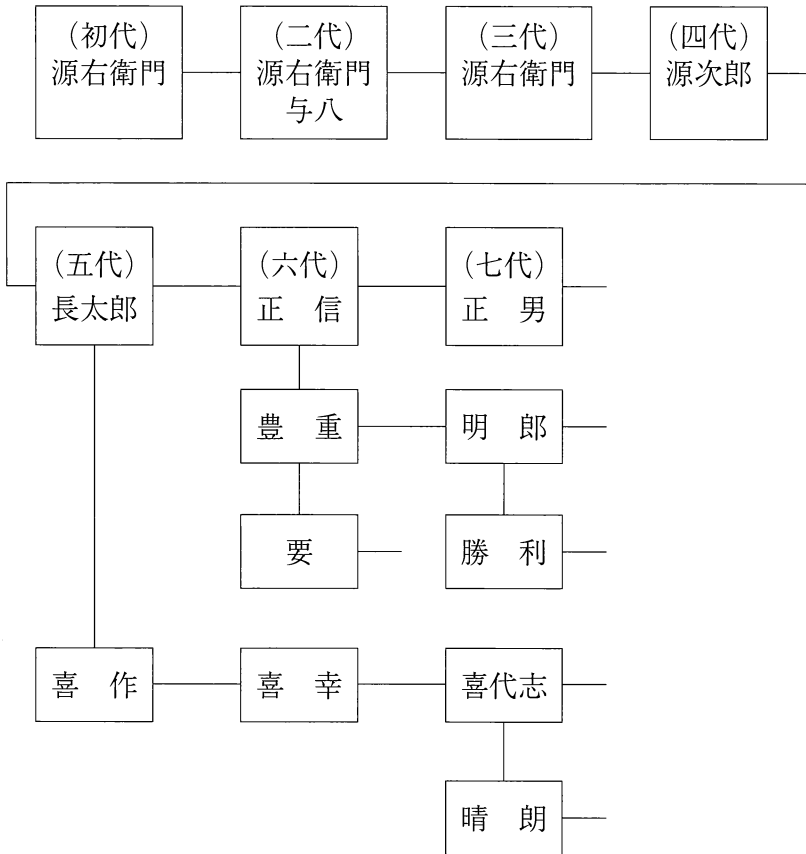
今後の同系譜の調査課題としては、3系譜の墓石と位牌。そして雲門寺に眠る過去帳との照合作業が必要でこれらの作業をすべて完了して初めて船ヶ谷二神氏の全体像が明確となってきます。そして同時に周辺地区の二神系譜、特にかつて所属していた太山寺本村の二神氏についても平行して系譜調査を進める事が二神氏の系譜調査として重要との結論に達しました。

4. 船ヶ谷二神氏系譜

以下、これまでに判明した船ヶ谷二神氏は3系譜ですが、今回は源右衛門系譜について報告します。同系譜は今日では全国に拡がっていて船ヶ谷町は勿論のこと、松山市やその他周辺地域で発展を続けています。

二神系譜研究会会員で同系譜の二神明郎氏や実弟の二神勝利氏（大王製紙会長）は、二神源右衛門系譜7代目の分家筋に当たります。

【船ヶ谷二神氏 源右衛門系図】



(初代)

源右衛門 (秋月自香信士) 天明1年(1781)8月22日没
妻 (春月妙輝信女) 天明5年(1785)2月4日没

(二代)

源右衛門 (俗名・与八)

(三代)

源右衛門 (照覚源心信士) 天保14年(1843)5月23日没
妻・およね (照慧智定信女) 文久2年(1862)2月25日没

(四代)

源次郎 (源心壽照信士) 大正2年(1913)2月28日没 享年70歳

(五代)

長太郎 (慈徳院長山了覚居士)
昭和11年(1936)10月6日没 享年70歳

(六代)

正信 (常楽院徳了翁壽正居士)
昭和63年(1988)1月21日没 享年87歳
妻・テルヨ 平成18年(2006)11月8日没 享年94歳

(七代)

正男

5. 諸山積神社寄進碑に残る船ヶ谷二神氏の名前

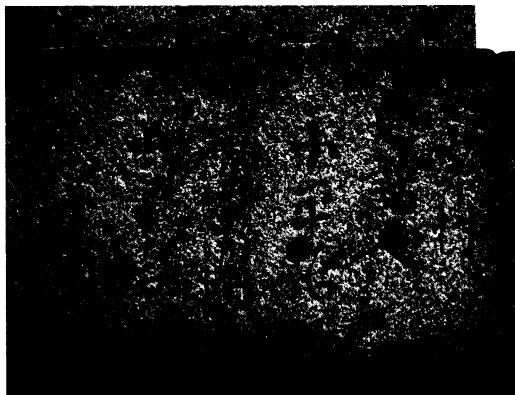
- 1 慶応3丁卯年 唐獅子台座
(二神) ※源右衛門
- 2 大正9年8月 拝殿再建
二神千太郎 ※二神長太郎 二神品吉
- 3 大正9年8月 拝殿改築
二神喜作
- 4 昭和63年7月 拝殿修復

二神満夫 ※二神滝男 ※二神明郎
5 平成2年4月 拝殿改修
※二神喜代志 二神善高 ※二神正男 ※二神滝男
二神和王 二神 薫

(※印のあるのが源右衛門系譜)



諸山積神社唐獅子



唐獅子台座の源右衛門銘

6. 【畝順帳に残る船ヶ谷二神氏の所有地】

甲 畝順帳 明治10年 2 月					
和気郡太山寺村 4 冊の 3 内 1 ～ 3 号					
小字	地目	地番	面積	氏名	備考
三ツ石	1 ～ 201				
三ツ石	田	62	28歩	二神源次郎	
〃	〃	66	1 畝29歩	〃 〃	
〃	田	73	6 畝10歩	二神 與七	
〃	田	83	3 畝14歩	二神源次郎	
〃	〃	84	4 畝11歩	〃 〃	
〃	〃	88	5 畝07歩	〃 〃	
〃	田	89	3 畝24歩	二神 太平	
〃	田	90	1 反00畝00歩	二神源次郎	
〃	宅地	96	6 畝06歩	〃 〃	
〃	畑	97	1 畝20歩	〃 〃	
〃	宅地	100	7 畝08歩	二神 與七	
〃	畑	117	09歩	二神源次郎	
〃	畑	140	1 畝02歩	二神 太平	
〃	畑	153	1 畝25歩	二神 與七	
〃	畑	166	1 反00畝02歩	二神源次郎	
〃	田	188	1 畝17歩	〃 〃	
〃	田	189	4 畝23歩	二神 與七	
三ツ石	～ 201				

甲 畝順帳 明治10年 2月					
和気郡太山寺村 4冊の3内 1～3号					
小字	地目	地番	面積	氏名	備考
船ヶ谷	202～331				
〃	宅地	213	5 畝03歩	二神 太平	
〃	畑	215	2 畝00歩	〃 〃	
〃	田	220	4 畝20歩	二神源次郎	
〃	〃	227	2 畝24歩	二神 與七	
〃	畑	236	19歩	二神 太平	
〃	〃	247	1 畝15歩	二神 與七	
〃	〃	248	2 畝21歩	二神 太平	
〃	田	286	7 畝26歩	二神 與七	
〃	〃	295	6 畝16歩	二神源次郎	
〃	〃	301	1 畝12歩	二神 與七	
〃	〃	327	6 畝25歩	二神源次郎	
船ヶ谷	～331				

乙 畝順帳 明治10年 2月					
和気郡太山寺村					
小字	地目	地番	面積	氏名	備考
船ヶ谷		1～149			
船ヶ谷	松山	8	2 畝24歩	二神 庄蔵	
〃	〃	16	3 畝20歩	二神源次郎	
〃	〃	19	25歩	〃 〃	
〃	〃	32	5 畝25歩	〃 〃	
〃	〃	38	2 反00畝00歩	二神 與七	
〃	〃	40	3 畝10歩	二神 多平	
〃	〃	41	6 畝22歩	二神源次郎	
〃	〃	43	20歩	二神 與七	
〃	〃	45	1 畝02歩	〃 〃	
〃	〃	56	3 畝23歩	〃 〃	
〃	〃	67	2 反00畝19歩	二神源次郎	
〃	〃	80	2 畝09歩	二神 多平	
〃	〃	101	5 畝13歩	二神源次郎	
〃	〃	103	8 畝28歩	二神 與七	
〃	〃	104	1 反04畝28歩	二神源次郎	
〃	〃	105	2 畝00歩	二神 與七	
〃	〃	106	12畝20歩	二神 多平	
〃	〃	112	4 畝25歩	〃 〃	
船ヶ谷		～149			

【参考】二神源次郎、二神與七、二神太平の3名は上記の他、西長戸村小字高塚、町田、榎木、角田にも田、畑の地目で多くの所有地が確認されている。

7. 船ヶ谷二神氏家紋

船ヶ谷二神氏の家紋は「抱き茗荷」と云われる紋様です。茗荷は湿地に自生しますが多くは栽培されています。食用にするのは大小六、七片の苞をつけた竹の子形のもので、茗荷竹あるいは茗荷の子などと呼ばれ、生姜に似てその香味が珍重されます。

茗荷は「茗荷のうちに神仏の加護のあること」の意である「冥加」に通じるところから、縁起の良い紋と考えられて、茗荷紋は次第に大衆の間に広がって行きました。京都府綾部市の阿須々岐神社や兵庫県美方郡の茗荷宮では茗荷祭が行われ、年頭には社域に生える茗荷の数で吉凶を占い、さらにこれを神前に供えて冥加を祈っています。



抱き茗荷

茗荷紋形を分類すると、一個のものを「一つ茗荷」。二個のものを「二つ茗荷」といい、これには「向かい茗荷」と「抱き茗荷」がある。三個のものには「三つ盛り茗荷」「三つ寄せ茗荷」「三つ追い茗荷」「茗荷巴」などがあります。

使用家は藤原氏系統にきわめて多く、道隆流の大沢氏、道長流の中村氏、頼宗流の大沢氏、山陰流の増田氏、利仁流の堀氏、秀郷流の鍋島、野間、明楽、村松などの諸氏のほか、支流で十九氏があります。清和源氏では義家流の小沢氏ほか九氏、宇多源氏系では佐々布氏ほか五氏があります。

茗荷紋が初めて文献上に出てくるのは「見聞諸家紋」です。同書には二宮氏の紋とありますが、江戸時代の稲垣氏もこれを用いています。この二氏はもともとが神に使えてきた家柄です。

(『家紋 知れば知るほど』発行・実業之日本社)

船ヶ谷二神氏の始祖が「抱き茗荷」を家紋に選んだのは、二神島の名称の由来である「島には古来より妙見社（八幡社）と巖島社の二鎮座神があったゆえに名付けられた」との伝承や、二神氏が長門国で豊田氏を名乗っていた時代に豊後国宇佐神宮から勧請し豊田郷に建立した東八幡宮と西八幡宮を崇敬したのを知っていて茗荷紋が神に使えてきた家柄で使用されてきたこととの関連から使い始めたのではないかとの推測もされますが事実是不明です。

特別寄稿

① 余戸二神と医学

齊藤 文嗣

1. はじめに

本誌7号（平成16年12月発行）に拙稿「二神寛治と桑田立齋の系譜について」を掲載していただいた。私はその稿を次の一文で締めくくった。「二神寛治、豊、恭次の墓地がいったいどこにあるのか、ご遺族はどこでご健在なのか、もしご存知の方がおられましたらご一報いただけますようお願い申し上げます。」

ややあって、拙稿をお読みくださった太田安雄氏から、ていねいな書状が届いた。そこには「『中外医事新報』なる明治期の医学新聞に、若死にした二神豊（余戸二神第七代当主精一の次男、精一の弟寛治の養嗣子）を悼む長文の記事が掲載されていた記憶がある」と書かれてあった。かつて太田氏は私に、「二神寛治のご遺族はどこでご健在か」と、問うてこられたことがあった。まだ気がかりにしてくださっていたのであろう。というわけでご親切に、貴重な糸口をひとつ私にくださったのである。

太田氏は、かつて東京医科大学で眼科の教授をしておられた方である。氏の曾祖父の伝記『太田雄寧傳』の著者でもある。すでに書いたことであるが、雄寧は恩師松本順の命を受けて、「松山病院医学所」の校長を一年余勤めたことがあった。ここで二神寛治と出会い、離任に際し寛治を伴なえて東京に帰ったのであった。

雄寧はその後、大変な苦労の末に『東京医事新誌』を刊行したが、惜しくも創刊して間もなく病没した。アメリカ留学時に、日進月歩の医学に必要なことはまず最新の知識の世界的な共有である、とい

うことを骨身にしみるように学んできた雄寧が、英医書の翻訳と医学ニュースの発刊に心血を注ぎ、その果ての病に倒れたのであった。寛治は、師である雄寧のあとを受けて『東京医事新誌』を続刊し、やがて雄寧の未亡人八重（既にひとり幼い娘がいた）と結婚することともなった。この八重と寛治の間にできた娘が、私の祖母二神種（たね）であり、雄（たけ）とは父親違いの姉妹であった。つまり遠縁ではあるが、太田安雄氏と私とは親戚関係にあるのだ。（だがまだ一度もお会いしたことがない。）

太田氏からいただいた貴重なヒントを胸に、私は本郷の東京大学医学部図書館を再び訪ねることになった。平成17年2月18日のことであった。

既に拙稿に転載してあるが、『東京医事新誌』明治36年1316号に二神豊の東京帝国大学医科大学卒業と死亡に関する記事があったから、死亡日時を手がかりに調べは簡単についた。確かに『中外医事新報』明治36年8月5日号（第561号）に、太田氏がかすかに記憶されていた、いくつかの二神豊追悼記事があった。

一読してみて、たとえ若死にとは言え、大学を終えたばかりの駆け出しの医師の追悼記事としては、異例の扱いであると思われた。さしあたって理由は二つ考えられる。一つには、父親が発行している刊行物『東京医事新誌』に、養嗣子とはいえ息子の弔慰文を掲載するのは筋違いであると判断されたこと。もう一つには『中外医事新報』が、若くして失われてしまった豊の才能を惜しむ記事を特集して、よきライバル『東京医事新誌』の局主であった寛治を、弔慰したのではないかということ。この二つである。

ところで発見したいくつかの弔文の中に、「今や空しく吉祥寺老松蔭暗き辺に眠る」という言葉を見つけるや、私は居ても立ってもいられぬ思いに駆られ、すぐに図書館を飛び出し、出会い頭のタク

シーをひろって駒込吉祥寺へと急いだ。すでに日は傾いてはいたが、本郷と駒込とは目と鼻の距離なのである。

白状すると実は、吉祥寺の寺務所に二神の墓所を尋ねてきたのは、これが二度目であった。一度目は、余戸二神の現当主信助氏の口から得た情報をもとにやってきたのであった。信助さんが「私は気にはなっていないながら、まだ一回もお参りを果たしていないのです。確か駒込吉祥寺と聞いておりますが……」とちょっと自信なげにおっしゃったのがよくなかった。一度目の訪問では、「二神さんとおっしゃる檀家さんは当寺にはおられません。」との寺務所の断固とした一言で、私はあっさりと引き下がってしまっていたのであった。

こんなことがかつてあったものだから、二度目となる今度は、窓口の女性にコピーしたばかりの資料と私の名刺を示しつつ、「かくかくしかじか二神の墓所がこちらのお寺にないはずがない」、とややくどくと事情を説明したのであった。

ところが話を聞いた窓口の人は、落ち着き払って奥に引っ込んだ。そして、ファイルを何冊か取り出してきて参照しはじめた。わずか数分で調べがついた。「確かに二神寛治さん、豊さん、恭次さんのお墓がこの地にございます。ただしお世話なさっている檀家さんは、村上秀明という方です。」こう私に説明した。そして「最初に来られた際には、対応したものが不慣れで確かなことを申し上げられなく失礼しました。」とていねいに私に詫びたのだった。つまり墓碑銘と檀家名が異なっていた。そんなありがちな、なんでもない事情で、私は数年もの時を無駄にしていたのだ。

「私は村上秀明さんという方とは面識がない。しかし遠縁の親戚に当たるであろうことは間違いない。二神寛治は私の曾祖父なのだから。差し支えなければ村上さんの住所と電話番号を教えてくださいませんか。」こう窓口の人に頼んでみた。即座にその人は電話を取り、村上さんとの仲介の労を取ってくれた。奥様の晶子さんが幸い在宅され、快諾くださった。

私は小躍りせんばかりに愉快的気持ちでいっぱいであった。積年の突き抜けられなかった壁に、ぽっかりと穴が空いたのである。寺から教えられた二神の墓を探し当て、ざっと掃き清めてから花をささげた。

そして三ヶ月後の5月8日日曜日午後3時から、吉祥寺にて村上秀明氏御一家、母上恭子さんとお会いできるところまで運ぶことができた。かなり遠回りではしたが、私はこの出会いに大満足だった。私の満足の中には、村上秀明氏との隠されていた奇縁が明るみに出たことも含んでいるのだが、これは本稿の締めくくりで書くつもりである。今はここで二神豊に戻らなくてはならない。

とりあえず、まずは項を改めて、いくつかの資料を紹介したい。そして余戸二神と医学とが、どのような経緯で結びつくに至ったのか、このことについて若干の考察を試みたい。



二神 豊 (1875~1903)

2. 資料の紹介

以下に三点の資料を紹介したい。ひとつは太田氏からご教示のあった『中外医事新報』、二神豊の追悼記事である。(一部は平成17年4月9日付けの「二神系譜研究会速報」No20に掲載されている。)紹介する文章はいかにも明治のもので、句点読点抜きの漢字とカタカナとがまじって実に読みづらい。前稿と同様、私の独断で現代語風に改めた。適当に要約を試み、簡略化したところもある。しかし原文の格調だけは保つように努力した。あとの二つの資料は、二神系譜研究会事務局長二神英臣氏が発見し、二神信助さんを介して私の手許に届けられたものである。これらは昭和50年前後のもので、わりあい新しく、理解に苦しむようなところはない。ただしコンパクトにするため、本稿に関係する箇所のみを抜粋したり、要約したりして紹介した。もちろん原文のコピーは三点とも手許にあるから、ご要望さえあればすぐにお送りできる。

(1)『中外医事新報』第561号(明治36年8月5日、p.58~62)

①「故医学士二神豊君小伝」 友人 医学士 柴毅

吾が二神豊君は、今春いらい、病を大磯の別邸に養う。鳳雛未だ一翔を九天に試みるに及ばず、蛟龍ついに雲雨を得るに至らず。今は空しく吉祥寺老松蔭暗き辺に眠る。悲しみに泣かんかな。惨めを嘆かんかな。ここに君の小伝と弔辞とを記し、親友である諸君の同情を得て、僅かに君の霊を慰めんとす。

世の悲惨、人の死より大なるはなし。然れども、前途幾多の希望を抱く有為の青年をして、辛苦蛭雪の労を積み、ようやくその志、機成り、蛟龍將に雲雨を得んとするの時に及んで、空しく異域の人とならしむるより甚だしきはあらざるべし。余が医学のため、また親友として、痛哭流涕禁ずるあたわざるものは、医学士二神豊君長逝のこと是なり。喬木風雪の害多く、名士疾病の累繁とは言え、なお春秋に富む君にして、撰生を重んずる君にして、

今日この不幸の記事を作らんとは余輩の夢想だもせざりしところなりき。

君は明治八年八月をもって、伊予国温泉郡余土村余戸に生まれ、二神精一氏は実に君の厳父なり。君は十三歳にして笈を負うて東都に出で、叔父二神寛治氏（東京医事新誌局主）の養嗣子となる。当時君は神田淡路町共立学校に入り、普通学を修む。明治二十六年第二高等中学校（仙台）に入り、後転じて山口高等学校に行き、三十一年業を卒へ、進みて東京帝国大学医科大学に入り、三十六年卒業す。

君は人となり温厚恭謙にして、いやしくも人と争うを好まず。著実なる勤勉家として、人の皆敬服するところたり。然れども君は、無為の盲従的温和にはあらざるなり。君はあたかも水の洋々たるが如く、然りしなりことなければ銃の如く僅かに波を横たうに過ぎざれども、もし一度物に触れ事に激するあれば、議論風発よくその条理を正しうせずんば止まざるなり。ただその深きがゆえに、容易に波を揚げざるのみ。君また志を仏理に傾け、すこぶるその趣味を解せり。

卒業後東京帝国大学医科大学副手として、東京市養育院勤務を嘱託せられ、いまだ幾干ならざるに、病を湘南の地に養いしが、病にわかにかきまわり遂に起たず。同月十一日（註：7月11日）駒込吉祥寺先祖の墓のかたわらに葬る。実に君が授与せらるべき帝国大学卒業証書授与式の当日にてありき。

②弔辞 柴毅

上の小伝を書いた同人物が葬儀当日、友人代表として故人に語りかけるように読み上げたものである。全部を掲載するには長文に過ぎるので、梗概のみ現代文に直して紹介する。

君ともっとも深く長く交わった友人のひとりとして、私が一言

ここで別れの挨拶を述べることを許してほしい。

君はいわゆる交際家ではなく、寡言にして誠実、風評に動じない真面目かつ柔軟な思考の持ち主であった。また試験のために勉強をするといったタイプではなくて、毎日早朝数時間、着実に勉強するのが君のやりかただった。身体が強壯ではないことを自覚していた君は、散歩を好み銃猟を趣味としていた。

今春から私といっしょに、医科大学付属病院勤務を嘱託されて東京市養育院に行くことになっていた。二月上旬、いよいよ同院に勤務するという事になっていた矢先に風邪をこじらせ、とうとう大磯の別邸で静養することになった。以後頻繁に音信を交わしたが、4月24日付けの「健康は回復したが今度は胃痛が始まった。いわゆる後門の狼である」という返事を最後に、君からの書状は絶えた。

ややあって君の厳父様より、君の胃痛は実は肺結核であったことを承ることになった。以後は君に手紙することをはばかって、お父様とのやりとりにとどめた。しかし大磯での治療環境が、かならず治癒をもたらすであろうことを信じていた。

7月5日梅雨のなか、私は君を大磯に見舞った。私は君の穏やかな風姿と爽やかな言葉を期待していた。しかし君は衰弱しきって、ひたすら病床に横たわるのみという予想だにしない状態にあった。にもかかわらず君は、私としばらく話をしたいと言われた。

そして肺腑から搾り出すように、荒い呼吸のなかであえぐようにして「柴君よく来てくれたね。僕はもうだめだ。諸君によろしくいってくれたまえ。」と、ようやくにしてこの三句を口にされたのであった。

君を疲れさせまいと思いつぐ別室に移り、数時間後君が熟睡しているのを見届けて、私は帰途に付いたのだった。次の日曜にふたたび君を見舞うつもりでいたが、それを果たすこともなく君は急ぐようにして逝ってしまった。

今や悲しみが溢れてきて胸が塞がり、これ以上言葉を口にすることができない。この女々しい繰言のような言葉をもって、別離の挨拶とすることをどうか許してほしい。

明治36年7月11日 東京帝国大学卒業証書授与式当日 友人 柴毅

③その他の弔辞

行義会（医学士合田平）、東京市養育院医局東京帝国大学副手総代（医学士小出伊勢治）、山口高等学校同窓総代（医学士田中友治）、愛媛県同好医学会総代（岩井禎三）、学士会。

これらのなかでも山口高校同窓の田中友治氏からのものは、「弔の歌」と題されて、とりわけ切々としたものである。ここであえて再録しておきたい。

さためなき	人の世の常	さためある	人の命は
あちなし	かなしきかもな	二神の	わかせる君は
宮城野に	つみしむかしは	鱈石川	火のむしあつめ
弥生岡	みゆきをつみて	さにじろう	紅葉の園に
ほきかわし	みきの香も	きえなくに	きへゆく君と
たれおもひけん			

反歌

思いきややかてさくらんあさかおの 露よりもろき君にしある
とは

(2)二神輝一郎「二神精一翁を語る」

『愛媛の文化』No.13、昭和48年6月、p.59。

筆者二神輝一郎氏は、余戸二神九代を継がれた人で、現当主十代信助氏の父上に当たる。かつて愛媛大学の先生をされていたが、今はすでに故人である。本文は原稿用紙にして4枚程度のもので、祖父二神精一、父二神俊平、従兄（父の姉の長男）二神哲五郎の経歴、

業績の紹介を中心に、個人的な思い出が付記されている。本稿に関係する限りを、要約して紹介する。

祖父二神精一は、五代二神孫右衛門種美の次男として嘉永2年（1849）伊予郡余戸村に生まれた。若くして医師を志し長崎に遊学、シーボルトに学んだ。兄貞一郎が若逝したため、呼び帰され七代当主として家業を継いだ。明治に改まって戸長となり、村政を改革した。また伊予鉄道電気株式会社や伊予農業銀行の設立にかかわるなどして、実業家としても活躍した。

父八代当主二神俊平は、精一の三男であった。兄豊が東大の医学部を卒業して間もなく病没したため、松山中学を出たあと上級学校に進学することを許されなかった。しばらく余戸小学校の教員をしたのち、耕地整理、青年会、村会議など村政にかかわった。

従兄哲五郎は、幼少年時代の学業成績は優れなかったけれども、その後大変な研鑽を重ね、松山中学、松山高校、東京大学理学部へと進学した。長岡半太郎の教えを受け、京都大学理学博士、九州大学理学部教授と、研究と教育に貢献した。

(3)高須賀康生「太田雄寧と収養館医学所」

『伊予史談』昭和59年7月、No.254、p.7～。

筆者である高須賀康夫氏は私にとってまったく未知の人である。インターネットで調べると、日本史家で、高校の先生をされながら郷土史家として研鑽を積まれた人であろうことが推察される。現在は教職を退かれ、「伊予史談会」副会長として啓蒙活動と研究、執筆に余念がない、というお姿が彷彿とする。

論文の内容は、松山藩、宇和島藩における幕末、明治初期の医療史である。藩や県の医療政策的な動きを概略的にたどったものである。締めくくりの項は、太田雄寧と東京医事新誌と題され、二神寛治にも言及されている。愛媛県における医学領域での維新史、つま

り漢方から蘭方へ、さらには西洋医学へという流れの中で、二神寛治が果たしたささやかな貢献が明記されている。以下、必要な限りでの概要紹介にとどめたい。

松山藩では18世紀末から文化・文政期にいたるまで、『気海観瀾』で知られる青地林宗を筆頭に、杉田玄白、緒方洪庵、華岡青洲などに学んだ蘭方医、蘭学者はかなりの数に上る。しかし藩としては漢方を重んじて、蘭学受容にはきわめて消極的であった。この点きわだって対照的であった宇和島藩は、藩医の子弟の修学を奨励し、伊東玄朴や緒方洪庵の塾で蘭方医学を修得させた。

松山藩が蘭学受容に意欲的な姿勢を示すようになるのは、松平勝成の安政期以後であり、勝成は数名を長崎に派遣し、修学させている。

さらに元治、慶応年間になっても、長崎養生所精得館における修学を奨励し派遣を継続した。長崎養生所は松本良順やオランダ医ポンベの尽力で文久元年（1861）に設立された、わが国最初の洋式病院、医学所で、慶応元年（1865）精得館と改称、明治になって長崎医学校へと発展した。

長崎で学んだ平田尹之、宇高正之らは明治2年、藩学明教館内の医学所で教授に当たるかたわら、貧民のための医療施設回春舎を西堀端町に設けた。明治4年これを会社病院に改組し、本格的な医療を開始した。

明治7年、回春舎は資金が尽きて閉鎖に至った。平田らはこれを県立病院に移管することを働きかけた。県は、これをいれて明治7年7月病院と付属医学所を開設、翌明治8年3月県立松山病院収養館と称した。

この医学所の所長として東京から招聘された人が、太田雄寧であった。雄寧は明治7年3月に松山に来て、翌8年5月に帰京している。したがって在任1年余のあいだ、もっぱら医学校の準備と開設にかかわったのであろうことが推察される。

離任にあたり岩井禎三、二神寛治が雄寧に伴って上京していることから、彼が相当の影響力を医学生に与えていたことがうかがわれる。(続いて雄寧の経歴、上京後の雄寧と寛治の『東京医事新誌』発行と継承をめぐるドラマが、かなり詳しく記述されている。残念ながら前稿と本稿の他の部分と重複するので省略する。)

雄寧が去った後の松山病院収養館医学所は明治10年に一時閉鎖された。まもなく再開され明治16年には愛媛県立松山医学校となった、しかしながら残念なことに、明治19年財政逼迫のため廃校となった。

3. 資料の考察——余戸二神と医学

余戸二神に何時どのようにして、蘭方医学、あるいは西洋医学への情熱が宿ることになったのであろうか。またその情熱はどのように引き継がれていったのであったか。先の資料をもとにして、ここでささやかな考察を試みておきたい。

手許の資料に拠る限りでは、医学への情熱を初めて身体に宿したのは二神精一であるとするほかない。精一に火を点したのは誰か、また誰が彼を長崎まで行かしたのか、誰と何人で行ったのか、これら不明なことばかりではある。しかしおそらくは二神輝一郎の記憶、あるいは余戸二神の伝承は正しい。精一はその明晰な頭脳を認められ選ばれて、藩の方針にしたがい長崎に派遣されたのである。

ただ一点、精一に関することで疑義が残る。それは彼がシーボルトに学んだとする伝承である。シーボルトが長崎に滞在したのは、1823～28年、1858～62年の2回であり、シーボルトの後継者ポンペの滞在期間が1857～1862年である。両者が長崎を去った1862年、1849年生まれの前代は弱冠13歳の少年であった。13歳という年齢は、前近代の武家社会や村落共同体にあつては、自立への突破口であった。しかし、精一がシーボルトからの教えを受けえたか否か、判断は微妙である。だが、決して不可能とはいえない。というのも本稿で頻出する太田雄寧は、10歳で幕府の医学校に入り、頭取であった

松本順に愛される場所となった。また二神豊は13歳で上京し、二神寛治の養嗣子となって医学への道を歩み始めている。

以上を総合すると現時点では、精一はポンペが松本順と協力して創設した長崎養生所精得館において、松山藩から派遣されて蘭方医学を学び始めた、と理解しておくことが一番無難なのではないだろうか。

ところで精一は、兄貞一郎の死によって松山に呼び戻され、長崎での遊学を断念せざるを得なくなる。この精一の無念の思いと情熱を継承したのが、弟寛治であったに違いない。寛治は医学を志して明治初年、京都の叔父越智仙心に学び、ついで大阪において英語を学んでいる。(太田安雄『太田雄寧傳』)そして明治7年松山病院医学校において薬局員となり、太田雄寧に出会うこととなる。

寛治にとって雄寧は、兄精一から聞き知った松本順(長崎養生所の創設者のひとり)の愛弟子である。のみならず精一は、たとえわずかな期間とはいえ、松本順から直接学んだ可能性もないとは言えないのである。松本順、太田雄寧、二神精一、二神寛治の、直接あるいは間接の、その後も切れ目なく続く宿命のような出会いと繋がりが面白い。

すでに書いたように雄寧は、愛媛県最初の西洋医学校である松山医学校の開設準備に関わった後、一年余で帰京する。寛治が雄寧に付き従ったのは、けだし当然と思われるのである。寛治の生涯の盟友となる岩井禎三も、雄寧の帰京に同行している。

寛治は上京後、松本順が早稲田に開設した私塾蘭疇(らんちゅう)舎の塾生となる。明治3年に創設された蘭疇舎には当初、病院が付設されていた。明治政府の命で松本順が軍医制度の整備に携わることになり、病院はわずか一年で閉鎖となり私塾のみが残った。この私塾は松本順の晩年まで持続したようである。おそらく早稲田馬場下にあった松本順の私邸に、寛治は書生住まいのようにして塾生となり、岩井禎三とともに医学の勉強を続けたのではなかったらうか。

雄寧は帰京して2年後、明治10年2月に『東京医事新誌』第一号を創刊する。この創刊から明治14年の雄寧の死にいたるまで、裏方として編集を助けたのが、二神寛治と岩井禎三であった。詳しい経緯は不明なのだが、寛治と禎三は師雄寧の編集業務を助けつつ、東大の別科に入学し、本格的な西洋医学の習得にも励んでいた。禎三は首尾よく東大別科を卒業し、大学付属病院外科助手となるが、寛治は別科の継続を何らかの理由にて断念している。雄寧の死によって当然、『東京医事新誌』の編集は二人の双肩にかかることとなった。翌明治15年、岩井禎三が岩手県立医学校に赴任となり、とうとう編集の全責任を寛治が背負うことになったのである。のみならず寛治は、雄寧の夫人八重と娘雄（たけ）と家族をなすことともなった。この間の動静には、松本順の采配が大きく働いていたことが伝えられている。

ここで余戸二神における医学への情熱の由来とその行方に戻ろう。寛治は結局のところ医師になることができなかった。医事新誌を刊行し続けること、これは誰の目にも明らかな貴重な事業である。また寛治以外に、後継者としてこの事業を担い続けるにふさわしい人はいないことを知悉していたのは、ほかならぬ寛治自身であったろう。一方でこの事業は医学界の周縁の仕事に過ぎないことを、寛治はまたよく知っていたであろう。つまり兄精一の挫折を、寛治は反復することになってしまったのである。そこで新たな余戸二神の医学への旗手として選ばれたのが、二神豊ではなかったか。

資料(1)―①にあるように、豊は明治8年に精一の三男として生まれている。そして13歳のとき寛治の養嗣子となるべく上京している。当時としては十分な自立の年齢である。明治20年ころのことと想定できる。父精一と叔父寛治とが、偶然の妨げによって果たしえなかった夢を、一身に背負っての上京ではなかったろうか。

それにしても豊の医学への道は、これ以上は望み得ないと思われるほどに整っていた。実父精一の資力、養父の医学的知識と人脈。

とりわけ人脈については松本順を中心とする当時の医学界を代表する歴々を、養父を介して身近にできたことが特筆できよう。豊にとってこれら物心の環境は、肌身に常に頼もしく感じられ、この上ない励みとなったのではあるまいか。そこにまた実父と養父との熱い期待の眼差しが常に注がれていた。

ここまで書いてみて、紹介した『中外医事新報』の破格の弔慰記事が、豊の人柄の評価をも含めて、単なる世辞としてのものではなくて、そっくりその通りのものとして読まれていいのだと思われるのである。

余戸二神の本家には今でも、油絵で描かれた豊の肖像が一枚、大切に残されている。豊が故人になった後、友人の一人が描いたものと聞いた。実父精一の達ての願いを受けて描かれたものではなかったろうか。また一族の墓地の一隅に、豊の供養塔が残されている。駒込吉祥寺にすでに埋葬されているにもかかわらず、である。いずれも当時の一族の、無念の思いの象徴として残されているものと理解できる。

ところで余戸二神の医学への情熱は、豊で尽きたのではなかった。二神寛治は師太田雄寧なきあと、『東京医事新誌』のみならず、残された雄寧夫人八重と遺児とをまるごと引き受けることになったことはすでに述べた。

まず遺児雄（たけ）は太田姓を継ぎ、養子として太田に入った會田恒磨と結婚した。恒磨は眼科医で、芝白金、芝園橋、渋谷と医院を移しつつ事業を拡大し、東京では指折りの眼科として知られるに至ったという。息子恒夫、孫の安雄（本稿最初に登場した太田安雄氏こそがこの人である）、さらに曾孫へと志が継承されている。現在の太田眼科医院は、都内板橋区常盤台にある。

また寛治は八重との間に娘を一人もうけ、種（たね）と名づけた。種は長じて幕末の蘭方医桑田立齋の孫である医師桑田志一と結婚す

る。志一は渋谷の太田眼科にほど近い、青山で小児科を開業していた。姉妹どうしの雄と種は、家族ぐるみで盛んに交流を続けたという。しかし種の子どもたち三人は、医学とは縁のない世界を生きた。

また寛治は八重に先立たれた後、ややあって愛子と再婚する。この愛子との間にもうけた子どもが、恭次と秀子であった。恭次は第八高等学校を経て名古屋大学医学部に進み、慶応大学医学部理学療法科で研修し、のち名古屋市民病院に勤務。昭和15年に44歳の若さで現職のまま他界している。だが幸い残された娘二人は今なお健在である。長女恭子さんによれば、恭次は快活で健康に恵まれ、さまざまなスポーツを愛し、とりわけ乗馬を得意とし、音楽、ダンスにも長じたと言う。しかし恭次の娘二人は、二神の姓を継ぐことはなかった。また種の子どもたちと同じように、医学とは直接には関係のない世界を生きることとなった。

兄である豊の死によって弟の俊平は松山中学卒業後、上級学校への進学を許されなかった。余戸村で小学校教員（地域における一級の知識人）を勤めた後に村政にかかわったことは既に紹介した。俊平は、本当は医師になりたかったのではなかったろうか。豊を失った父精一はすっかり臆病になってしまって、跡継ぎを失うことを恐れ、手許から離さなかったのであろうことが推察される。松山の出身であり、当時の日本における一級の知識人として知られた安部能成と俊平とは親交があったと聞く。俊平は学問的にも相当な力量の持ち主であったに相違ない。

いっぽう恭次は、豊の悲劇的な喪失を深く反省した父寛治によって、ゆったりと伸びやかに育てられたのではなかったろうか。だが父の願いを汲んで、結局は医学の道を歩んでいるところが面白い。

ここで精一、寛治、豊の夢が織りなしたドラマは、まずは穏やかな収束を迎えたと言っているのではないだろうか。

4. 奇縁——結びに代えて

愛媛県人なら周知のことなのだが、内子、五十崎の特産といえはまず、和蠟と和紙であろう。現在は伝統産業として保護の対象となっていると聞かすが、幕末から明治大正にかけては、全国に知られ珍重された特産品であったという。この和蠟や和紙の製造や取引にかかわって、財を成した人が少なからずいたであろうことは想像に難くない。

ところで五十崎に村上という旧家がある。今はむしろ「あった」というべきなのかもしれない。和蠟の製造と販売にかかわって財を成した一族であった。「中世末期に村上水軍一党の敗残が逃れ来て根付いたのである」、という伝承を持っている。建坪300坪という城のような屋敷がいまなお残されていて、現在これが内子町の文化財として保護される手はずとなっていると聞く。

この旧家の出身の一人に、村上利明という人がいた。松山中学に進んだが、身体をこわしていったん勉学を中断した。その後発奮して身体を鍛えなおし、中央大学に進んだ。いつしか陸上競技の選手としてその名を知られるようになり、戦後第一回目となる昭和22年全日本学生陸上競技選手権大会において、砲丸投げ学生チャンピオンの栄誉に輝いた。ここまではありふれた武勇伝に過ぎない。

ところでこの村上選手は砲丸投げが専門でありながら、第22回（昭和18年）、第23回（昭和22年）の箱根駅伝を走り、それぞれ往路復路総合第4位、第2位の栄冠も獲得していることでむしろ有名なのである。のみならず、後に中央大学の陸上競技部の監督として、箱根駅伝6連勝のチームを牽引した。この6連勝の記録は未だに破られていない。箱根駅伝にとどまらない。全日本学生陸上男子総合においても、連戦連勝し中央大学陸上競技部の黄金時代を築いた。多少陸上競技に興味を持ったことのある60年配の人なら、渡辺国昭、森本葵、岩下察男、横溝三郎、猿渡武嗣といった中央大学出身の名選手をきっと記憶しているにちがいない。みんな村上監督の秘蔵っ

子たちであったのだ。だが残念ながら村上監督はすでに故人と
られた。

じつはこの村上監督の夫人こそが、二神寛治の嗣子恭次の長女、
恭子さんにほかならない。駒込吉祥寺の二神の墓地を世話している
村上秀明氏は、その次男であったのである。

話はここで終わらない。始まったばかりである。前稿で余戸二神
九代輝一郎が、かつて京都大学文学部哲学科で教育学を専攻してい
て、同大学文学部、教育学部と歩んだ私の大先輩であったことは報
告した。このことは余戸二神の系譜調査の過程で発見した。実に不
思議で思いがけない、隠されていた絆であった。これから書こうと
するのは、新たに判明したこの類い話である。

元中央大学陸上競技部監督村上利明氏に戻ろう。利明氏の学生時
代からの競技仲間の一人に、佐久間秀明という人がいた。氏は学習
院高等科から京都大学経済学部へと進んだ。旧制インターハイで活
躍した人で、棒高跳び、円盤投げ、ハードルを中心に投擲、跳躍、
短距離種目なら何でもこなした、いわば十種競技向きの万能選手で
あった。旧制インターハイ陸上競技の部での最多得点者として、今
なお関係者の記憶にとどめられている。ヒトラーの時代のベルリン
オリンピックに続く、幻に終わった東京オリンピックで活躍が期待
されていた。だが戦争が始まり、爆撃機パイロットの一人として戦
場に出て、かろうじて生還した人であった。

戦後しばらくは、いくつかの競技会に出て、村上利明氏との再会
を楽しんだのではなかったかと推察する。しかし、その後両氏は、
後進の指導に力を注ぎ、佐久間氏は日本陸上競技連盟、いわゆる陸
連にかかわり、村上利明氏は監督として母校中央大学にかかわった。
青年時代に競技会で出会った二人は、その後もずっと変わらぬ盟友
として、家族ぐるみの交流を続けたという。

佐久間氏は京都大学でも陸上競技部に所属し、ベルリンオリンピック三段跳びで金銀を獲得した同窓の先輩である田島直人、原田正夫の後継者としても期待されていた。残念ながら過ぐる大戦が、その夢の実現を許さなかった。こういう事情もあってのことと推察するのであるが、現役競技者であることを断念したあと佐久間氏は、京都大学の競技部の先輩、同僚、後輩、現役の世話にも、驚くべき情熱を生涯にわたって注ぎ続けた。OB会の世話に始まって、後輩の人生相談、就職、結婚、家庭の揉め事の調停、応援、コーチ、合宿指導と差し入れ、自宅での後輩たちの宿泊受け入れ、昼飯、晩飯、麻雀、ありとあらゆることどもにお節介なほどに世話を焼いた。それは今なお何人の追従をも許さない、不思議な無償の献身であった。どうして私がこのように断言してはばからないのか。私自身が後輩の一人として、佐久間氏の無償の献身の恩恵を受けた一人であったからである。

ところで私はこう書きながら、佐久間秀明氏と村上利明氏との親交を、ごく最近に至るまで全く知ることがなかった。私は卒業してからは東京に職を得たので、OB会の若手として佐久間氏の小間使いをしばしば仰せつかった。会費の集金、案内状の表書き、パーティーの受付と会計、などなど。小間使いの最後の極めつけは、佐久間夫人およびご本人の葬儀の裏方であった。ご夫人のご逝去の第一報は、氏から直接私に来たほど近い場所にいた。にもかかわらず私は、佐久間氏の終生の親友、村上利明氏のことをまったく知ることがなかった。

何時、どのようにして両氏の親交を知ることになったのか。日時は平成17年5月8日午後、駒込吉祥寺の二神墓地を守っておられた、村上秀明氏ご一家と母上恭子さんとの最初の面会がきっかけであった。拙稿「二神寛治と桑田立齋について」と東大医学部図書館で収集した二神豊の資料など、必要なものはすでにお送りしてあったので、その内容の確認と補足といったことで会話は進んだ。秀明夫人

晶子さんの「いったい墓碑に記された方々が誰なんだろうって、いつも主人と話しておりました。お守りしていながら私たちはほとんど知らない方々ばかりでした。これですべて解明されて、ほっといたしました。」との一言が印象にのこっている。私には恭子さんから、二神寛治、恭次をめぐるいくつかの貴重な写真や資料が託された。

午後4時をすでに大きくまわって、お別れの挨拶を交わし、再会を約して吉祥寺の応接室から外に出た。村上秀明氏御一家4人が車に乗り込む直前、私は同業の大学人の世辞のつもりで「ところで村上先生は何がご専門なのですか？」と質問した。「公衆衛生学の研究をしています。その他の仕事は、保健体育講義、体育実技指導です。」と応じられた。「ではご専門の競技種目は？」と私は質問を重ねた。すると「陸上です。」とおっしゃる。「私もずっと陸上をやってきました。」と返すと即座に氏は、「では高林藤樹さんをご存知ですね？」と質問してきた。「もちろんですとも！」と私は力をこめて返した。

このわずか数分に満たない、いくつかのやり取りでもう十分であった。吉祥寺で出会った私たちの間には、思いもかけない未知の交流が重ねられていたのであった。二神寛治、豊、恭次のみで私たちは繋がっていたのではなかったのである。みんなで絶句し、しばし沈黙の時間が流れた。だが既に日も傾きかけていた。「この続きはまたにいたしましょう」と、とりあえずは話をそこそこに収めて、私たちは帰途についたのであった。

その後何回か直接お会いしたり、電話で話したりして判明した奇縁、隠されていた絆について、ごく、かいつまんで書いておこう。

まず恭子さんとは、実は初対面ではなかった。佐久間秀明氏がすべて取り仕切っていた東京での京大陸上OB会では毎年、新年会を2月上旬あたりに催していた。佐久間氏が陸連に関係していたこと

もあって、OBだけではなくて多彩な来客があった。その常連のなかには、織田幹雄なるビッグな人物もいた。じつは村上利明夫妻も常連のお客様であったというのである。遠縁とはいえ、れっきとした吾が叔父叔母がそろって足を運んでくれていたパーティーの受付で、何も知らずに下働きを勤めていた一人がこの私であった。また佐久間夫人の葬儀にも恭子叔母は参列してくれていたという。やはりここでも私は受付をしたり、お香典の管理をしたり、裏方をつとめていたのであった。最近になってわかったことなのだが、私のOB会仲間のなかに、「俺、村上さんとは何回も酒飲んだよ」という人たちまで現れた。私も相当な酒好きであるが、そんなチャンスはなぜか巡ってこなかった。佐久間氏の砦であった銀座の事務所で出会って、村上監督を紹介されていたとしても、親戚関係にあるなんてお互い全く知る由もなかったわけだから、ただの世間話をして終わっていたに相違ない。

一方、村上秀明氏とも、吉祥寺での出会いがまったくの初対面ではなかった。氏もまたご両親と同じく、京大陸上OB会の催しにしばしば来客として来られ、佐久間夫妻のご葬儀にも参列していたという。やはり私とは何回もニアミスをしていたのであった。

さらに不思議なのは、秀明氏と私との間に高林藤樹という人が介在していたことである。高林氏は京都百万遍近くで、小さな印刷屋を50年来営んできた。やはり京大陸上のOBで、佐久間氏に負けず劣らずの世話好きである。京大陸上のみを偏愛してきた人であるといってもいい。店にはしょっちゅう現役やOBが出入りする、おそらくこの光景は今でも変わらないのではと想像する。とりわけ、部のマネジャーを務めると、濃密な偏愛を集中して受けることとなる。実はマネジャーも務めたことのあった私は、その偏愛をたっぷり受けた一人なのであった。高林氏は日常「天チャン」と愛称されていて、この名を知らない京大陸上関係の人は、まず存在しないと断言できる。

ところで東京で育った村上秀明氏は、京都で学生生活を過ごすことを希望していた。そこで父上村上利明氏は親友である佐久間氏に、京都での適当な世話役の紹介を依頼したのであった。頼みを受けた佐久間氏は、おそらく、何のためらいもなく、即座に後輩である高林藤樹氏に依頼の電話を入れたに相違ない。電話を受けた高林氏もまた、何のためらいもなく即座に「承知しました」、と応じたに相違ない。

願いかなって京都に遊学することとなった村上秀明氏は、まずは高林家の2階の座敷で生活を始めたのだという。これを耳にするや、私は思わず彼に聞き返した。「万里小路に面したあの部屋ですね！」と。秀明氏が暮らしていた時よりも、十数年時間は遡るのだが、私も事情あって半年ほど、その全く同じ部屋で暮らし、高林家の食客をしていたことがあったのである。

また秀明氏は、京都での学生時代から現在にいたるまでずっと、高林家とは家族ぐるみの交流があり、高林夫妻には媒酌人までも引き受けていただいたのだという。

ここまでくるともう単なる奇縁どころではなくて、私には余戸二神が紡いだ奇譚のように思われてくるのである。

現在私は、かつて佐久間秀明氏が長年にわたって、たった一人で担われてきた京大陸上OB会東京支部事務局長なる役目を引き継いでいる。私がやっていることは世話人グループのたんなる統括役にすぎない。だから万事を一手に引き受けていた佐久間氏にはとうてい及びもつかないが、最後まで力を尽くしてこのお役目を果たしたいと思っている。また恭子叔母、村上秀明氏とのお縁も大切に、これからゆっくりと育て、深めてゆきたいと考えている。これらは余戸二神から贈られた、このうえない大切な絆でもあるのだから。

参考資料

『中外医事新報』

『東京医事新誌』

太田安雄『太田雄寧傳』雄寧会、2003.

齊藤文嗣「二神寛治と桑田立齋の系譜について」『海の民ふたがみ』
2004、No 7、p.7~25.

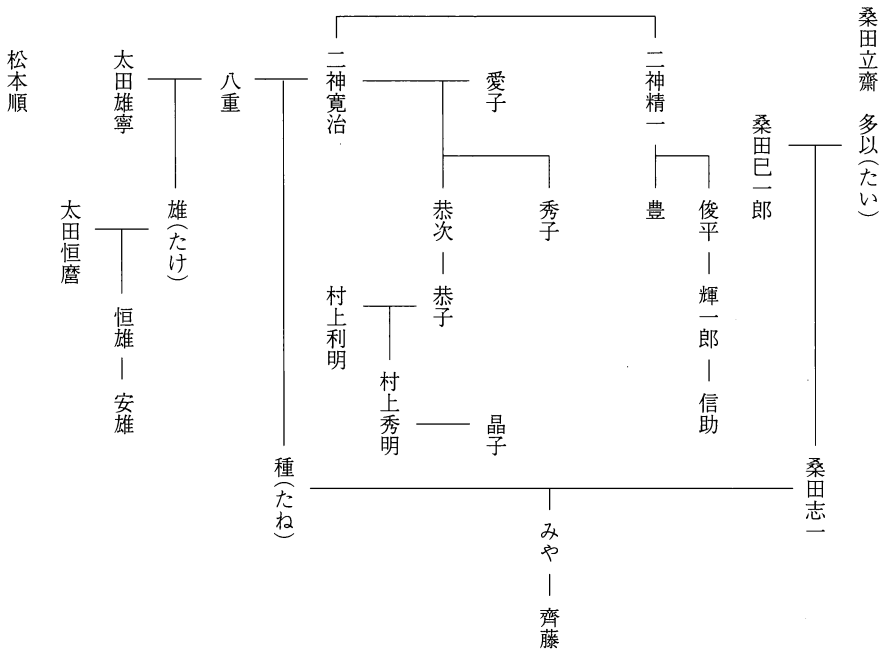
鈴木要吾『蘭学全盛時代と蘭疇の生涯』大空社、1994.

高須賀康生「太田雄寧と収養館医学戸所」『伊予史談』1984、No254、
p.7~12.

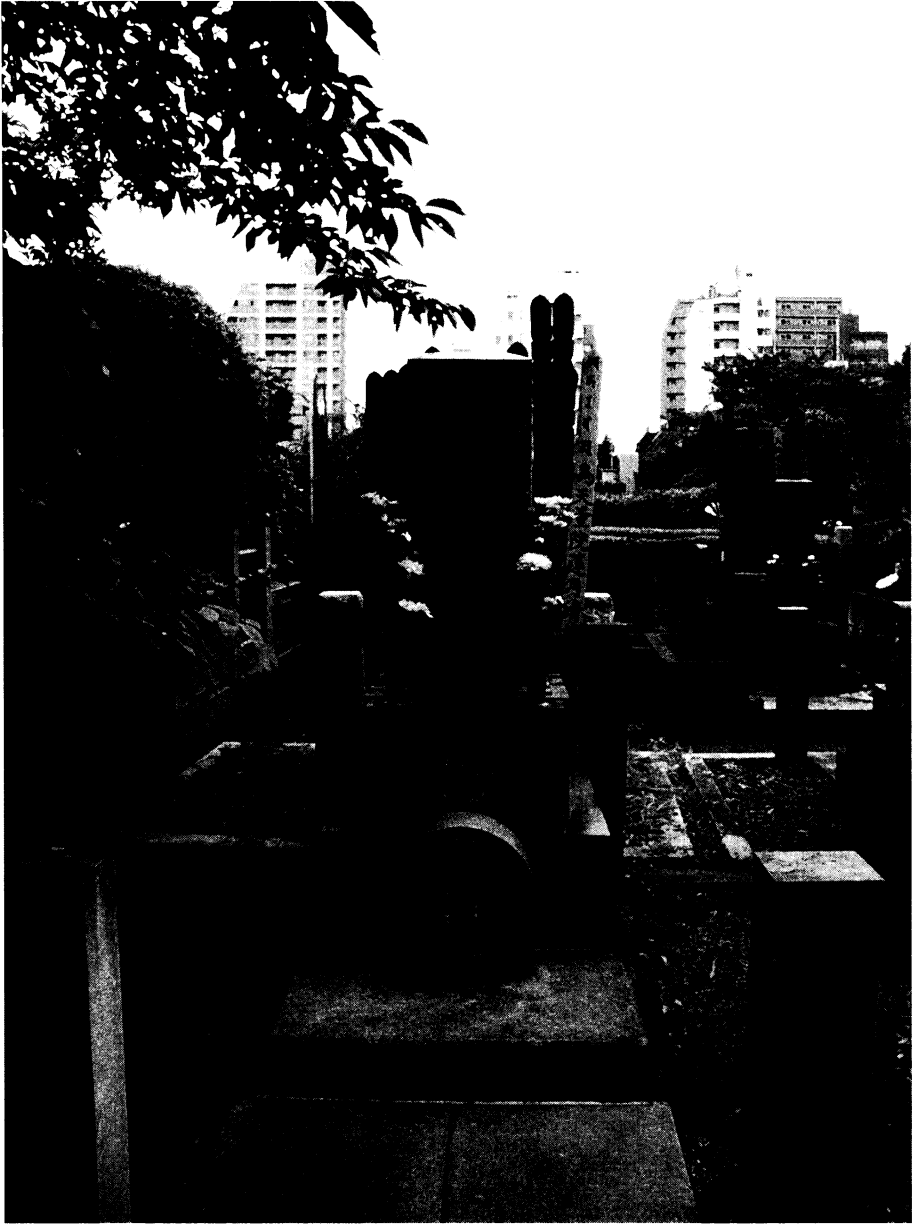
二神輝一郎「二神精一翁を語る」『愛媛の文化』1973、No13、p.59.

吉村昭『ふおん・しいほるとの娘』新潮文庫、1978.

吉村昭『暁の旅人』講談社、2005.



余戸二神・太田・村上・桑田 略系図



東京都文京区駒込・吉祥寺二神墓地

特別寄稿

② 双水執流の成立と二神半之助

臼木 良彦

双水執流を考える上で大事なことが2つある。1つは、組討と腰之廻の正確な定義であり、もう1つは、双水執流の正確な成立時期とその時代背景で、そのことを具体的に述べるならば流祖半之助がいつ生まれ、どのような役職に就き、どのように生きてきたかが重要なポイントになる。

特に、腰之廻については、源流ともいべき竹内流を参考に考察すべきはずだが、残念ながら過去に今までこの作業を行った者がいない。だから、長い間に変化し、腰之廻を居合術とか甲冑居合などと表現してしまっていることが多いが、これらは時代考証を無視した考え方ですべて誤りである。

竹内流が定めた腰之廻とは、要約して述べれば回転や跳躍といった独特の動きのあるもので、また小太刀などを持って行う組討のことを言う。つまり、剣術や居合などではなく、あくまで組討の1つにすぎないのである。だから、竹内流では居合は別に存在している。

二神半之助が生きていた江戸時代は、甲冑とは基本的に無縁の時代で、このことを正確に把握しなければならないし、そもそも徳川幕府は武士が甲冑を身につけること自体禁止したのである。

これらのことは後で、双水執流の成立時期でも述べるが、いずれにしても当流に限らず武道は少しでも古いほうが優れているかのような思いに駆り立てられて、いつの間にか悪意は無いにせよ事実を変えて伝わってしまうことが多くある。

例えば、天理大学の論文「双水執流組討腰之廻について」の中で、第8代舌間宗益（これには、天文4年（1535）になっているが、元文

4年(1739)が正しい)の例をあげれば、「宝暦の頃、直方領主伊勢守長清公のお供をして、東海道金谷の川人夫が無礼な振る舞いをしたので、川人夫数十人を川に投げ込み長清公よりお褒めに預かり、のち加増される」とあるが、これは全くの作り話である。まず、伊勢守長清について調べてみると、寛文7年(1667)生まれで享保5年(1720)死去。

つまり、宝暦とは長清が死んでから30年後の事になるわけだから、この時点でありえない話で、(享保1716-1736、宝暦1751-1764)また、さらに言えば、宗益が生まれたのが長清の死んだ年の享保5年なので、長清とも重ならない。ちょっと調べれば簡単に分かることだが、いつの時代か何かの事例があって、それがいつの間にか宗益の武勇伝に入れ替わってしまったいい例である。

これらのことについて、舌間宗章著「双水執流組討腰之廻口伝書」(天保4年)をはじめ、多くの伝書を約10年の歳月をかけて研究した結果、少なくとも宗章の時代までは腰之廻は組討として伝わっていたことが分かる。

これによれば、腰之廻の中段は小太刀を使用した組討だということがよくわかるし、また技の多くに竹内流に類似するものもあり大変興味深い。要するに当流においては、素手で行うものが組討で小太刀等武器を使って行う組討を腰之廻と定義付けていた。

双水執流の成立時期

二神家系図によると、半之助は寛永14年(1637)に起きた島原の乱に父二神時成と一緒に福岡藩士として参戦し、時成は戦死(寛永15年1月、70歳)し、半之助自身も負傷したという。その後、福岡に時成の菩提寺を置き、生活基盤も福岡に置いていたようである。また、半之助の没年は、元禄6年正月5日で、これを逆算してみると、江戸時代のはじめの慶長から78年目ということになる。当時の平均寿命から考えて、仮にそれよりも長生きしたとしても半之助はこの慶長前後に

生まれたと考えるのが妥当だろう。従って、竹内流の流祖竹内久盛の没年が慶長より前の文禄4年（1595）だから、その弟子であることはありえない。面白いことに竹内流の系図には、竹内久盛の弟子に二神某（竹内流、二神流）がいて、その弟子に二神半之助（双水執流）となっている。まさにその二神某こそが半之助の父時成である。福岡藩寛文官録によると、二神半之助（九太夫）は、小林四郎左衛門組の馬廻りで200石の高級武士として記録されている。馬廻りとは今でいうと警護官（SP）のことで、要人の警護にあたる職業である。

半之助はおそらく島原の乱以後福岡に戻ると馬廻りとして働いていたのではないだろうか。そして、自分の仕事を通して自分が学んだ竹内流と二神流を自分なりに工夫改良し職業でもある馬廻りに適した技として誕生したのが双水執流だと思う。それは、舌間宗章の「口伝書」の組討をすべて再現して分かったことだが、それを見ると、現在行われている形とは大きく違い、まさに警護官が行う護身術的要素が多く見受けられる。

わが国の甲冑戦争がピークに達したのが室町末期の戦国時代で、それ以後、慶長5年（1600）の「関が原の戦い」、慶長19年（1614）の「大坂の役」、そして寛永14年（1637）の「島原の乱」をもって終わったとっていい。それ以後、徳川幕府は全国を統一、慶應3年（1867）の大政奉還までの約260年に及ぶ年月で幕末の内乱を除けば、ほとんどが平和国家として存続していたのである。

ところで二神半之助は、誰の警護を主にしていたのか。これを調べていたら面白いことが分かってきた。半之助の門人帳には、伊丹九郎左衛門という人物が記載されているが、この伊丹は福岡藩の家老で寛永8年（1631）にはすでに千石以上士付となっており、かなりの上級官僚ということになる。つまり半之助は、その伊丹の護衛官として働いていたと推測できるし、伊丹自身も心身鍛錬の目的で半之助から双水執流を習っていたのではなかろうか。

ところが伊丹は、延宝3年（1675）に東漣寺藩が直方藩に改藩され

ると福岡藩より直方藩へ出向辞令が出て直方藩に移り住んだのである。
〔直方藩元禄分限帳〕で家老1千石)

この時、半之助も伊丹の護衛官として一緒に移り住んだと考えられるし、半之助以外にも寛文6年に2代目を継いだ田代清次郎や多くの福岡藩士が移り住んだ。福岡隻流館の略史には、双水執流の成立時期を江戸時代初期の承応(4代将軍徳川家綱の時代)とし、その略史には、「承応の頃舌間又七の斡旋により筑前直方に来り、永らくこの所に滞在せり」と書かれている。二神半之助が直方にいたかどうかは別として、少なくとも寛永14年(1637)以降、延宝3年(1675)までの38年間は基本的には福岡が生活拠点であったのである。

私が思うに、半之助は父・時成が死亡した寛永15年以後福岡に戻り、自分の体制を整えた後に修行のため、一時福岡を離れ、その後、旧知の友である舌間又七(旧姓臼杵姓、豊後出身)の招きで直方に移り住んだ。そこで二神流を改め双水執流とし、それをもって再び福岡藩に召し抱えられたのではないかと。

以上の経緯をもってみても分かると思うが、双水執流はあくまで馬廻りという職業のために開発されたといってもよい武道で、その多くは護身術が基本に構成されている。

半之助は、延宝3年に直方藩に入った後、延宝の終わり頃おそらく久留嶋氏の誘いで豊後森藩に入るが、その後、森藩から召し放ちとなり豊後竹田に移り、そこで終焉を迎えたのである。

二神半之助正聴(嘉林、七太夫、九太夫、九郎右衛門)

元禄6年癸酉正月5日、法名梅翁虚白

<平成19年9月15日記之>

傘寿を迎えて

二神 浩三

2007年の9月15日（2年前までは敬老の日であった）、小学生の孫達が入れ代わり立ち変わりやってきて「お祖父ちゃん お誕生日お目出度う」「何才になったの？」と笑顔を見せる。「サンジュだよ。」と答えると「ウソ！ それじゃあ お母さんより若いよ。」

紙を出し、傘と云う字を書き、次にその略字として“伞”を書いて「これを分解すると、八十と読めるだろ。また、傘は音読みすれば（サン）と呼ぶ。それで80才のことを**傘寿**（サンジュ）と云って、長生きをしたことの証として、お祝いをすることにしているんだ。」「それでは、88才になったときのお祝いは、何と呼べばいいだろう。」「???」。「八十八を縦に並べて書くと“米”となり、米は音読みすると（ベイ）だから、“**米寿**”（ベイジュ）と呼んでいる。その次のお祝いは90才で、漢字で書くと九十であるが、これを縦に書くと卒業の



小学生の孫に囲まれて

“卒”(ソツ)と云う字になる。そこで、90才のお祝い年を“卒寿”(ソツジュ)と呼んでいる。その次のお祝いは99才で、100から1を引くと99となる。一方、百から一を取り除くと、“白”と云う字になるから、99才の祝い年のことを“白寿”(ハクジュ)と呼んでいる。」

「昔このような言葉が造られた頃には、百才まで生きる人は稀にしかいなかったと見え、百才以上の祝い言葉は造られていない。しかし、高齢化社会のこの頃では、百才以上の高齢者が増加するに違いない。百才以上の祝い年を考えておいておくれ。」「ハイ!! 勉強になりました。お祖父ちゃん 有難う。」

私が生まれたのは、昭和2年である。従って、これまでの80年間の80%は昭和の時代であり、昭和の歴史は、そっくりそのまま私達の歴史でもあり、私達は昭和史の生き証人と云うことが出来よう。そこで、暫らくその昭和史を思い起して見ることにする。

昭和の始め頃は、第1次世界大戦の後に世界を襲った金融恐慌の余波を受け、日本の金融界や企業、農村は危機的状況に陥っていた。昭和6年9月には満州事変、翌7年1月には上海事変、5月にはかの5.15事件が起こるなど、日本軍部の横暴さが次々にエスカレートしていった。昭和11年2月には2.26事件があり、昭和12年7月には日支事変を引き起こしてしまった。小学生は、日の丸の小旗を振って、出征兵士の見送りに駆り出された。完全に戦時色に染まり、衣料の切符制が実施されたり、国家総動員法が公布され、米や砂糖も切符制となり、昭和14年9月には第2次世界大戦が始まり、翌年15年9月27日には日独伊三国同盟が調印された。また、一方では、行政の簡素化を図る為の昭和の大合併が行なわれ、愛媛でも温泉郡三津浜、味生、久枝、潮見、和気、堀江、桑原の町村が松山市に合併した。戦争への準備は徐々にではあるが、着実に進められていた。

昭和15年から中学校の入学試験が面接制に変更になり、私達も新しい入試制度に従って、各自の志望校に入学した。所が、昭和16年12月8日、日本軍は遂にハワイ真珠湾を奇襲攻撃して、太平洋戦争が勃発

した。中学2年生の時である。1年生の時には牛の革靴であったが、2年生になると豚皮靴になり、3年になると地下足袋しか無くなった。勤労奉仕で出征兵士の留守宅の農家へ出向くことが増えたので地下足袋の方が使い勝手がよかった。食糧増産や飛行場造りに中学生が駆り出されていた頃は、まだ、勉強時間も幾分残っていた。しかし、5年生になると、工場での人手不足を補い、兵器の増産を行なうための学生の勤労働員が始まり、工場の寮に入れられ、そこから工場へ通勤する生活になり、学校へ行くこともなく、家にも帰れぬ毎日となった。日曜日に町に出ても「貝ジルアリマス。」と云うビラが店先に貼られ、貝のスープが空腹を満たす唯一のものであった。そのような時、昭和18年9月には陸士、海兵の合格発表があり、私は海兵を選び、10月9日に江田島で入校式を迎えた。その頃には、大戦緒戦の華々しい戦果も薄れ、米軍側が攻勢に出、10月10日（1ヵ月の入校教育開始）には、米機動部隊による沖縄空襲が開始された。11月6日には、呉地方への空襲が開始され江田島も戦場の一角となった。日本も神風特別攻撃隊、回天特別攻撃隊等によって反撃せんとしたが、焼け石に水であった。サイパン島からのB29爆撃機による東京大空襲も始まり、戦争は一般人を巻き込んで次第に熾烈さを増していった。当時、兵学校においても、昭和20年3月に、防空壕構築隊が結成され、地下兵学校建設作業が開始され、1日3交替で、不慣れな穴掘り作業が課せられた。山肌に横穴を掘り進んで行くのであるが、疲労の割りには作業が捗らなかった記憶がある。また、兵学校幹部の校長は大河内伝七中将（昭和19.8～19.10）、小松輝久中将（19.10～20.1）、栗田健男中将（20.1～20.8）と激しい人事異動があった。生徒館も空襲による火災被害を軽減させるため、2個分隊を1室にまとめ、ベッドを2段とし、建物が間引きされ半分になった。7月末には大原分校において、腸チフス、B型パラチフス患者が200名も発生し、柔剣道道場を急遽隔離病室として収容した。しかし、77期生（我々より1期下）1名が病により生命を失った。

そして昭和20年8月15日を迎え、玉音放送を聞き、不明朗なラジオの音声に玉音放送の真意が掴めず、些か混乱を来した。

8月18日には、四国出身者は米軍の進駐が早いかも知れないとカッターに分乗して焦土と化した四国路へ帰省した。国敗れて山河ありであった。19才の多感な年に、これまでの一切の日本の教育は間違っていた。民主主義の世の中で、新しい日本の建設に邁進するように求められ、アメリカの占領軍GHQによる占領政策の中で、色々な改革が強権的に実施された。当時は、国も社会も信じられず、自分自身しか頼れるものは無い状態であった。

そのような情勢下にあったが、旧制高校に編入学し、始めから勉強し直す道を選んだ。さすが、高校には尊敬し得る先生方がおられた。しかし、食糧難は続き、空腹を満たすため、闇米や闇物資の調達に走り回った。そうしなければ餓死してしまうのである。それでも平和な時代の恩恵を享受し、家族に1人の犠牲も出さずに済んだことを喜び合った。やがて大学も新制大学となり、数が増えた分入学も楽になった。旧制高校を出ていた関係から、新制大学へも編入した。

大学の数が増えた事は、教師不足を招いていた。そこで、卒業とともに、教授の勧めもあって、そのまま大学の助手となった。以後、専ら機械工学の中の熱工学分野に席を置き、特に伝熱の研究に没頭した。中でも2次的流れを伴う管内熱伝達の研究では、世界をリードしたこともあり、国際的な仕事が出来た点では満足の行く結果であった。

一方、大学の管理運営面では、人の嫌がる仕事も難なく成し遂げ、最後に工学部長に推され、工学部の改組、大学院博士課程の設立、外国の大学との研究協力協定の締結等、体が三つ位必要な程忙しい毎日であった。2007年秋の叙勲で瑞宝中綬賞を受賞した。

昭和史の大半は戦争の歴史であり、耐乏生活の歴史でもあったが、傘寿を迎えるまで、よくぞ生き抜いたものよと御先祖様に感謝申し上げる次第である。

感動のトライアスロン中島大会

二神 俊一

猛暑に見舞われた夏の後半8月26日、瀬戸内海に浮ぶ忽那諸島の中で一番大きな中島では、恒例の「トライアスロン中島大会」一色となり、全国からの参加者および関係者が集まって一大イベントが繰り広げられた。

トライアスロンは別名「鉄人レース」とも呼ばれ、「水泳」「自転車」「ラン」の3種目を続けて行い、その総合タイムを競うというハードなスポーツである。これまでも話しには聞いていたが、別世界のこのような感じを受けていた。しかしながら、長女の婿が初参加するため、「応援に行かないか」と誘われたので、良い機会だと思い行くことにした。

中島は松山市の北西海上約15km、伊予灘に浮ぶ忽那7島（興居島・野忽那島・睦月島・中島・怒和島・津和地島・二神島）の中で一番大きい島である。面積は20.74平方キロメートル。人口は3,572人（平成19年3月1日現在）。町全体が瀬戸内海国立公園の中にある。

中島は、二神島へ高速艇で行く途中には必ず（神浦港へ）寄港していく所で、トライアスロンの大会当日には臨時便も用意されている。8月25日（土曜日）参加登録や前夜祭などがあるので朝から出発。娘らはテント・食料などを満載し、フェリーで行き、我々は後から高速艇で駆けつけた。連日35度を超える猛暑で、中島へ降りても爽やかな海の風ではなく熱風が吹いている感じだった。長師・姫が浜ビーチに近い場所でテントを二張りした後、本当に久しぶりに海水で泳いでみたりした。直ぐ近くには本番のスィム用にロープが張っており、トライアスロンの選手が練習していた。

夕方から会場の広場に選手・応援者など500余名が集まり、前夜祭が行われた。出場者名簿も配布され、430名余りの選手の氏名・年齢

・ゼッケン番号が一目でわかるようになっていた。名簿をじっくり眺めていると、銀行時代の後輩・県庁の知合いなどの名前を発見し、一層身近なものに感じた。暗くなったころから、前夜祭も始まり、中村松山市長はじめ関係者の挨拶のあと懇親会となった。我々のテーブルには北海道から駆けつけた中年の男性や東温市の内科医など、さながら異業種交流会の感じだった。アルコールがまわり和気あいの良い雰囲気だった。舞台の上では某テレビ局がこれまでの22回皆勤の選手を10名程度紹介していたのには驚いてしまった。選手達もそれぞれ翌日の健闘を誓いあったりしながら大いに盛り上がっていた。その晩は海岸の側のテントで横になったが、結構暑くて寝苦しかった。それでも、直ぐ近くに波の音を聴きながら寝たりしたのは本当に久しぶりだった。

大会当日は朝から快晴で、ちょっと歩いただけで玉のような汗がでる猛暑日だった。スタートの時間前になると、中島にこんなに人がいたのかと思うほど集まってきて、最初の水泳1.5kmの周辺は文字通り黒山の人だかり。市長のピストルの合図で10時半スタート。選手は水しぶきをあげながら力泳した。遠目にはイワシの大群が泳いでいるような異様な光景であった。皆同じような姿なので見分けがつかないが、ゼッケン番号で識別するしかない。最速のスイマーは二位以下に50～60メートルくらい差をつけて上がってきた。砂浜での応援から次のバイクの方へ移動。海岸線を40km自転車で走るので選手は自転車を置いてある公園へウエットスーツを脱ぎながら走るのだが、泳いだ直後で砂浜に足をとられ転びそうになったり……。しかしながら、選手は一生懸命だ。沿道につめかけた大勢の観客からは惜しめない声援が送られていました。

自転車は相当スピードが出ているので折り返し地点に陣取って応援したら結構ゆっくり眺めることができた。

最後はなんといってもハイライトの10kmのランだ。その頃は猛暑もピークに近い状況で走る選手も大変だが沿道を埋め尽くした観客も大

変な我慢の応援であった。木陰はもう先着の応援団に占領され、太陽がじりじり照りつける場所しか空いていない。最初にゴールした鉄人は別格だが、県庁の知合いは50歳台で2位だったりして健闘していたようだった。



スタート前のひととき

娘婿は初出場でギブアップもしないで完走し、自信がついたのか、来年もチャレンジしようと張り切っていた。

帰りの高速艇はトライアスロン選手・応援者などで満員、高浜から電車に乗ったら豊田渉さんも疲れた顔で乗っていた。市職員として以前からトライアス



完走できた喜びの顔

ロンの準備で大忙しだったようで、今日もボランティアでお世話係で奔走してた由。お疲れ様でした。

今回初めてトライアスロン中島大会を見て、大勢のボランティアに支えられて小さな中島で大きなイベントが出来、島中の人々が全員参加で盛り上がり、久しぶりに皆の気持ちが一緒になった光景に直面し大いに感動した2日間であった。

以上

船旅断章

二神 重成

マラソンで鍛えたつもりの脚が、近頃めっきり衰えた。やむなくバスを船に切りかえて、好きな旅を続けている。

先年、ドナウ河を10日間航行した。大河を動脈とする城と町とのネットワークは、島国日本では得がたい文明史の興亡を展示してくれる。この夏、地中海沿岸のクルーズに加わった。南欧の暑さには参ったが勉強になった。地中海は大昔、大きな湖だったそうだ。

何となく日本海を思った。

欧州の大陸文明とは異なって、自然との共生を願う文化が昔、地中海の大きな島に栄えたという。

初期のキリスト教は、地中海に沿って伝えられることが多かった。

数年前にシチリアに杖をひいた。北欧の水軍がこの島に築いた王国の跡を見て、船の行動力を思い知らされた。

最近、ルネサンスに新しい解釈が加えられた。ルネサンスがイタリアの地にめざましく開花したというよりも、地中海の西、アフリカの北岸も含めた広い地域で、パックス・ロマーナの陰での準備過程を経た後に、南スペインを核としてルネサンスは芽生えたとする。地中海を包み込んだアラブの政治力と学識が、ルネサンスの準備に大いに貢献した。

歴史は勝者によって編集され、然らざる者の貢献は不当に無視される。

地中海でも日本海でも、海を舞台とした歴史は最近まで正当に編纂されなかった。

この春、東大生になった孫が宿題として、壬申戸籍を調べるように命ぜられた。この教官は網野史学を強く推したらしく、孫は今「海の民」誌を一所懸命読んでいる。私は、「海民資料館」が松山辺りにあ

ってほしいと思っている。

今年の早春、瀬戸内から壱岐を航し、その帰り豊後水道を通過して宿毛に停泊。城辺で祖先を拝し、神戸に帰投して二神水軍の跡を偲んだ。

二神島本家の蒐集には、安南の通貨も含まれている由だ。海民のたくましい行動力を受け継ぎたいものだ。



クロアチアの要港 ドブロニク

父と防予の島々の思い出

二神 重則

50年も前、小学校5年生の夏休み。突然父が「学校主催のキャンプへ行け」と言い出しました。私は申し込んだ覚えがなかったし、いきなりのことから考えて出発のその日の朝申し込んだようです。

当時はバッグなんて洒落た物はありません、風呂敷とかお古の鞆の類で同級生は集まっていました。父はスポーツが好きで、京都で野球をやっていたようです。バットやグラブを包むパックに必要な物を詰めて、私を送り出しました。

定期船から迎えの小さな船に乗り換えたような記憶があります。着いた港から歩いて学校に行きました。「二神島」と聞いたのはその頃だったと思います。「へえー」と思った程度だったので、特に感慨はありませんでした。

キャンプと言えば飯盒炊飯です。その時の島は渇水らしく学校の下にあった砂浜の海水で米をときました、その後、水を入れて炊いたお米が、たいへん美味しかったことを今でも覚えています。

私はそのキャンプに申し込んでいませんでしたので、父が社宅の同級生か親から聞いて、

「二神島!!」

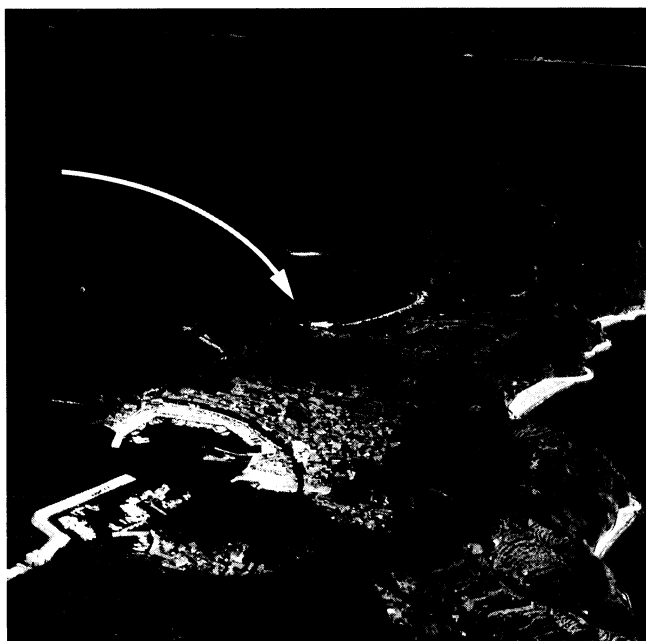
「行かさないかん」と、その様に思ったのではないのでしょうか。教室に蚊帳をつつて寝た記憶が残っています。6年生の時は陸月だったか忘れてしまいました。港から長い距離歩いた記憶があります。

父は戦前京都に住んでいました。勤め先は五条堀川の染物屋さんで、五条の「釜座通り」とか言うところに母と住んでいたらしい。私は20代に京都勤務になり五条大宮の会社に通勤していました。面白い巡り

合わせかと思っていました。その当時の担当地が滋賀県と京都府で、滋賀県高島市から福井県の小浜あたりから、国道27号を使って舞鶴に出るコースを通りました。若狭湾へは釣りでよく行き、岩屋という地名を覚えていました。昨年まで娘夫婦が小浜の近くの岩屋に住んでいました。これも何かの縁かも知れません。

その後、島へ行く機会は「二神系譜研究会」の前身だった準備会の折りまでありませんでした。2度目に島へ行った頃には、父は亡くなっていました。

父は終戦前頃から「丸善石油」に定年まで勤めていました。二神司朗先生（津田中学校の図画の先生でした）が描かれた大可賀にあった丸善石油のタンクの絵が卯之町の玄関にあります。見る度に父のことや司朗先生のことを思い出します。



矢印のある白い建物が小学校（二神島上空より東方を見る）

雑感（二神さがし）



関西支部理事 二神宏介

写真の二上山も
二神島の形に見えませんか!!

大阪府太子町の歴史ウォークでの楽しい話!!

太子町歴史資料館元館長の話を楽しく聞きました。1部を紹介します。二上山（にじょうざん）は二神山（ふたかみやま）と言ひ、神山（しんさん）が前に有り、右には女神山があります。この山は見る角度でピラミッドの形をしており、太子町は神々の宿る所として災害の無い町として栄えたそうです。胸の中でつぶやきました、俺も二神さん（山）や!!

二上山

二上山は、古くは「ふたかみやま」と呼ばれて、奈良県と大阪府が境を接するあたり、香芝市の西南方に位置しています。雌雄2つの山が寄り添うような姿、神の山、西方浄土との境界の山と人々に畏敬の念をもって見られ、万葉集をはじめ、数多くの歌、文章に取り上げられてきています。

「二上山」に沈む夕日はとりわけ神秘さを増し、古代の人々の眼には特別の山と映っていたに違いありません。

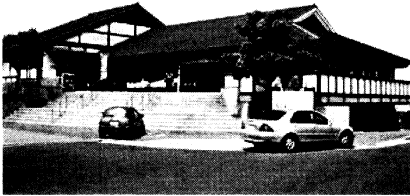
美しくも神々しい「二上山」の姿は、時を超えて、今に至ってもな

お山とのシンボルとして、見る人に不思議な感動を与えています。大阪府と奈良県の境にあって、大阪府側から見ると、ちょうど駱駝の背のような形をしています。左が雄岳（517m）で、右が雌岳（472.2m）で、両方とも金剛生駒国定公園に含まれています。

竹内街道

飛鳥時代の613年に造られた日本最古の官道で、難波津から太子町内を横断して二上山の南を越え飛鳥の都へ通じていました。推古天皇や聖徳太子が大陸へ派遣した遣隋使も飛鳥の都からこの道を通り遙か大陸をめざし、逆に大陸からの使節も飛鳥の都をめざして行き交う、シルクロードの東端・外交路として賑わい栄えました。

道の駅「ふたかみ」



奈良当麻寺（中将姫ゆかりの寺）の横の竹内街道を大阪方面に進むと途中に道の駅「ふたかみ」があります。奈良県では二上「にじょう」なのに何故か大阪方面に近づくと「ふたかみ」になります

二上山の麓にも二神神社跡があり



香椎宮の末社のひとつに二神神社（跡）がある。その場所には樹齢四千年の大木となった槇の木がある。

古い名前は二神山で、奈良の二上山と同じ呼び名である。山をご神体として崇めた。

二神神社跡の大槇（まき）

二上山の記事の一部はインターネットより抜粋しています。

インターネット苗字調べ

二神さんは全国ランク3147位で人口約4100人だそうです。

二上さんは全国ランク3965位で人口約3000人だそうです。

余談

北海道 二神敏郎氏が2006年12月4日に松下P H S出版の経営者セミナーで台湾を訪問しました。台湾では丸山大飯店（ホテル）で台湾の父と呼ばれる李登輝前総統とも親しく食事会をしたそうです。

李登輝前総統も来日されるたびに非難の記事になるみたいですが、大変な親日家で台中が平和であることを祈念します。



李登輝前総統夫妻と敏郎家族(娘3人)



李登輝前総統と記念写真

大阪手打ち

江戸では武家社会のせいか手打ちは（お手打ちにする）と嫌われ手締めする言い1本締め、3本締めと気合が入りますが大阪手打ちはのんびりしたもので戦時中は軍部から士気があがらんと中止されていたのを戦後、天神祭りの船渡御や、今宮のえべっさんの副娘で復活したそうです。今では落語家も最後の締めに使っています。

手打ちは船場の商人がお正月に1年間の契約を交わす際に手を打つ

(契約する)で現在の契約書みたいなものだったそうです。
やーさんの世界でも決まりごとは「手を打つ」と言ってせんか？

この話もここまで!! 手を打ちまひよか!!

天神さんと、えべっさんのお祭りで復活した
二つの神さんで二神さんや!! めでたいな、本決まり
この話の締めも大阪手打ちで、皆様大きな声でお手を拝借

打ちまひよチョン、チョンもひとつせチョン、チョン
祝うて三度チョンチョンチョンめでたいなチョン、チョン
本決まりチョン、チョン
皆さん、今後もよろしゅうたのんまっせ～

港山二神氏の系図

二神 康郎

私が二神島に関心を持つようになったのは家に伝わる系図がもとだ。和紙に包まれ桐の箱に収まっている。転写、執筆したのは二神種美氏。書き上げたのは明治23年4月30日。「二神八十郎養子種行の父母兄弟姉妹等を知らしむるため二神家本家の家系に依り透写し与う」と注記されている。二神島に住んでいた二神本家末裔の故司郎氏に依れば二神種美氏の戸籍名は仲次郎で司郎氏の叔父に当たるとのことであった。

系図は幅27センチの巻紙に墨筆で記され「豊田藤原氏子孫系図次第」で始まり全長6メートル。転写するのに何日かかったであろうか、見事な筆さばきで種美氏の教養が窺われる。司郎氏が所持する系図と比較したことがあったが当方の系図は天兒屋根尊から藤原鎌足までの21世代が省略されていたのに対し司郎氏の系図にはまだ何人か神様の名が記されていた。

二神本家から豊田氏を名乗って分家した我が先祖は享保19年に逝去した種次の弟種友で豊田嘉右衛門と号したが先述の八十郎は彼の長男だ。それ以来当方の系図は本家の系図とは枝分かれする。系譜研究会の常任理事豊田涉さんとは同じ流れを汲んでいる。

八十郎から4代目の助十郎の弟茂七が豊田氏から更に分家して二神姓に復帰し二神島を出て松山市の商港三津浜港の対岸（今の港山町）に居を構えた。彼を港山二神氏の始祖とすると彼から数え私は5代目に当たる。

二神茂七は明治18年に87歳で没した。従ってこの系図は彼の没後に書かれたことがわかった。そしてその子で明治41年に逝去した2世茂七に贈られたとみられる。その後を継いだ愛次郎は二神島の住民を大得意先とする船大工をしていた。私が幼稚園に上がる前に彼は腕を振るってよく竹トンボを作ってくれた。

私の父長憲は松山北予中学から慶応義塾大学経済学部に進んだが、結核を煩って中退し、長期療養後出資者を募り三津浜信用金庫を昭和4年に創業、晩年には理事長を長く務め昭和47年9月に逝去した。その後勲六等単光旭日章を授与され、私は大蔵省まで章を頂くため参上した。その三津浜信用金庫は、昨年10月松山信用金庫と合併し77年の歴史を閉じたのは残念だった。

父親長憲はどういう訳か二神島に行ったことがなかった。私は父の葬儀を終えた翌日、二神島に渡り二神司郎氏に初めて会った。その席に系譜研究会のメンバー中田和邦氏も司郎氏に呼ばれて同席した。

米国に本社のある世界的な地理誌“ナショナル・ジェオグラフィック”のライターとカメラマンが取材のため二神島を訪れたのは同じ年の春で、英文の掲載誌を「二神荘」で見せて貰った。それから毎年夏休みの都度帰省して、家族と共に二神島へ渡り司郎氏と会った。彼の筆になる二神島の絵と豊田渉氏がくれた二神島の鳥瞰写真が我が家の居間には飾ってある。

私のことを何故知ったのか忘れたが系譜研究会のメンバーで、当時千葉県在住の二神種昭氏が国分寺市の我が家に電話を掛けてきて、先祖の資料コピーを東京在住の二神さんに二人で配ることになった。電話帳から拾って案内状を出し、東京駅の銀の鈴で「二神氏」と大きく書いた紙を掲げて待っていると、20人ほどの二神さんが集まってきた。自己紹介をして貰ったが、弁護士、魚屋さん、医者、タクシー運転手など職業は様々であったが、いずれの方も元を辿れば四国出身であることが共通していた。種昭氏が集めた「中島町誌」、「豊田町史」、「日本神話と藤原氏」、「鹿島神宮」など先祖の資料は大変喜ばれ、なかには1万円を残して行った人もいた。

これらのことは、朝日新聞社刊の“朝日旅の百科”シリーズの「瀬戸内海」版に小生が寄稿した「二神島探訪」にも書いた。この本の初版発刊は昭和59年だ。同社の編集部には知人がいて、私が二神島と縁があることを知り執筆を依頼してきた。4ページの紙面には19枚のきれ

いな写真がちりばめられている。私の原稿をみた同誌編集部がわざわざ、このためにプロのカメラマンを東京から二神島に派遣し撮ってくれたものだ。その際撮った写真は、数百枚を下らぬと思われる。

前回の系譜研究会の会報第9号に「お先気になる港山二神氏」なる短文を寄稿した。私の子供は3人とも女で、港山二神氏のお家断絶を危惧した内容だった。世の中よくしたもので三女が先月婚約式を挙行したが、相手の男性は長男であるにも拘わらず二神姓を名乗ってくれることになった。これで系図の引き受け手も決まり、先ずはやれやれといった所だ。



系図を転写した二神仲次郎

余戸二神氏について

二神 信助

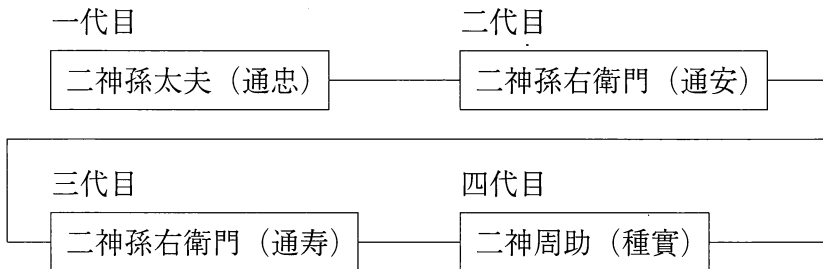
余戸（ようご）は昔、余土村（余戸・保免・市坪）の一部で温泉郡に属していましたが、昭和29年（1954）松山市に編入されました。余戸に二神姓はありますが、親戚になるという話は聞いておらず、何か情報があれば教えてください。

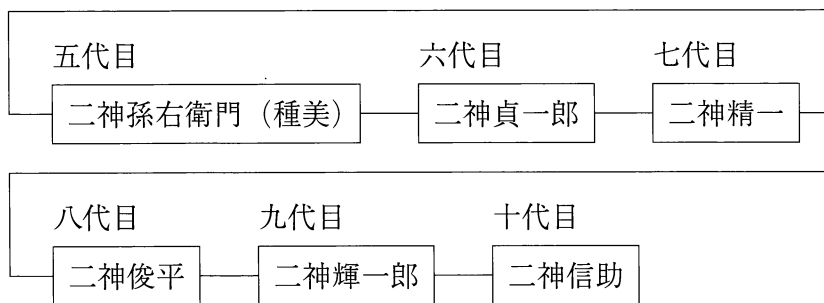
余戸二神氏については「海の民ふたがみ第3号」の「系譜・家紋紹介」で紹介済みです。いろいろな調査結果等があり、その時の元になった資料の一部を紹介します。

この資料は、二神哲五郎・輝一郎その他の人々の協力で作成されたものです。二神関係系図をご紹介します、私の父・輝一郎が祖父・精一を語る文書を見つけました。また、川端康成氏と余戸二神氏の関係についてもご紹介いたします。

1 二神関係系図

余戸二神氏は、藤原の子孫にて上代の系図は日本歴史に見るものと同一である。藤原氏より岐れて二神と豊田の二代となれり。伊勢の国桑名に住居せるも加藤嘉明に従って伊予の国風早に来る。後、分家して余戸に移り大庄屋となった。本系図は、二神精一以前は余戸の祖先代々の墓標及び仏壇によったものである。





2 二神精一翁を語る

二神輝一郎：記

私の祖父二神精一は、5代二神孫右衛門種美の次男として、嘉永2年愛媛県伊予郡余戸村に生まれる。若くして医師を志し長崎に遊学しシーボルトについて医学を学んでいたが、兄貞一郎若逝し、呼び帰えされて家業を継いだ。家を整え妻宮内ヒサを郡中より迎え四男四女の父となる。明治維新となると戸長となり村政を改正した。南画を名草逸峰に学び一生南画を描くことをやめなかった。

明治初年、海運の必要を感じ、宮内より一万円の出資を受け、三津に船問屋をなしたが失敗したという。経済の発展のためには、交通の便をはかることが何よりも大切なりと思ひ、地方有志と計り南予鉄道を起し貢献した。理財の必要より、衣山溝辺に山を買ひ、梨・柑橘を植えさす。次に金融の必要により伊予農業銀行を松山に設立。村上半太郎氏に頭取を委嘱し、自らは郡中支店長となり余戸町の家より通ひ、地方金融界の発展に尽力した。還暦を迎えるや一切の公的生活を絶ち、吹上に隠居し石手川の堤防を散歩し南画をかき昭和6年3月8日、享年82歳で不帰の客となる。死に至るまで来客絶えず、祖父の顔を中心に去来するもの不尽である。

二神俊平は、明治12年4月二神精一の3男として生まれる。大庄屋の3男坊で幼子より我慢で生来体が弱かった。松山の高等小学校に通ひ、今の東校に入学し夏目漱石、林鶴一等の諸先生に学び、当時の松山中学の様子を面白く話してくれた。自ら数学は苦手であっ

たが、文章はよくしたと語っていた。兄・豊が東大の医科を卒業し養生していたが、まもなく病没したために上級の学校に入れてもらえず、中学校を卒業すると小学校教員の検定試験を受け、教員の資格をとり余土小学校の教員となり子弟の教育に従事する。耕地整理が始まると教員をやめ自ら事務を担当し余土の耕地整理は着々と進められた。整然たる美田になりゆく姿は髣髴として浮かんでくる。森恒太郎村長を中心に日本の模範村として活躍した当時と現在の余戸町の様子を見ると、隔世の感がある。父は耕地整理が完成すると青年会長になり、青年の指導に当たり柔道、相撲を奨励し精力的に青年の指導をした。又、村民の皆様に推されて村会議員となり学務委員として村の教育に貢献した。晩年は病弱であったが、書号を「黙々山人」とし筆をふるい皆に贈った。尚、皇紀二千六百年三月より、大字余戸の題のもとに記憶のままに書き残した三冊と、青年会の題のもとに著した一冊が残っている。昭和二十年十月八日朝、六十八才で没した。

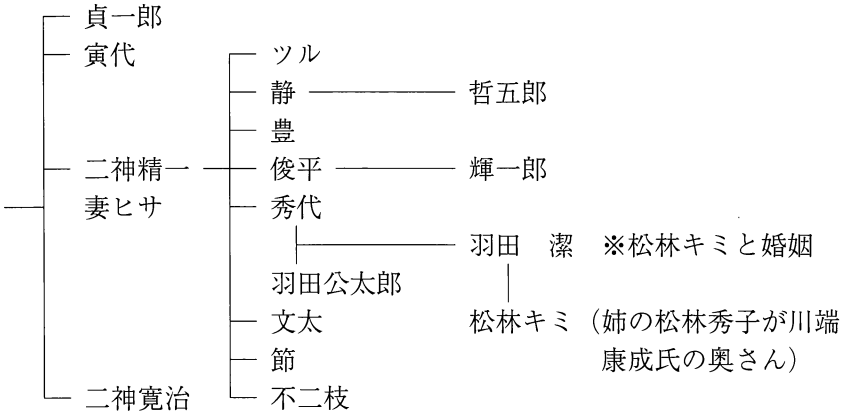
二神哲五郎、明治三十二年十二月に二神静の長男として余土村に生まれる。幼年時代腕白で小学校の成績はあまり芳しくなく、六年生、高一で松中に入學できず、高二を卒業してやっと入學できた。尋常のものに負けまいと発憤して時間を惜しみ勉強した。例えば風呂場に書架を作り、入浴中も読書した。又、松中へは徒歩で通い常に一、二番であった。松山高等学校が開校したため、理科甲類に入學した。松高三年間の勉強は常人の及ぶことのできない程の努力ぶりであり多方面の書を読んでいたのを思い出す。

東大理学部実験物理科に入學し、物理学の研究に余念なく、良き成績で卒業すると同時に理科学研究所員になり、長岡半太郎先生のもとで研究する。論文を京都大学に提出し理学博士となると、九州大学の実験物理学の教授となる。終戦後過労のためか電車にはねられて四十八日の人事不省となったが、九州大学医学部のご尽力で健康を回復し、研究を続行し工学博士となる。無事九州大学教授の職

を終え、退職後、香推産業大学の教授となり教育に専念した。学界教育界の功績により勲三等旭日章を授けられ、昭和四十七年八月他界する。戒名白光院釋哲玄理居士とせられ東京の墓地に葬られる。
 (松山市余土)

3 川端康成氏との関係

七代目二神精一の次女秀代と羽田家公太郎氏が結婚し、長男潔氏が松林キミ女子と結婚する。松林キミさんのお姉さんが川端康成氏の奥さんである。



※「海の民ふたがみ第7号」で齋藤文嗣氏紹介



写真：左から寛治、寅代、精一（明治27年撮影）

以上、自分流に解釈したりしていますので、間違い・疑問点がありましたら、ご指摘・ご質問を投げかけるようお願いいたします。

不可想像男

二神 久藏

父の母方の実家に「増原」と言う造り酒屋が、伊予・宇和島市内に戦前まで在り、今は潰れて「無い」と聞いている。其の増原家は、仙台藩、独眼の伊達政宗の長男・秀宗が仙台藩家督を継げず、初代宇和島藩主として来る時、仙台より同行した御用商人の一人で在る。

其のいきさつは蛇足だが、仙台藩主伊達政宗が豊臣か徳川かと悩んだ末、徳川方に加参したが、家康から60万石を100万石に加増する約束を反故にされ、その後「大坂冬の陣」に政宗と長男秀宗が参加し、其の功として家康から政宗に伊予宇和島10万石を与えられた。之を父・政宗は本来なら仙台藩を継ぐべき長男の秀宗に、別家として押し付けた。長男で在りながら仙台藩主を継げ無かった事で、後々まで尾を引くが、明治維新では仙台藩60万石が伯爵、別家宇和島藩10万石が侯爵と位は上位に成るので、初代秀宗も少しは気が晴れたと思う。

理由としては、秀宗が豊臣側に居た身だから、徳川の世界では家康に目を付けられ仙台藩主にはふさわしく無い。又、生母が側室だった事などで父・政宗が家督を継がさ無かったと言われている。(秀宗は豊臣秀吉から「秀」を賜り「秀宗」とし又、豊臣秀頼のお側小姓でも在った為)

其の初代宇和島藩主秀宗に同行する家臣団は、父・政宗が57騎を人選し、同行させる御用商として各商人、職人等も父・政宗が人選して付けた。本人秀宗の人選は無視に近く、これが又、尾を引き「宇和島騒動」いわゆる、家老、山家清兵衛一族暗殺事件(山家清兵衛は元、父政宗側の人間で秀宗は疎ましかった)と成り、父・政宗の逆鱗で秀宗は切腹、お家断絶と成り掛けたが、秀宗の正室の父彦根藩主井伊直政の口添えと、老中土井利勝の取り成しで事は収まった。

これで秀宗も反省して藩政に傾注し、5男の宗純に3万石を分知し、

伊予吉田藩を造る。この吉田藩3代目村豊（左京亮）が近松門左衛門等に依ると、赤穂の殿様浅野内匠頭は潔癖で正義感が在る、伊予の伊達左京亮は吉良氏に賄賂を贈り卑しい殿様、と物語「忠臣蔵」が出来あがっていく。ただ、物語と歴史は違うので、宇和島伊達藩の領民として後日口を挿みたい。

初代藩主秀宗と仙台から同行した御用商増原家のその後の娘〔私の祖母〕が、子供の頃に宇和島城へ登城した時の事を、父からよく聞いて居た。何でも旧暦の小正月、現在の2月10日～15日頃殿様に呼ばれたそうである。祖母は明治3年生れなので、8代宗城か9代宗徳の時代ではなかったかと思われる。小正月は女・子供のお正月との事で、手土産に小判を三方に山盛り盛り持参したら遠慮せず直ぐ受け取られたとの事。（山盛りとはと、父に聞くと形からして30～50両ぐらいとの事）。

そこで殿様と「蹴鞠」をして遊んでもらったとの事です。ですが、増原家は商人で、殿様は男子で武士。身分の高い者が商人の娘と「蹴鞠」などして一緒に遊ぶのかと疑問に思われるが、あくまでも父から聞いた話だ。そして、帰る時には殿様からお菓子を土産に貰って帰ったとの事である。

20代当時「蹴鞠」の意味が解らず、手をつく「手鞠」童謡で紀州の殿様の「てんてん手鞠唄」の「手鞠」ではないかと父に聞くと、足で落さぬ様に蹴って人に渡す遊びだと言われた。蹴鞠の意味が解ったのはそれから20年近く後の事。正月のテレビ番組だったと思うが、京都の平安神宮で平安王朝の遊びで「蹴鞠」が紹介され、初めて、「ああ、これが父の言ってた蹴鞠だったのか」と理解が出来た。「蹴鞠」の動作と「鞠」そのものが、言葉とか文献では想像し難く、何よりも言葉より「現物」だどつくづく思った。

何で今頃「蹴鞠」の話かという、現在然る全国紙で夢枕獏作の「宿神」が新聞小説として毎日連載されている。「蹴鞠」が準主人公となって居るので、Sさん、Wさんからの原稿ご依頼が有り、切羽詰って書いた次第である。

卑弥呼の墓

二神興三郎

会員の皆様ご無沙汰いたしております。

今回のつぶやき、独り言にて二神系譜とは関係のないことですが、私の子供の頃よりの夢を文章にしておきたいと思いますのでよろしくお願ひします。

私は子供の頃、愛媛県喜多郡五十崎町（現・内子町五十崎）に住んでいました。その黒内坊というところに畑があり、よく行っていました。

黒内坊には塚があります。幅が約80m、長さが約400mの前方後円墳に近い格好をしています。（写真）

高さは東側より見て前方部10m、後円部20m、西側は谷で300mくらいの急な斜面になり、相当の高さに見える前方後円墳は自然の丘陵を利用したものです。周りの地質から見て、間違いなく人工物です。

地名から表現しますと、南に神南山、東に御祓（みそぎ）という地名があります。塚は神南山を南に前方が北を向いています。

私の祖母の話では、昔、五十崎には神様がいて、大変栄えていたそうです。そのために神南山という山の名前になったそうです。以上が子供の頃の知識です。

「魏志倭人伝」によると、女王の都するところに至るには、水行十日、陸行一月かかるそうです。学生時代に地図と睨めっこした思い出があります。結論は出ませんでした……。……

邪馬台国の北九州説、大和説並びに私の五十崎説は如何でしょうか。東征神話、残念ながら現状は1997年7月に高速道路の工事が始まり、古墳の中央を道路が走っています。工事中に私も立ち会いましたが何

も出土しませんでした。前方と後円部の丘は残っています。

（前方の丘の上で立っていますと後ろ髪を引かれるような不思議な体験を二度ほどしました。何かあるようです。）

「魏志倭人伝」によれば、卑弥呼は鬼道を事とし能く衆を惑わすシャーマンであったようです。古墳を見ていると相当の美人であったと思われる。

今後もこの事項の研究も継続したいと思っています。



東側より：左が後円部、右が前方。後ろの山は南神南山



北より後円部を見る：右に前方部、後ろの山は神南山

二神小学校の行く末に見る今後のこと

豊田 渉

明治の初め、島のお寺「安養寺」で始まったとされる二神小学校。その後、現在の集会所のある場所から、集落の小高い丘、そして、現在地へと場所を変えて来た。

その小学校も、現在、全校児童数は3人しかいない。教職員は、校長先生と教員2人と調理員との4人。教職員のほうが多い。これが現状である。

平成20年の春には、1人卒業するので2人になってしまう。そうなると、児童2人に対して教員は1人になってしまう計算だ。複式学級だからである。校長先生はいなくなり、教員は1人で出張・研修にも行けない。ひょっとすると、どこかの分校になったら、二神小学校はなくなってしまう。いくら古さ・伝統を重んじて、現実をどうすることもできない。

このようなことは二神島に限ったことではなく、全国のどこかにも同じような状況が多々あるだろう。そして、これから増加していく気がするのである。小さな地域から消えつつ、失われつつあるものがある反面、大きくなりすぎている地域もある。そのギャップは何なのだろう。そしてそれをどうすればいいのだろうか。

地域から学校が消え、郵便局や農協が縮小されていく。人情論よりも実利論であろうか。国の施策がただ悪いとだけは言えないが、あまりにも無体なことが多くなりすぎてはいないだろうか。市町村合併と銘打って日本から市町村が減っていった。「隅々まで行き届いた行政サービスをするために」というキャッチフレーズのもとに市町村合併は、推し進められてきたはずなのに、なかなかうまくいかない。

以前、伊豆大島を訪ねたとき、島の人たちが「都知事が、島同士の合併はするな。島同士が合併してもメリットはないのだから」と言っ

てくれたという話を聞いた。「もし、国が何か言ってきたら、都が何とかするから」という趣旨のことを話していたそう。どこの世界の話かと思ひながら聞いたのを思い出す。

現状では、二神島から学校がなくなるのは時間の問題である。人は減り高齢化は容赦なく進む。今更、子どもたちに「帰って来い」とは言えない。今から30年前、二神島の青年団を解散したとき、数人の有志でガリ版刷りの島の新聞「よもぎ」を作っていた。このままでは島の将来が危ない、島の人に島のことを知ってもらい、島から外に出ている若い人たちに島の現状をわかって欲しいという思いを込めて、島の出来事を中心にした新聞を月1～2回のペースで作り始めた。8年間続けさせてもらった。島の外には郵送した。その間、島のことがよくわかるとか、将来、島に帰りたいという意見を多く聞いた。しかし、現実にはほとんどが島には帰らなかった。

それは、多くの親御さんたちが、「島に帰ってこんなつらい蜜柑作りや漁業をしなくても、サラリーマンとして町で暮らしたほうがいい。帰らんでもいい。家を建てるなら、車を買うなら援助する」などの方法を選んだからではないか。中には、それでも島に帰ってやっていきたいという子どもたちもいたのだ。ただ、それをふりきって帰ってきた若者はほとんどいなかったのは残念としかいいようがない。

そのころ私は、島から船で中島の役場へ通勤をしていた。そしてよく言われたのが、「島はあんたらが守ってもらわんといかん」とか「いろいろやれるのはあんたが給料もろとるからできるんよ」というような言葉だった。言うこととやることが違うのではないかという思いもあったが、「それぞれの考え方があるのだから」と自分にいいかけながら島暮らしを続けていた。

私は、そのころ「なぜ、農業や漁業がだめなのだろうか」と考えていた。自分たちが、農業や漁業で立派に子どもを育ててきたではないか。むしろサラリーマンより立派に生きてきているのに、どうしてそれを子どもたちに、誇りを持って言わないのか。子供たちは、そんな

親の姿をきちんと見て育っているのにと思っていたのにである。我が家で考えてみても、島の小さな木造造船所でよくやってきたなと感じる。その跡を継ぐつもりで工業高校に進んだものの、結局は造船所閉鎖ということで役場勤めとなった。農業するにも土地はなく漁業をする自信も無かった。

このままでいけば、伝統文化は十分には伝わってはいかないだろう。その多くは消えてしまっている。その1つでも残し伝えて行きたいという思いが強くある。過去がこうだったからという思いは、今、更々ない。1つでも多く繋げていくことができるかを考えたい気持ちでいっぱいである。そのための準備を進めたい。

(2007.9.30記)



二神尋常小学校風景（昭和13年頃）

「ふたがみ」にまつわる話

(1) 二神島の近況

たった一日の^{ひとひ}絵画展 ～島に残る二神司朗作品展～

豊田 渉

平成19年10月7日（日曜日）午前11時にフェリーの臨時便が二神島に着いた。150人を超える人たちが上陸した。島の人口に匹敵するほどの人人。大事件である。

これは松山離島振興協会が開催した「四島クルージング」の一コマである。松山離島振興協会とは、平成17年1月1日に合併して新松山市になり、有人島が9つになったのを機に将来に向かって島の振興を図ろうという組織作りを行ったもの。定期的に島の産物の販売やイベントの開催などを通して島からの情報発信をしている。

その1ヶ月くらい前に、協会の事務局より「今度、怒和島・津和地島・二神島・釣島の四つの島を巡るクルージングをすることになった。怒和島と津和地島は秋祭りに参加し、釣島は灯台と海水淡水化施設を見学する。二神島では、祭りの日ではないし時間も限られているので、できれば二神司朗さんの絵を展示してくれないか」という話になった。

中島にある中島総合文化センターには、二神司朗さんの絵画を150点近く所蔵している。最初は、「それを借りて展示すればいいや」という思いだった。しかし、それじゃ面白くない。ふと、二神島で個人が所有している絵があることを思い出し、島の中を歩いた。開催の1ヶ月前だった。「お宅の絵を貸してください。島にある二神司朗先生の絵を一堂に展示したいんです。それも、1日だけですので……」と話しながら。歩いたことで、あちこちから情報が寄せられた。その結果、50点近くの作品を集めることができた。島の外に出ている絵もかなりあるらしい。総数はつかみきれない。

どの家を訪ねても「貸してやらん」という家は1軒もなかったのは、嬉しかった。個々のお宅では大切な物なのに。本当にありがたかった。新築・誕生祝いに贈られたものや購入されたもの。はがき大から新聞紙を広げたくらいの作品。スケッチ、水彩画、クレヨン画、油絵と様々だった。

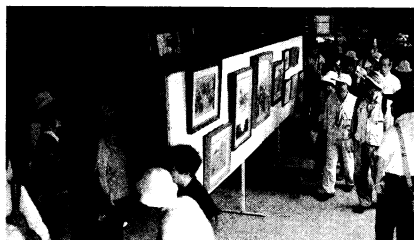
一番古いのは昭和7年（1932）の作品で、板に描かれた機帆船「鶴栄丸」だった。裏書によると、描かれた前年の昭和6年に購入し、二神島から三津浜を往復していた渡海船であった。それで、そのお宅は屋号を今でも「ツルエイマル（鶴栄丸）」という。

10月6日、中島総合文化センターから展示用のパネルを運び、島の各お宅から絵を借用していった。大切なものなので、その日は別の場所に保管し、当日（7日）の朝、パネルに掛けていった。当日になって、「うちにも1枚あるぞ。構わんぞ」というので借り受けた。数人で作業をしていると、どこからともなく島の人たちが集まってきた。やがて、そこへ臨時フェリーが入港し、150人の人たちも一緒になって、たった1日だけの絵画展は始まり、その2時間後に絵画展は終了したのである。大盛況な島の1日だった。

絵画展風景



「鶴栄丸」昭和7年（油彩）



(2) 1995年、二神島シンポジウムから

これは、1995年（平成7年）8月3日、二神島で開かれた「二神島シンポジウム」で、網野善彦氏が講演した内容を、「ジ・アース第40号より」抜粋したものを掲載させていただきました。（内容は当時のままです）

二神島の調査から見えてきたもの

網野 善彦（神奈川大学特任教授・日本常民文化研究所員）



二神島集落

私と二神島、二神家そして忽那さん

私が、最初に二神島に参りましてから、40年余りの年月が経ちました。その間、中島町をはじめ、二神司朗先生そして二神島の皆様には、いろいろな意味でご迷惑をおかけしてきたのですが、その島でこういう機会を与えられたことを大変光栄に思っております。

それはまことに感慨の深いものがあるのですが、それと同時に3年くらい前から、このシンポジウムに、是非、何らかの形で参加するよ
うにという熱心なお誘いを頂いておりました忽那さん。ついこの春に
もお目にかかったばかりの忽那さんが、この場にいらっしゃらないと
いうことは、まったく夢のようであり、大変な寂しさを覚えていると
ころでございます。

その忽那さんのご期待に沿うことができるかどうか、まことに心許
ないのですが、長年この島でのシンポジウムを夢見てこられた忽那さ
んにお応えできるよう、一生懸命にお話しをしてみたいと思ってお
ります。

私が最初に二神島に伺ったのは、1954年（昭和29年）の夏のことで、
日本常民文化研究所の一員として、漁業に関係した文書を調査するこ
とが目的でした。当時の島は、大変きれいで、浜が見事に続いており、
コンクリートの防波堤は、まったく記憶にありません。またその時、
現在は無人島になっている由利島にも渡ってみたのですが、まだイワ
シ網が非常に活発で、島は、大変な活気に満ち溢れておりました。そ
の時、二神家から拝借した文書は、中島町誌編纂のときに返却された
のですが、一部、手違いから未返却のままになっていました。

それをお返しするため、30年近く経った1982年（昭和57年）に、私
は再びこの島を訪れましたが、あの活気に満
ちた二神島を思い出し、人口の激減した島
の変貌（へんぼう）に本当にびっくりしてしま
いました。由利島も無人島になり、まったく
変わっていましたが、まだ、ミカンがたくさ
ん作られていたと思います。そうした状況
をお考えになっていたのでしょうか。その時、
二神先生は、古文書のすべてを我々神奈川大
学の日本常民文化研究所にお預けになったので
す。



網野善彦氏

(ジ・アース第40号より転載)

そして、昨年、町の大切な文化財である二神文書を、二神先生のご意志で正式に神奈川大学にお譲りいただきました。今はそれを大事に保存し、早く公開のできるように整理をしているところです。併せて、由利島を含む考古学の調査を鶴見大学の大三輪龍彦先生をはじめ、4人の専門家をお願いし、調査を進めています。

今回は、その補足調査のために大学生を含む30人ほどでこちらにお邪魔しているわけです。

二神島の百姓は海の民

さて、これまでの歴史は、基本的に「陸上史観」、つまり、陸地中心の見方に立って描かれてきたと思います。例えば、封建社会においては田畑を耕作している農民と、それを経済以外の力による強制によって隷属させ、地代を搾取する領主の関係が、社会の基本と考えられていました。しかし、こうした考え方は、最近の色々な研究の進行の中で、日本の社会の一面しかとらえていないことが明らかになってきています。二神島や二神家のあり方自体、今のような定式から大きくはみだしていることは、ちょっと考えればすぐにおわかりになると思います。

二神島の住民は海に依拠して生活しているわけですから、もちろん若干の農業をやっていたとしても、農民というより海によって生活している「海の民」と言わなければなりません。これまで、百姓は、何となく農民と考えられていましたが、「百姓」という言葉には、「のうみん」の「の」の字の意味も入っておりません。「一般の人」という意味しかなく、実際、二神島の百姓は農民ではなく海の民という方が実態に即していると思います。

ですから、二神家も、直営の田畑を持って農民を支配している領主ではなく、それとは全然違った仕方で、この島の百姓に対処していたと考えなければならないのです。

海の領主としての二神氏

もともと二神氏は、長門国豊田郡の大領、郡司の一族であったことがほぼ明らかになっており、遅くとも鎌倉時代の末には、この島に根拠を置いて二神を名字として名乗っていたことが、安養寺の般若経の奥書によって確認することができます。二神氏は、長門において宇佐八幡宮を信仰しており、これを島に勧請しています。

また、遠くからこの島をご覧になるとわかることですが、この二神島というのは、二つの山が信仰の対象になっていて、二つの神の島、二神島と呼ばれたのではないかと思います。この山とすぐには結びつきませんが、16世紀に妙見社と巖島社をまつる2つの海民の集団があり、その島に二神氏が入ってきて、今の二神家のある場所に本拠を定めたのだと思います。

この2つの集落の百姓は、年貢をほとんど銭で払っていますが、ナマコ、ヒジキ、カキなどの海産物、山芋、薪などの山の産物も二神氏を通じて領主に対して負担していました。このようにこの島の百姓は、主として漁撈を行う海民であり、おのずと島の領主二神氏は、従来の通説のような封建領主とはだいぶ性格の違う「海の領主」とでも言うべきあり方をしていたと思うのです。

海の領主は「海賊」と呼ばれることがありました。「神様へのお布施、初穂を置いてゆけ」と言って、通行する船から交通税を取り上げていたようです。それを見張るのが二神島の城山（じょうのやま）のような海域で、納めない船に対しては、積荷を差し押さえてしまいます。これが船の方から見れば、海賊ということになるわけです。つまり、海の領主は、海民である百姓を支配し、海産物を交易などを通して税金として取立て、かつまた、海域を根拠として船から交通税、関料を取り立てていたものと考えられます。

二神氏が海の領主であったことを示す史料は、二神家文書の中にも少ししかないのですが、同家には、数千枚の古銭が伝わっており、その中には、中国の宋、元、明の銭や朝鮮などの外国銭も入ってしまし

た。しかも、私が一番驚いたのは、日本が「鎖国」をしていた時代にあたる清銭があったことです。これは、清銭が寛永通宝と一緒に列島内を流通していたことを物語っていますが、これだけの外国銭を二神家が持っていたことは、同家の活躍した舞台が、瀬戸内海だけに限るものではなかったことを示していると思います。そして、中世には、日本列島をこえた範囲で活動していた可能性も大いにあると思うのです。

また「海の領主」は、陸の領主のように将軍との間に主従関係を結ぶような服属の仕方をせず、最初から統治権者である将軍の直属のかたちをとっていることに特徴があると思います。忽那氏は西国には珍しい本領安堵の地頭で、守護ではなく将軍家政所の直属だったようです。

由利島と二神島

次に「海の領主」の支配が、「陸の領主」のように田畑を通じた支配ではないということは、由利島と二神島の関係についても見えてくるのではないかと思います。

この由利島は、間違いなく海上交通の要地であったと思われます。その1つとして、長崎の美術館にある江戸時代の瀬戸内海の家図には、多くの島が描かれており二神島も形だけは描いてありますが、その傍らの小さな島にはひらがなで「ゆり」と書かれています。また、由利島には豊後崎という地名があり、豊後との関わりが非常に深いことがわかります。

また、由利島には「由利千軒」と言われたにぎやかな町があったという伝承があり、実際に「寺床」や「長者屋敷」などの地名が残っています。弥生時代の遺跡はすでに発見されており、由利島は弥生時代から中世にかけて日本列島及び列島外を含めて、交易の拠点として、交易が活発に行われていたに相違ないと思うのです。

二神家に残っている由利島に関する史料を見ますと、江戸時代の初

期に紀州の漁民、特に塩津浦の漁民が、新しい網場を開発し、発達した網の技術を持って、たくさん瀬戸内海に入り込んでいたことがわかります。由利島にも同様に、塩津浦の漁民が来ており、さらに、播磨や備中からも由利島に漁民が入ってきています。

ところが、元文6年（1741）には伊予郡から、明和5年（1767）には藩から、直々に由利島を肥草山にし、藩の直轄にしようという話しが出てきます。これは、水田開発が進んだための農業の論理に基づく



由利島全景

動きであったわけですが、この時の庄屋の二神新四郎は、「由利島は漁場の網場であり、山の産物もあり二神島住民450人の生命線なのだ」という海と山の論理で藩に立ち向かい、改めて由利島の領有が認められました。このように農業の論理に対し、海と山の論理が負けないで貫徹されたケースは、非常に珍しいと思います。そして、この時、二

神新四郎は自らを「莊官」と言っているのです。中世以来の島の領主の意識がそこに蘇ったものということができます。

この時、藩は方針通り、由利島の下草を伊予郡の刈敷とすることにしたのですが、その代わり、米450俵を二神島に下げ渡す契約を結んでいます。面白いことに、二神新四郎はこの米を松山に預け、これを元本として金融をやり、利息分を取るということを行っているのです。

陸上史観の過ち

このように二神島を見ていますと、日本の社会が内陸部の田と畑だけの世界だけではないということがよく分かります。実際、日本列島は3700以上の島から成り、その海岸線は28000キロにも及び、島と半島でできている国土です。山が非常に多く、埋め立てが非常に広く行われた現在でも、平野や台地はたったの25%しかありません。

その上にたって、日本は島国なので孤立している。島は離れ島であり、半島は陸の孤島であるというように不便だけが強調され、水田農地のないところ、米の食べられないところは貧しい後進地域だという考え方が、日本人の常識的な考え方だったと思うのです。こういう水田中心のとらえ方は、一面的で、この見方では決して列島の社会の全体をとらえることはできません。

人口の90%を占める百姓をすべて農民と見て、日本社会を農業社会と思ひ間違えたのも、完全にこの見方からであり、日本列島において、人類の歴史が始まって現在に至るまで、穀物を生産する農民が人口の半分を超えたことは一度もなかったと言ってよいと思うのです。ですから、農業がないから貧しくて遅れていたとは決して言えません。漁業、塩業をはじめとする非農業的な生産と交易によって、活発で豊かな生活を営んでいた島や半島は、日本列島の至るところにあるのです。

それにも関わらず、一面的なとらえ方から、日本の社会は農業社会であり、農業中心の国だから自給自足を確保しなければならないとして、水田を広げ、生命線を確保するのだとあって、台湾や朝鮮半島、

そして満州までも植民地にして水田を開き開拓してきたわけです。このやり方は、決して許されるべきやり方ではありません。それによって農業開拓が進み、向こうのプラスになったなどという人もいますが、これはまったく日本人の思い上がりでしかないと思います。このように水田中心主義、農業中心主義になると、日本は帝国主義的になってきたとすら言えると思います。

我々のなすべきこと

また、旧石器時代からの日本列島の社会の歴史の中で、交通体系が陸上交通を基本としたのは、明治以降と古代国家成立後のせいぜい5～60年であり、そのほかの時代は、海と川が基本的に交通路の中心でした。従って、二神島をはじめ、島は海上交通により四方の地域と恒常的に結ばれていたのです。このように多くの場合、島や半島は、交易や商業が活発に行われていた場所であり、豊かな都市的な性格を有したところだったのです。

確かに農業生産のみならず、開発を通して生産力を発達させることは、我々の生活を維持発展させるために不可欠なものでした。しかし、それにより、人間が自然を破壊し人間自身を滅ぼしうる力まで開発してしまったことも明らかになってきたのです。もはや現代は、生産力を発達させれば世の中は進歩するという見方だけで、歴史を見る時代ではないと思います。

物や人の動きを十分に見定め、地域のあり方をしっかりとらえた上で、その地域に即した色々な対処の仕方、生活のあり方、政治の方向を考えていかなければならないと、最近強く感じるのです。

繰り返して申し上げますが、これまでの日本の歴史は、陸中心・農業中心でした。その見方からは、勝利者は時代の生産力の先端を担ってきた人々であり、海や山の世界に生きる人たちは、遅れた人たちであり敗者であるとして切り捨てられてきました。

しかし、このように考えて直して見ますと、果たしてそれでよいのだ

ろうかと思うのです。これまでのような考え方は、根本的に考え直すべきであり、これまで敗者とされ、捨てて顧みられなかった世界の中に含まれている大切なものを、人間の今後の歩みの中に活かしていくことこそ、現代に生きる我々のなすべきことではないかと思うのです。

これまでの日本の社会に対する偏った見方を改め、正確に我々自身がいかなる時代に生きているのか、日本列島の社会はいかなる実態の社会なのかを正確に認識した上で、人類社会の中で、我々がなすべきことをはっきりと見定めて生きていく必要があると思います。

そのためには、島の社会の歴史、半島社会の歴史、山と山民の歴史、海と海民の歴史を、少なくとも、平地の農民の歴史と同じレベルにまでもっていき、正確な歴史認識を自分自身のものにしていく必要があるのです。

こうした問題について、この二神島シンポジウムが、これからの議論の中で、日本全体に向けて、新しい主張を発信できれば、お亡くなりになった忽那さんも満足していただけるだろうと考えております。

(了)



二神島シンポジウム (ジ・アース第40号より転載)

書籍紹介

「宮本常一写真図録 第1集」 瀬戸内海の島と町 広島・周防・松山付近

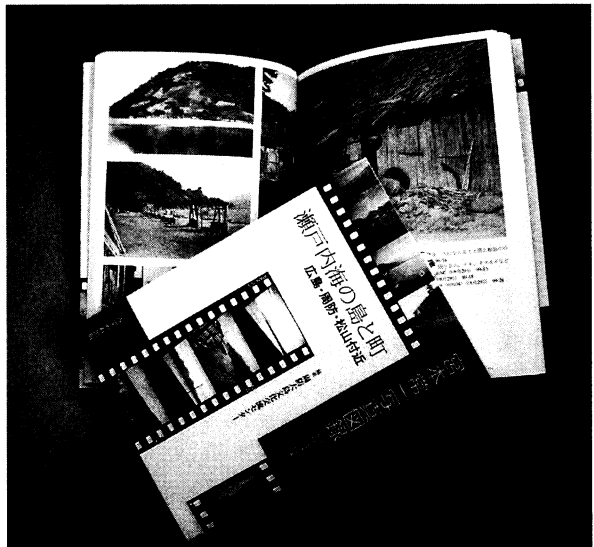
編者：周防大島文化交流センター みずのわ出版 1800円（税別）

今年は、民俗学者宮本常一の生誕百年にあたります。その生誕の地にある周防大島文化交流センター（山口県）は保管している約10万点の写真などを広く公開する目的で、年2回ほど写真による企画展示を実施しています。

2006年11月に写真パネルを展示しました。これには、著書「私の日本地図4 瀬戸内海Ⅰ 広島湾付近」（同友館、1968年）に使用された写真を中心に再構成しています。

今回紹介する図録は、それを元に再編したものです。A5版・約150頁で5編から構成されています。愛媛県関係は、昭和30～40年代の松山市内、忽那諸島が20ページにわたり、そのうち、二神島・由利島が8ページ紹介されています。また、本会の豊田常任理事が写真を通しての島への思いをつづっています。

古き良き島々の多様な姿・暮らしにふれると同時に、島々の未来に思いを巡らせてみてはいかがでしょうか。



「二神会」関西支部集いの会報告

中部・関西支部理事一同
筆者 二神 宏介

秋晴れの10月20日水都中之島中央公会堂に於きまして「二神会」関西支部集いの会を開催しました、以下会議報告をします。

信也理事の司会で午後1時より支部集いの会を開催しました。

宏介理事開会挨拶

2007年度は会場が18名定員の為、過去の会では20数名以上の会員のご参加頂いておりましたが、会場の都合で大阪、兵庫、奈良県に絞り案内しました。当日は日が良すぎたのか、結婚式、旅行、その他病気療養中の方も居られ10名の参加者と少し寂しい会になりました。又特別講師も入院されるアクシデントもあり、お詫びの挨拶になりました。

会長挨拶

浩三会長にご挨拶を頂きました。

開催に対するお祝いと労いの言葉を頂きました。

その後、「平成18年度秋の叙勲を受けての」の話をレジメに沿ってお話頂きました。昨年11月8日 瑞宝中綬章の栄を頂き、皇居宮殿「春秋の間」に於きまして天皇陛下の拝謁が行なわれたこと、赤坂プリンスホテルでの勲章伝達式での伊吹文科大臣（現官房長官）の話で印象に残った事。等のお話がありました。（法には触れないが、カネ、カネ、カネと悪いことを散々やってきた政治家が勲一等を授章する例は、枚挙に暇が無いから等々）最後に勲章・褒章を図解で説明頂きました。浩三会長の父上も受章されておられるそうですが、浩三会長の瑞宝中



綬章が1ランク上らしく申し訳ない!!でお話は終わりました。

英臣事務局長「二神系譜研究会」の歩み

英臣事務局長から、レジメによる2007年度総会以降の会の動向説明を受け、又 今後の予定等詳しく説明がありました。説明を聞くだけでなく時々脱線もありで和気藹々で進みました。

脱線1 残念な話は広島の劫昭氏(62歳)が若くしてお亡くなりになり、毎回お会いする度に今度の総会は広島で!!とか支部結成の情熱を持たれ、中部・関西支部に大変ご協力を頂いただけに残念です、ご冥福をお祈りします。中部・関西支部会でもこの2年間で数名亡くなっている事が判明し、会議を行なったことで、いろいろな情報も分かりました。二神系譜研究会会員も高齢化が進む中、明石市在住の二神啓太氏(昭和52年生まれ)若い人の入会希望者もあり、高知小才角ご出身という事で、栄三さんに入会促進の労を取って頂くことになりました。

脱線2 事務局長から石山本願寺はどの辺にあるんぞな!!

脱線3 松山に船ヶ谷、千舟町、湊町等、海に関係する地名が内陸部にあることの解明をしてみたい。それでは大阪では船場と言う地名があり大阪の中心地である不思議等についてはあとの「大阪蔵屋敷」「大阪の橋」項で説明します!!

途中休憩で、記念写真撮影

引き続き司会者より、自己紹介及び近況報告を参加者も皆様にお願ひしました。



信也さんの話し

今年になって髭を生やした逸話、人生観の変化等の話の後、提案として二神系譜研究会では硬すぎるので『二神会』にしてはとの意見が出ました。会員の中には「二神さん集まれ」で会員になった方も沢山居られます。事務局からも松山では正岡会、忽那会、仙波会の名称との説明もありとりあえず中部・関西支部会では通称「二神会」で案内をすることに了解を得ました。

又中部・関西支部総会は隔年開催の為、皆様との親睦を深める為、今後は毎年「二神系譜研究会総会」参加者の報告会とか新年互礼会とかで軽い食事会をしながら親睦を深める案にご賛同を頂きました。

久藏さんの話

元々先祖は宇和島藩の家臣であった話。

故郷の城辺町も市町村合併で町の呼び名も変わり、今後由緒ある名前が歴史上無くなっていくのを行政に正しても取り合ってもらえない話。

事務局長も北条が松山市と合併し同じような名前があるような話も出ました

末次三さんの自己紹介

8月に大分県から大阪に引越しされ、支部会員になって頂いたことに会員の皆様より大歓迎ですと（拍手）

大分で高級老人ホームに入居した経緯の話し、素晴らしい環境で（3食昼寝付の自由）即入居したが、自由の中の不自由（毎日決まった時間の食事、規則）等で考えることがあり大阪でマンションを購入し引っ越された事（我々の先行きを教えられた感がありました）

又会長から末次三さんは湿度に関し、日本のトップの方であることの紹介があり、過去の体験談、瀬戸大橋建設に係わった話（ペイント作業時の湿度管理、指示）の話では、やはり瀬戸内水軍の血が流れて

いるのかな!! 橋に二神氏の功績名は無いそうですが、功績を残された素晴らしい話でした。

敏郎さんの自己紹介

現在のお好み焼き、さっぽろ「風月」は当初は3坪の店から始め軌道に乗るまでは大変苦勞をし、今では、テレビで紹介されたり新聞の記事に載ったりと、やっと年商12億の売り上げまでになった苦勞話を赤裸々に話されました。

又昨年12月4日に松下PHS出版の経営者セミナーで台湾を訪問した際、台湾の父と呼ばれる李登輝前総統と丸山大飯店（ホテル）で親しく食事会をした話がありました。

喜久雄さんの話

幼少の頃からの苦勞話から現在までの生き様を生々しく語られお兄さんが生きていれば、私以上に「二神会」へ積極的に参加されたと思うと感情を込め語られた時は聞くほうも心が熱くなりました。

以上、参加者のお話がありましたが、皆様それぞれ話された言葉は過去の支部会では経験できない感動の会議でした。

宏介さんの自己紹介が抜けてんで!!

宏介さんは簡単な自己紹介の後、今回特別講師が2回も変わりどどのつまり、『大阪四方山話』の講師まで病氣入院と最悪の状態になり、筆者が間に合わせの講師として、皆様の話し時間により調整するつもりで「大阪蔵屋敷」「大阪の橋」のレジメを準備しました。話は会議の中での話を、摘み食いしながら約25分の簡単な話をしました。最初は事務局長から石山本願寺はどの辺にあるんぞな!! から、過去に高島先生の講演で瀬戸内水軍の講演を頂きましたが、パート2で今回、大阪城ボランティアガイドのトップの方に石山本願寺と木津川の戦い

「瀬戸内水軍と九鬼水軍」をお願いしていましたので、石山本願寺はどの辺の質問は「大阪城」のこと。海から遠いのはどうして石山本願寺まで物資が運ばれたか!!「大阪蔵屋敷」と「大阪の橋」の説明の前振りです。本題に入りました。

大阪蔵屋敷は高島先生の大阪歴史懇談会『中之島大阪蔵屋敷跡に浪速の繁栄を偲ぶ』『大阪の橋』は京阪フォーラム説明会から引用しています。

古い町家地図と現在の建物を合わせたら大名の蔵屋敷のあった所が良くわかります。川筋には九州、四国、中国、北陸の大名蔵屋敷が軒並みありますが、物を運んだのは武士ではありません。瀬戸の海を知り尽くした水軍衆では無いかと空想の世界にはまります。久留島藩蔵屋敷跡（二神氏関連）も朝日新聞社西側にあります。

高島先生に「瀬戸内水軍」の話聞いた際にも、ベトナム、中国、朝鮮まで交易し、略奪を行なった話も聞きました。事務局長の家にも中国の古銭があるそうです。（やはり海賊か!!）

事務局長の割り込み話では、久留島藩の船が瀬戸内で難破しており、乗り組んでいた二神氏の名前も残っており、現在も得能二神氏がお墓を守っているとの話も出ました。

（蔵屋敷跡の一部は現在、ルネサンス様式建物（中央公会堂）ネオバロック様式建物、ギリシャ神殿風玄関（大阪市中央図書館）ネオロマネスク様式建物（大阪ダイビル）ルネサンス様式建物（日銀大阪支店）と歴史的景観場所になっています）「大阪の橋」の話は十辺舎一九「東海道膝栗毛」で弥次喜多道中に出てくる江戸八百八町、浪速八百八橋から実際当時は200前後の橋で八百八橋になったのは1980年代だそうです。浪速の橋は町人橋が多く、江戸は公儀橋が多い、浪速の公儀橋の代表は天神橋、難波橋で町人橋の代表は淀屋橋（淀屋常安）とか商人が蔵屋敷との取引で自分の都合の良い橋を作ったのではないかと思われまます。

船場（大阪一の商業地）の由来も海運が大阪で発達した為、大川を利用して商人の町が発達したのでは!!

大阪の代表的建物中之島公会堂は岩本栄之助氏が個人の財産で建立し大阪市に寄付しています。（当時の金で100万円）

大阪城天守閣も大阪市民の寄付で建立しました。（当時の金で150万円 現在に直しますと750億円だそうです）

会長の言葉を借りましたら法には触れないが、カネ、カネ、カネと悪いことを散々やってきた政治家が勲一等を受章するではないですが、税金の無駄遣いで箱物を作ったり、公共事業を分取る政治家が感謝される時代に大阪市民の心意気がうかがわれます。

平成の大阪市民の寄付建物の代表は「天満天神繁盛亭」ではないでしょうか!! 民営による箱物の黒字の代表です。

大阪城について一言、（これも伝聞です）

不落の要塞「石山本願寺」跡に築いた豊臣大阪城は「大坂夏の陣」で焼失（1615年）。陥落後1620年頃から徳川氏の手によって、豊臣大阪城の上に盛り土をして再建されました。秀吉の城は7～10メートル地下に埋まっています。昭和6年に大阪市民の寄付で天守閣が再建されました。（現在の大阪城天守閣は、徳川氏の城跡に建っています）

大阪城陥落の悲劇は、秀吉が家康に生前ぼろっと漏らした一言、「堀を埋めれば大阪城はもろい」の言葉を実践したとの言い伝えもあるそうです。

最後の締めは宏介氏による「大阪手打ち」で4時55分終了しました。お手を拝借、打ちましょ（ちょうん ちょん）もひとつ（ちょうん ちょん）祝うて三度（ちょちょん ちょん）

懇親会は当館のレストラン「中之島倶楽部」でPM5時から開催

久藏さんの乾杯の音頭で素晴らしいディナーを2時間ゆっくり楽しみました。懇談の場も盛り上がったと思います。

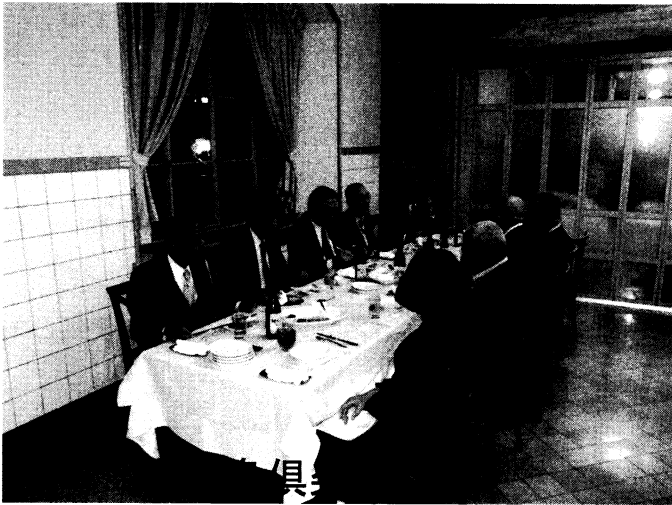
散会の挨拶は敏郎氏が締めました。

浩三会長、英臣事務局局長には、遠路ご参加いただきまして有難う御座いました。

又、ご参加いただきました会員の皆様に厚く御礼申し上げます。

支部会が終わっての感想一言。

二神系譜研究会で先祖の研究も大事だが、今の生き様を子孫に残し何代か後の子孫が、大正、昭和時代の先祖の苦勞が分かるような記録も残せたらな!! 会員の皆様「海の民」で残しませんか。



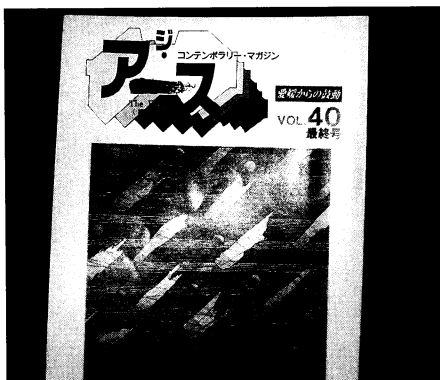
懇親会 (レストラン「中之島倶楽部」)

編集後記 その1

今回は第10号ということで、ひとつの節目でもあり、内容としては欲張り盛り沢山となった。そのなかで、二神島に関しては「海の民」という言葉の生みの親でもある故網野善彦氏（元神奈川大学特任教授・日本常民文化研究所員）の、二神島シンポジウムの講演録を御紹介するのが適当と思い掲載させて頂いた。

二神島シンポジウムは、平成7年（1995年）8月に二神島で開催されたが、これは、私と実質又従兄弟に当たる忽那修徳氏が同年5月に心筋梗塞で急逝したショックを跳ね除ける形で彼を取巻く有志が、困難を乗り越えて開催してくれた賜物であった。

忽那修徳氏は「ジ・アース」の雑誌編集長として多忙な仕事をこなす傍ら、平成3・4年頃から、網野善彦先生とコンタクトをとりながら、二神島でのシンポジウムを企画・立案し、あと数ヶ月でシンポを開催というタイミングのなかで忽然と旅だってしまった。ご遺族はもとより関係者の落胆はいかばかりであったろうか。しかしながら、彼を取巻く関係者のご尽力で無事シンポが成功したことは当系譜研究会にとっても大きな収穫であった。



（写真「ジ・アース最終号」表紙）

今更ながら、忽那修徳氏の情熱と先見の明には脱帽するばかりである。今回、「ジ・アース」の最終号から、本誌へ転載して頂くことについて、奥様の早苗さんに連絡をとり、快諾を得ることができた。奥様はもとよりお二人のお嬢様もお元気でご活躍されていることで一安心である。

さて、今回も予定より若干遅れて冊子第10号をお届けすることが出来ました。関係者の皆様のご努力に感謝申しあげます。有り難うございました。

2007. 11. 25

副会長 二神俊一

編集後記 その2

- 俊一副会長の続きではありませんが、私も忽那修徳氏との縁について、少し書かせていただきます。「ジ・アース」の発行に就く前に彼は、カメラマンとして活躍していました。昭和50年代に、中田和邦氏とのご縁で、所属していた写真スタジオの方たちと二神島を訪れ、磯遊びや釣りをしたことがありました。それが、彼との最初の出会いであり、それ以来何かとお世話になりました。先祖は、中島の吉木から来ているということを知っていました。その10年後、私は愛媛県まちづくり総合センターに2年間派遣されました。ちよくちよく、センターにも訪ねてこられ、またまた、お世話になることになりました。そして、10年前、私は島を離れ住所を松山市久米の地に構えました。彼の家とは、実に直線で約1kmの場所だったのに、訪ねたのは、彼の葬儀のときでした。忽那さん、ありがとうございました。今回、「ジ・アース」の一部を紹介させていただくこと、本当にありがたいものと感じています。
- 今、ヒット中の映画「ALWAYS 続・三丁目の夕日」を観ました。昭和34年の古きよき時代を舞台にし、家族の触れ合いを描いた心温まる人情あふれる映画でした。当時の日本の姿、特急こだま、完成したすぐの東京タワーなど、2年前の前作以上に仕上がっているように感じました。物質的には恵まれていない時代でしたが、お互いが助け合い、相手を思いやる気持ちが溢れていた昭和30年代。昨今は、何かと歪んだことが多いように思います。食品の偽装疑惑、汚職、殺人、詐欺など、人としてやってはいけないことが平然と行われています。自分だけよければいいということではなく、人を思いやる気持ちを持つことが大事なのだと、映画を観て感じました。
- さて、今回の第10号発行に際し、多くの方々より原稿をいただいたこと、感謝申し上げます。今回、惜しくも書けなかった方は次号に向けてよろしくお願ひいたします。

豊田 渉 2007.11.27